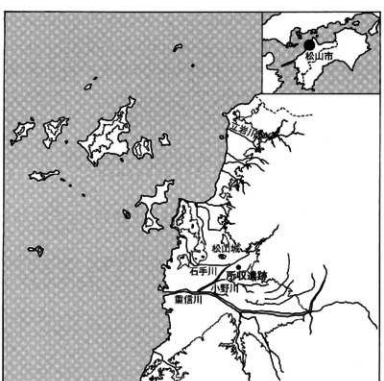
松山市文化財調査報告書 134

素鷲小学校構内遺跡
拓南中学校構内遺跡
中村長正寺遺跡
小坂七ノ坪遺跡

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

素鷲小学校構内遺跡
拓南中学校構内遺跡
中村長正寺遺跡
小坂七ノ坪遺跡



2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版 1　素鷲小学校構内遺跡出土須恵器鍋

巻頭図版２　素鷲小学校構内遺跡出土施釉陶磁器（上：青白磁合子、下：緑釉陶器埦）

序

本書は、昭和58年から平成元年にかけて、石手川中流域左岸の素鷲小学校・拓南中学校校区内において実施された発掘調査成果報告書です。

調査に至る要因には、校舎建設、共同住宅の建築といった、公共事業、民間開発の両者があり、その調査規模にも大小がありますが、それぞれの調査を総合し、また周辺における近年の調査成果も加えることにより、このエリアにおける弥生時代の集落のひろがり、あるいは古墳時代・古代の集落のありかた等が次第に明らかになりつつあります。調査では、素鷲小学校構内遺跡の古墳時代の住居から、当時ではあまり認識されることがなかった非陶邑系の須恵器が良好な状態で出土しました。この遺物は、その後、この種の須恵器に関する研究発展のきっかけとなり、現在でも一級の資料と評価されています。

今般その成果を公開するにあたりまして、関係各位にはひとかたならぬご協力をいただきました。心より感謝申し上げる次第です。

本書が、今後各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

平成21年3月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　　中　村　時　広

例　言

1. 本報告書は、松山市中村町・小坂・枝松の松山市立素鷺小学校・拓南中学校校区内において松山市教育委員会が実施した、4遺跡の調査をまとめた発掘調査報告書である。

2. 素鷺小学校構内遺跡は1983（昭和58）年、拓南中学校構内遺跡の調査は1984（昭和59）年、いずれも校舎改築に伴い、また中村長生寺遺跡は1985（昭和60）年、小坂七ノ坪遺跡は1989（平成元）年、共同住宅建築に伴う調査として実施された。

3. 遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、池田学（平成4年退職）、松村淳（平成5年退職）、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が行った。

4. 遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5. 遺物の縮尺は、土器を1/4にすることを原則とし、土製品、鉄器・鉄製品、石器・石製品を1/2で掲載している。

6. 使用した方位は磁北である。

7. 本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

8. 本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1
　1．環　境 …… 1
　　（1）地理的環境 …… 1
　　（2）歴史的環境 …… 1
　2．組　織 …… 3
第2章　素鷲小学校構内遺跡 …… 7
　1．調査の経過と組織 …… 7
　2．調査の成果 …… 8
　　（1）調査地の区割りと層序 …… 8
　　（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 8
　　（3）古墳時代の遺構と遺物 …… 15
　　（4）古代の遺構と遺物 …… 27
　　（5）中世の遺構と遺物 …… 37
　　（6）柱穴出土の遺物 …… 38
　　（7）包含層出土の遺物 …… 40
　3．小　結 …… 59
第3章　拓南中学校構内遺跡 …… 77
　1．調査の経過と組織 …… 77
　2．調査の成果 …… 78
　　（1）調査地の区割りと層序 …… 78
　　（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 82
　　（3）中世の遺構と遺物 …… 96
　　（4）包含層出土の遺物 …… 99
　3．小　結 …… 100
第4章　中村長正寺遺跡 …… 109
　1．調査の経過と組織 …… 109
　2．調査の成果 …… 110
　　（1）調査地の区割りと層序 …… 110
　　（2）弥生時代の遺構と遺物 …… 114
　　（3）古代の遺構と遺物 …… 128
　　（4）時期不明の遺構と遺物 …… 133
　　（4）包含層出土の遺物 …… 133
　3．小　結 …… 139
第5章　小坂七ノ坪遺跡 …… 153
　1．調査の経過と組織 …… 153
　2．調査の成果 …… 154

（1）調査の概要と層序 …… 154
（2）古墳時代の遺構と遺物 …… 156
（3）古代の遺構と遺物 …… 158
（4）包含層出土の遺物 …… 161
3．小　結 …… 163
第6章　まとめ …… 168

挿　図　目　次

図1　調査地と主要遺跡の位置 …… 2
図2　調査地と周辺の遺跡 …… 4
素鷲小学校構内遺跡
図3　調査地位置図 …… 7
図4　調査地の区割り …… 8
図5　遺構配置図 …… 9
図6　調査区東壁土層図 …… 11
図7　調査区北壁土層図 …… 12
図8　土坑SK1 …… 13
図9　SK1出土遺物 …… 14
図10　竪穴住居SB3 …… 16
図11　SB3出土遺物 …… 17
図12　竪穴住居SB10 …… 18
図13　SB10出土遺物 …… 19
図14　掘立柱建物SB2・SB2出土遺物 …… 20
図15　掘立柱建物SB4 …… 21
図16　SB4出土遺物 …… 24
図17　掘立柱建物SB6・SB6出土遺物 …… 24
図18　掘立柱建物SB8・SB8出土遺物 …… 25
図19　掘立柱建物SB9 …… 26
図20　土坑SK2・SK2出土遺物 …… 27
図21　掘立柱建物SB1 …… 28
図22　SB1出土遺物 …… 29
図23　SB5出土遺物 …… 29
図24　掘立柱建物SB7 …… 30
図25　掘立柱建物SB5 …… 31
図26　掘立柱建物SB11・SB11出土遺物 …… 33
図27　土坑SK5・SK5出土遺物 …… 34
図28　性格不明遺構SX1遺物出土状況 …… 35

図29　SX１出土遺物 …… 36
図30　SX２出土遺物 …… 37
図31　SD１出土遺物 …… 37
図32　土坑SK４・SK４出土遺物 …… 38
図33　柱穴出土遺物 …… 39
図34　Ｅ１区出土遺物 …… 40
図35　Ｗ１区出土遺物 …… 41
図36　Ｅ２区出土遺物 …… 42
図37　Ｗ２区出土遺物 …… 43
図38　Ｅ３区出土遺物（１） …… 45
図39　Ｅ３区出土遺物（２） …… 46
図40　Ｗ３区出土遺物（１） …… 47
図41　Ｗ３区出土遺物（２） …… 48
図42　Ｅ４区出土遺物 …… 48
図43　Ｗ４区出土遺物（１） …… 50
図44　Ｗ４区出土遺物（２） …… 51
図45　Ｅ５区出土遺物 …… 52
図46　Ｗ５区出土遺物（１） …… 53
図47　Ｗ５区出土遺物（２） …… 54
図48　Ｅ６区出土遺物 …… 55
図49　Ｗ６区出土遺物 …… 56
図50　採集・出土地不明遺物 …… 58

拓南中学校構内遺跡

図51　調査地位置図 …… 77
図52　調査地の区割り …… 78
図53　遺構配置図 …… 79
図54　調査区南壁土層図 …… 81
図55　SB１出土遺物 …… 82
図56　竪穴住居SB１ …… 83
図57　竪穴住居SB２ …… 85
図58　SB２遺物出土状況 …… 86
図59　SB２出土遺物（１） …… 87
図60　SB２出土遺物（２） …… 88
図61　SB２出土遺物（３） …… 89
図62　SB２出土遺物（４） …… 90
図63　土坑SK１・SK１出土遺物 …… 91
図64　土坑SK３ …… 92
図65　SK３出土遺物（１） …… 94

図66　SK３出土遺物（２）…… 95
図67　掘立柱建物SB３…… 96
図68　掘立柱建物SB４…… 97
図69　土坑SK２…… 98
図70　SK2出土遺物（１）…… 98
図71　SK2出土遺物（２）…… 99
図72　包含層出土遺物…… 100
中村長正寺遺跡
図73　調査地位置図…… 109
図74　調査地の区割り…… 110
図75　遺構配置図…… 111
図76　調査区南壁土層図…… 113
図77　竪穴住居SB１…… 115
図78　SB1出土遺物（１）…… 117
図79　SB1出土遺物（２）…… 118
図80　SB1出土遺物（３）…… 119
図81　SB1出土遺物（４）…… 120
図82　土坑SK１…… 121
図83　SK１出土遺物…… 122
図84　土坑SK２…… 123
図85　SK２出土遺物…… 124
図86　土坑SK３・SK３出土遺物…… 125
図87　土坑SK４・SK４出土遺物…… 126
図88　SD１出土遺物…… 127
図89　性格不明遺構SX２…… 127
図90　SX２出土遺物…… 128
図91　SB２出土遺物…… 128
図92　掘立柱建物SB２…… 129
図93　土坑SK５…… 131
図94　SK５出土遺物…… 132
図95　土坑SK６・SK６出土遺物…… 132
図96　SX１出土遺物…… 133
図97　包含層出土遺物（１）…… 134
図98　包含層出土遺物（２）…… 135
図99　包含層出土遺物（３）…… 137
図100　包含層出土遺物（４）…… 138
小坂七ノ坪遺跡
図101　調査地位置図…… 153

図102　調査地の区割り …… 154
図103　遺構配置図 …… 155
図104　調査区西壁土層図 …… 156
図105　溝SD２・SD２出土遺物 …… 157
図106　溝SD１ …… 158
図107　SD１出土遺物 …… 159
図108　土坑SK３・SK３出土遺物 …… 160
図109　包含層出土遺物（１） …… 162
図110　包含層出土遺物（２） …… 163
図111　溝SD１の想定ライン …… 163

表　目　次

素鷲小学校構内遺跡

表１　SK１出土遺物観察表　土製品 …… 60
表２　SB３出土遺物観察表　土製品 …… 60
表３　SB10出土遺物観察表　土製品 …… 61
表４　SB２出土遺物観察表　土製品 …… 62
表５　SB４出土遺物観察表　土製品 …… 62
表６　SB６出土遺物観察表　土製品 …… 62
表７　SB８出土遺物観察表　土製品 …… 62
表８　SK２出土遺物観察表　土製品 …… 62
表９　SB１出土遺物観察表　土製品 …… 62
表10　SB５出土遺物観察表　土製品 …… 63
表11　SB５出土遺物観察表　石製品 …… 63
表12　SB11出土遺物観察表　土製品 …… 63
表13　SK５出土遺物観察表　土製品 …… 63
表14　SX１出土遺物観察表　土製品 …… 63
表15　SX２出土遺物観察表　土製品 …… 64
表16　SD１出土遺物観察表　土製品 …… 64
表17　SK４出土遺物観察表　土製品 …… 64
表18　柱穴出土遺物観察表　土製品 …… 64
表19　Ｅ１区出土遺物観察表　土製品 …… 65
表20　Ｗ１区出土遺物観察表　土製品 …… 66
表21　Ｅ２区出土遺物観察表　土製品 …… 66
表22　Ｗ２区出土遺物観察表　土製品 …… 67
表23　Ｅ３区出土遺物観察表　土製品 …… 67
表24　Ｗ３区出土遺物観察表　土製品 …… 69
表25　Ｗ３区出土遺物観察表　石製品 …… 70

表26　E４区出土遺物観察表　土製品 …… 70
表27　W４区出土遺物観察表　土製品 …… 70
表28　E５区出土遺物観察表　土製品 …… 71
表29　W５区出土遺物観察表　土製品 …… 72
表30　W５区出土遺物観察表　瓦 …… 73
表31　W５区出土遺物観察表　石製品 …… 73
表32　E６区出土遺物観察表　土製品 …… 73
表33　W６区出土遺物観察表　土製品 …… 74
表34　W６区出土遺物観察表　鉄製品 …… 74
表35　採集・出土地不明遺物観察表　土製品 …… 74
表36　採集・出土地不明遺物観察表　鉄製品 …… 74

拓南中学校構内遺跡

表37　SB１出土遺物観察表　土製品 …… 102
表38　SB２出土遺物観察表　土製品 …… 102
表39　SK１出土遺物観察表　土製品 …… 104
表40　SK３出土遺物観察表　土製品 …… 104
表41　SK２出土遺物観察表　土製品 …… 105
表42　包含層出土遺物観察表　土製品 …… 106

中村長正寺遺跡

表43　SB１出土遺物観察表　土製品 …… 140
表44　SB１出土遺物観察表　石製品 …… 143
表45　SK１出土遺物観察表　土製品 …… 143
表46　SK２出土遺物観察表　土製品 …… 144
表47　SK３出土遺物観察表　土製品 …… 144
表48　SK４出土遺物観察表　土製品 …… 144
表49　SD１出土遺物観察表　土製品 …… 145
表50　SX２出土遺物観察表　土製品 …… 145
表51　SB２出土遺物観察表　土製品 …… 145
表52　SK５出土遺物観察表　土製品 …… 145
表53　SK６出土遺物観察表　土製品 …… 146
表54　SX１出土遺物観察表　土製品 …… 146
表55　包含層出土遺物観察表　土製品 …… 146
表56　包含層出土遺物観察表　石製品 …… 150

小坂七ノ坪遺跡

表57　SD２出土遺物観察表　土製品 …… 165
表58　SD１出土遺物観察表　土製品 …… 165
表59　SD１出土遺物観察表　石製品 …… 165
表60　SK３出土遺物観察表　土製品 …… 165

表61　包含層出土遺物観察表　土製品 …… 166
表62　包含層出土遺物観察表　石製品 …… 167

図版目次

巻頭図版1　素鷲小学校構内遺跡出土須恵器鍋
巻頭図版2　素鷲小学校構内遺跡出土施釉陶磁器（上：青白磁合子、下：緑釉陶器境）

素鷲小学校構内遺跡

図版1　掘削状況（北東より）
図版2　竪穴住居SB3検出状況（北より）
図版3　竪穴住居SB10遺物出土状況
図版4　SD1完掘状況（東より）
図版5　掘立柱建物SB2（北より）
　　掘立柱建物SB5（南東より）
図版6　SB7検出状況（東より）
図版7　SB8・9検出状況（南西より）
図版8　SX1遺物出土状況
　　SK4遺物出土状況（2）
図版9　完掘状況全景（北より）
図版10　SK1・SB3出土遺物
図版11　SB10出土遺物
図版12　SX1出土遺物、SK4出土遺物（1）
図版13　SK4出土遺物（2）、包含層出土遺物（1）
図版14　包含層出土遺物（2）
図版15　包含層出土遺物（3）
図版16　包含層出土遺物（4）

SX2検出状況（南東より）
SB3完掘状況（北西より）
SB10調査状況（北西より）
掘立柱建物SB1（北より）
掘立柱建物SB4（北より）
掘立柱建物SB7（東より）
掘立柱建物SB8・9（西より）
SK4遺物出土状況（1）

拓南中学校構内遺跡

図版17　調査前全景（南東より）
図版18　竪穴住居SB1完掘状況（南より）
図版19　SB2遺物出土状況（2）（北西より）
図版20　SK1検出状況（西より）
図版21　SK3遺物出土状況
図版22　完掘状況（1）（西より）
図版23　SB1出土遺物、SB2出土遺物（1）
図版24　SB2出土遺物（2）
図版25　SB2出土遺物（3）
図版26　SB2出土遺物（4）、SK3出土遺物（1）

調査区東部遺構検出状況（西より）
竪穴住居SB2遺物出土状況（1）（南より）
SB2完掘状況（北より）
SK1完掘状況
SK2遺物出土状況
完掘状況（2）（西より）

図版27　SK３出土遺物（２）
図版28　SK２出土遺物、包含層出土遺物
中村長生寺遺跡
図版29　調査前全景（南より）　掘削状況（西より）
図版30　竪穴住居SB１遺物出土状況（１）（北より）　SB１遺物出土状況（２）（西より）
図版31　SB１完掘状況（１）（北より）　SB１完掘状況（２）（北西より）
図版32　掘立柱建物SB２（南より）　SX２遺物出土状況（西より）
図版33　SK１検出状況（北より）　SK１遺物出土状況
図版34　SK１完掘状況　SK２検出状況（北より）
図版35　SK２遺物出土状況（１）（西より）　SK２遺物出土状況（２）（北より）
SK２完掘状況（北東より）
図版36　SK４調査状況（東より）　SK５調査状況（１）（東より）
SK５調査状況（２）（南西より）
図版37　調査区東部完掘状況（南より）　調査区西部完掘状況（南より）
図版38　SB１出土遺物（１）
図版39　SB１出土遺物（２）
図版40　SK１・SK２出土遺物
図版41　SK５出土遺物、包含層出土遺物（１）
図版42　包含層出土遺物（２）
小坂七ノ坪遺跡
図版43　掘削状況（西より）　遺構検出状況（１）（西より）
図版44　遺構検出状況（２）（東より）　調査状況全景（東より）
図版45　調査区西壁SD１土層断面（東より）　SD２調査状況（西より）
図版46　調査区西部完掘状況（南より）　調査区東部完掘状況（南西より）
図版47　SD２・SD１・SK３出土遺物・包含層出土遺物（１）
図版48　包含層出土遺物（２）

第1章　はじめに

1．遺跡をめぐる環境

（1）地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北束麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約4kmの通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、阿河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。本書で報告される各遺跡が所在する小坂、枝松、中村地区は、これらのうち石手川扇状地左岸の扇端付近、おおよそ海抜30mを前後する位置に載っている。

（2）歴史的環境

遺跡が位置する石手川扇状地左岸の遺跡を概観してみよう。このエリアでの遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るとされているものは、釜ノ口遺跡出土のナイフ形石器、有舌尖頭器があるが、弥生遺跡調査中の単独出土であり、所属時期比定が困難な遺物である。縄文時代の遺構・遺物も希薄であったが、近年、扇頂近くの樽味地区を中心とした遺跡群に属する東野森ノ木遺跡2・4次調査や樽味立添遺跡3次調査において晩期前半の土坑や溝が調査されるなど、樽味地区周辺での資料が蓄積されつつある。弥生時代前期の遺構もさほど多いわけではなく、愛媛大学農学部構内の樽味遺跡で溝や土坑など小規模な遺構が確認されている程度にすぎない。住居址等、目立った遺構が増えてくるのは弥生時代中期後葉以降のことである。樽味高木遺跡2次調査では中期後葉の小型方形住居、また樽味四反地遺跡5次調査では、やはり同時期の直径9mを測る大型竪穴住居が検出されており、同様の大型円形住居は中村遺跡にも調査例がある。後期に至って遺跡は格段に増加し、桑原・枝松・小坂・東本遺跡や釜ノ口遺跡など、石手川左岸の扇状地上の各エリアに展開している。なかでも、東本遺跡周辺には大型の竪穴住居が密集して存在することが知られており、4次調査では周提帯を持つ直径12mにも及ぶ大型円形住居SB203が調査されている。また、直径8.9mの円形住居SB302からは舶載破鏡の出土があることなどから、この東本遺跡を含めた桑原・枝松遺跡には後期後半の有力集団が想定されている。破鏡の出土は釜ノ口遺跡の8次調査にも例がある。後期の集落遺構は近隣にも展開しており、国道11号線沿線の中村松田遺跡では3次にわたる調査が行われ、そのうちの1次調査では竪穴住居

廃絶に伴うと考えられる土器の集中廃棄の状況が確認されている。

古墳時代の集落では、樽味高木・四反地遺跡等、樽味地区周辺に展開する遺跡群が注目される。これらの遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての集落遺構が濃密な分布を示していることに加えて、さらに注目される遺構に樽味四反地遺跡6次・8次・13次調査で検出された3棟の超大型掘立柱建物がある。これらはともに前期初頭に属する総柱の建物で、特別なエリアに突出した規模で設けられた神殿的建物である可能性を指摘されている。

古墳は、石手川に開析された高縄山系南西麓や後期を主とした古墳群が多く分布している。東野古墳群、畑寺古墳群などがそれであるが、石手川南の中位段丘上にも東野お茶屋跡古墳群などの中～後期の群集墳が分布している。また、この段丘の南西端近くの微高地上には経石山古墳・三島神社古墳といった前方後円墳が存在し、旧久米郡あるいは温泉郡域の首長墳として知られている。

古代では、樽味四反地遺跡5次調査が注目される。この調査で出土した奈良三彩子壺は、県内唯一の三彩出土例である。また、この調査では複数の陶硯や緑釉碗・皿を出土しており、先ほどの三彩も含めて流路出土資料ではあるが、通常の古代集落とは異なった遺跡の存在を推定させる資料となっている。また、本書で報告されるエリアの西側には、奈良時代以前に建立された伊予8ケ寺のうちのひとつ、中村廃寺の比定地である素鷲神社があり、かつて神社周辺一帯では瓦の散布がみられたという。

図1　調査地と主要遺跡の位置（S=1：25,000）

文献

『松山市史 第一巻 自然 原始 古代 中世』松山市 1992

宮本一夫ほか『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1980

梅木謙一ほか『桑原地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992

『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994

高尾和長ほか『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996

『釜ノ口遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997

高尾和長『樽味四反地遺跡－5次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002

相原清二ほか『東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2005

長井数秋ほか『三島神社古墳発掘調査報告書』松山市教育委員会 1972

『釜ノ口遺跡調査報告書』釜ノ口遺跡発掘調査団・松山市教育委員会 1973

小玉亜紀子『樽味四反地遺跡－6次調査－弥生時代～古墳時代編』松山市教育委員会 2003

『樽味四反地遺跡Ⅱ－6次調査－古墳時代中期～中世編』松山市教育委員会 2005

加島次郎ほか『市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2004

森 光晴「東野お茶屋台古墳群」『経石山古墳』愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

西尾幸則ほか『来住廃寺』松山市教育委員会 1979

2．刊行組織

松山市教育委員会　教育長　山内　泰

事務局　局長　石丸　修　　文化財課　課長　家久　則雄

企画官　仙波　和典　　主幹　森　正経

〃　古鎌　靖　　〃　森川　憲克

〃　岸　紀明

（財）松山市生涯学習振興財団　理事長　中村　時広

事務局長　吉岡　一雄

埋蔵文化財センター　所長　乃生谷博一

次長　折手　均

次長　重松　佳久

調査課長補佐（総括）　梅木　謙一

担当　調査係長　栗田　茂敏

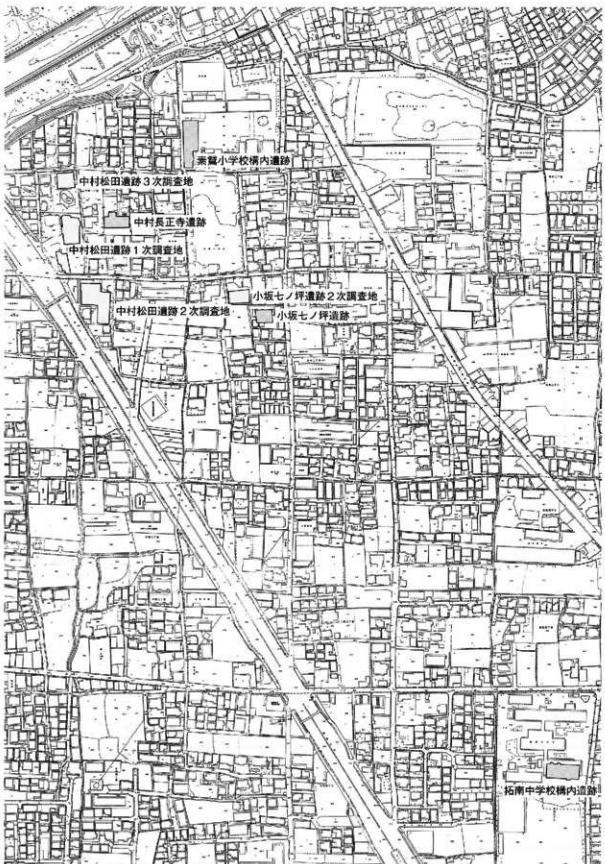


図２　調査地と周辺の遺跡（S=1：4,000）

第2章

素鷲小学校構内遺跡

第２章　素鷲小学校構内遺跡

１．調査の経過と組織

1983（昭和58）年、松山市教育委員会（以下、市教委）は松山市小坂一丁目所在の素鷲小学校構内において校舎の増築を計画した。増築予定地である校庭の1,200㎡部分は松山市の指定する文化財包蔵地、「108　中村町遺跡」のエリアに含まれる地点にあり、この場所については工事に先立つ発掘調査が必要と判断された。このため市教委は、同年６月29日より発掘調査を開始、およそ１ヶ月の調査期間を経た８月１日調査を終了した。

調査組織

松山市教育委員会　教　育　長　西原多喜男
　文化教育課　課　　長　藤原　　渉

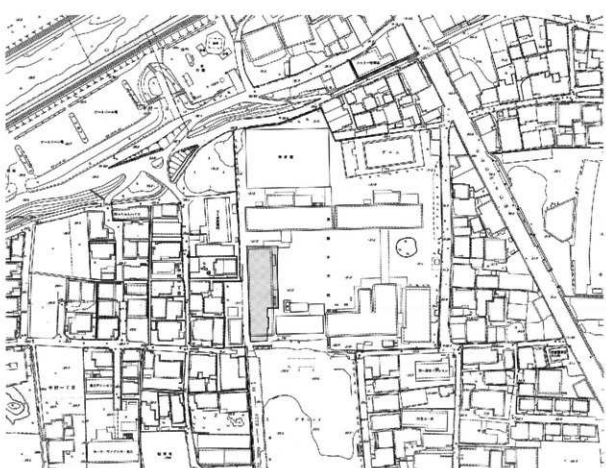


図３　調査地位置図（S=1：2,000）

課長補佐　坪内　晃幸
第二係長　大西　輝昭
主　　任　西尾　幸則
調 査 員　池田　学
　　松村　淳

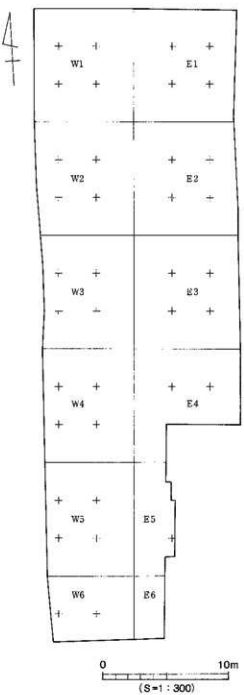


図4　調査地の区割り

調 査 地　愛媛県松山市小坂一丁目4－48
調査期間　1983（昭和58）年6月29日
　～1983（昭和58）年8月1日
調査面積　1,200㎡

2．調査の成果

（1）調査地の区割りと層序（図4～6）

グリッド割は図4に示したように、調査地の形状にあわせて9m四方の大グリッドを設定し、中軸ラインの東西でW区、E区の呼称を与え、それぞれのグリッドに、W1、W2…、E1、E2…というように、北から順に若い数字で枝番をふることにした。なお、遺物の採りあげに際しては、それぞれのグリッドを3m四方の小グリッドの9区に区分して採りあげている。

調査区は、旧校舎のための造成が全域にわたって80～90cm程度行われ、攪乱が深く及んでいる部分もかなりあった。上層の2枚の層はこの造成のための客土である。その下層には部分的に旧水田の耕土や床土が存在し、その下位に粗砂を含んだ第5層暗褐色シルト、その下層に第6層黒色シルトがある。遺構はこの黒色シルトを切った状態で検出された。第7層の茶褐色シルトが地山となっている。

（2）弥生時代の遺構と遺物

本調査で弥生時代の遺構と認定できたのは、前期の遺物を出土したE2区検出の円形土坑SK1のみである。

a. 土坑

SK1（図8）

円形に近い不明遺構SX2に切られている。2.3×2.3m

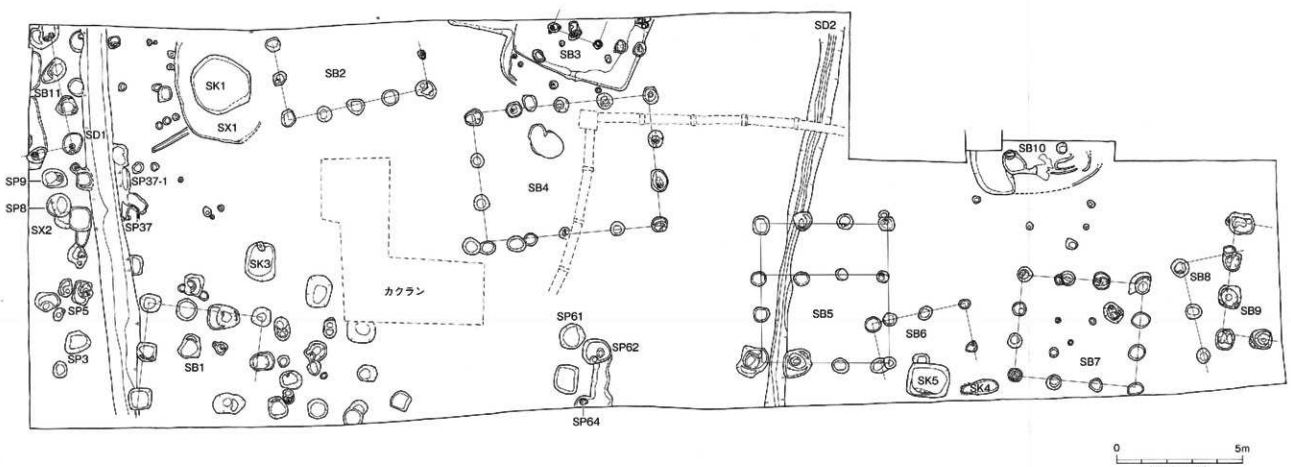
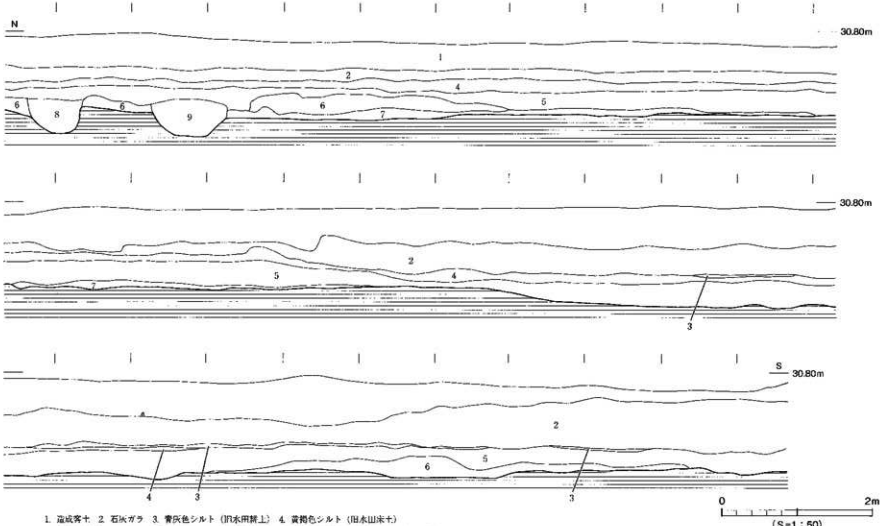

SD2
SB3
SB2
SK1
SB11
SX1
SD1
SP9
SP37-1
SP8
SX2
SP37
SK3
SP5
SP3
SB1
カクラン
SB4
SP61
SP62
SP64
SB10
SB5
SB6
SK5
SK4
SB7
SB8
SB9
0
5m
(S=1:150)

図5　遺構配置図



1. 造成客土　2. 石灰ガラ　3. 青灰色シルト（旧水田耕土）　4. 黄褐色シルト（旧水山床土）
5. 含粗砂暗褐色シルト　6. 黒色シルト　7. 暗茶褐色シルト　8. 含小礫淡褐色シルト　9. 粗砂＋小礫

図6　調査区東壁土層図

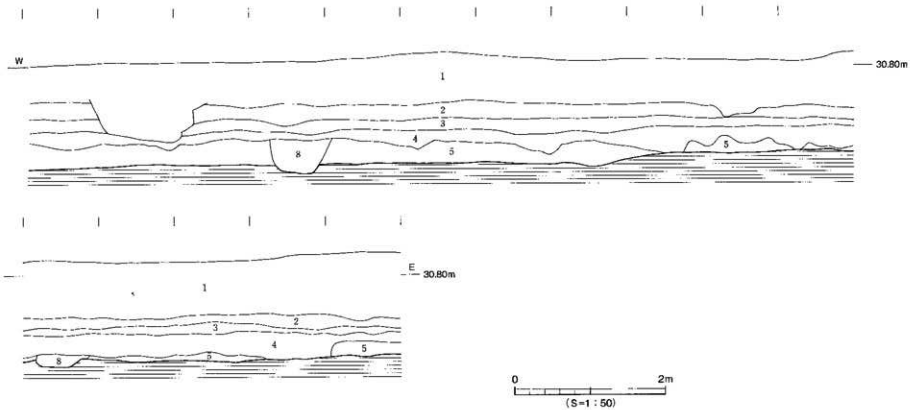


図7　調査区北壁土層図

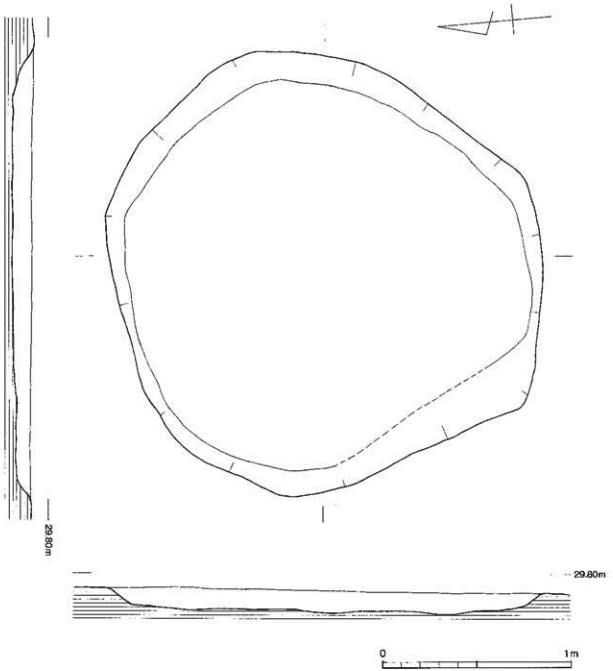


図8　土坑 SK1

程度の円形に近い平面形態、深さは10cmの遺存であった。混入と思われる土師器甕片や、弥生時代前期でもやや新しめの破片が1点あるが、その他の遺物は弥生時代前期前半のものであり、該期の遺構と考えられる。

SK1 出土遺物（図9）

弥生土器・土製品

壺（1～10）1・2は口縁部の小破片、1は大型壺で、口縁部下に段を有するものである。2は比較的強く屈曲するもので、次の3と同様の形態になるものと思われる。3は復元口径16.2cmを測る口頸

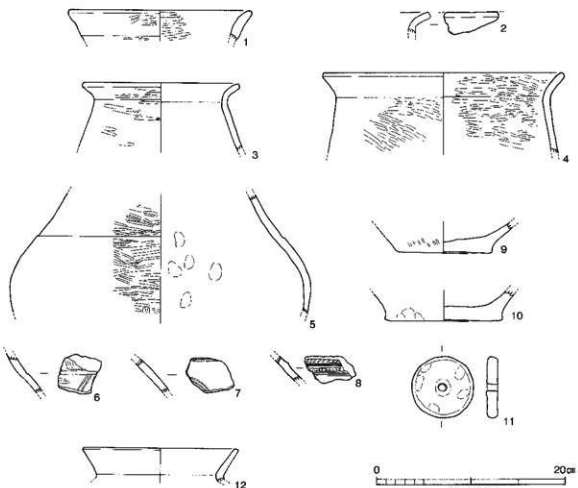


図9　SK1 出土遺物

部、直線的に内傾する頸部からやや強めに外方向に屈曲する口縁部形態をなす。外面は横方向に磨かれている。4も口縁部を外方向に折り曲げるものであるが、3に比べ頸部があまり傾かないものである。復元口径 25.0 cmを測る。5は屑部に段を持つ頸部から胴部の片で、外面を横方向に磨かれている。6～8は有文の屑部片、6は屑部に段を持ち、そのやや上位に段に平行な横方向の沈線、また段から斜め下位方向に2条の沈線を施されている。7にも2条単位の横走するヘラ描沈線と、その下位に斜め方向の弧状沈線が観察できる。8は、刻み目を持つきわめて低い削り出し突帯の上下位に、2条単位の細く浅い沈線、その上位の部分には突帯の刻み目と同様の斜線状の施文を持つ。9・10はともに安定感のある平底の底部で、10では外底面まで磨かれている。

紡錘車（11）　直径 6.4 cm、厚さ 1.2 cmの粘土板の中央に、直径 0.7 cmの焼成前穿孔を施して紡錘車としている。重量 65.92g を量る。

土師器

甕（12）　直線的に短く開く口縁部で、端部に水平な面を持つ、古墳時代中期の甕である。

（3）古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構には、竪穴住居と掘立柱建物、土坑、溝がある。掘立柱建物については、柱穴から古墳時代より新しい遺物を出土していないもの、また各々が検出されたグリッドでの包含層出土遺物のうちに古墳時代のものが多く含まれているものを該期の遺構として扱ったが、結果的にこれらの建物のうち1棟を除いて、その方位を磁北から西へ若干振る建物としてのまとまりをみせることとなった。建物については、すべて柱痕跡の確認ができていないので、正確なところは不詳であるが、約3°振るSB4を除いた3棟は、およそ8～9°西へ振っている。これらのすべてが倉庫建物である。なお、残りの1棟SB9は東におよそ6°振っている。土坑としたもののうちには、本来掘立の柱穴であるものを含んでいるかもしれないが、単独で存在し、古墳時代の遺物を出土するものは該期の土坑として扱った。

a. 竪穴住居

SB3（図10）

調査地中央東端で検出された方形住居で、西辺の長さで4.7mを測る。立ち上がりは削平され、ほとんど消滅している。西辺から南辺にかけての床面が幅広の溝状に窪んでいるが、住居の構造にどのようにかかわっているのかは不詳である。図示した柱間1.85mの柱穴を拾って、4本柱の復元を考えている。

SB3出土遺物（図11）

土師器

甕（13～16）　胴部上半から口縁部まで残る16は、球形の胴部にやや内湾気味に短く外に開く口縁部を持つ。胴部外面が斜め方向のハケ目、内面は撫でにより仕上げられている。口頸部13～15も、16と同様の形態をなす甕の一部である。13、15、16の口端部が水平あるいは内傾する面をなすのに対して14では丸く収められていたり、15の口縁部の内湾が強いのが異なる点である。

鉢（17）　やや外反しながら端部へむけてすぼまる口縁部。これに続く胴部はボウル状の形態をなすものと思われる。

甑（18）　把手部分の片である。

須恵器

坏（19～22）　19～21は蓋、口縁部と天井部境に稜を持つ19、21のうち、19のそれはやや鈍い。20には稜などは認められず、口端部も単純に尖り気味に丸く収められている。22は身の片で、立ち上がりを欠くが、内傾気味に立ち上がるものと思われる。底部に、他の製品との溶着がある。

高坏（23・24）　23は、短脚一段透かしの脚部片。裾端部直近に鋭い突帯が1条巡る。24は、長脚二段透かしと思われるものの坏底部片で、外面に斜線文が施されている。透かしは3方向に施されているようである。

弥生土器

壺（25）　平底の底部片。

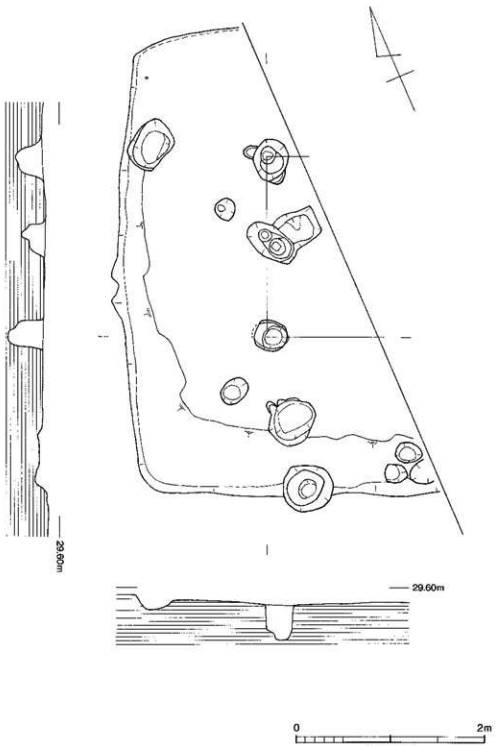


図 10　竪穴住居 SB3

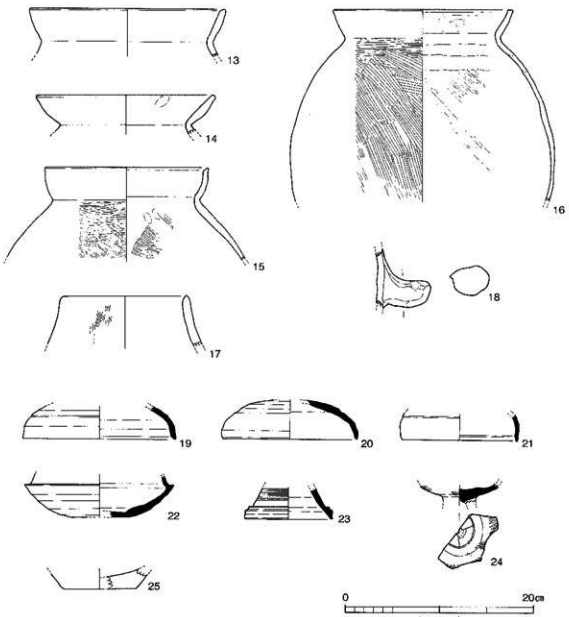


図 11　SB3 出土遺物

SB10（図 12）

調査地南部の東端でその一部が検出された。配管等の攪乱によりその大部分が破壊されているが、およそ一辺 5m 程度の隅丸方形プランの住居になるものと考えられるが、検出されたのはその西 1/4 程度で、よく残っている部分での立ち上がり 5 cm程度と詳細は不詳である。この遺構より土師器類とともに非陶邑系の須恵器鍋の出土をみている。

SB10 出土遺物（図 13）

土師器

甕（26・27）　口頸部 26 と上半部 27 がある。26 の口縁部は、内湾気味に外傾し、端部に水平な平坦面を持つ。27 は球形の胴部から直線的に外に開く口縁部を持ち、端部を丸く収めている。

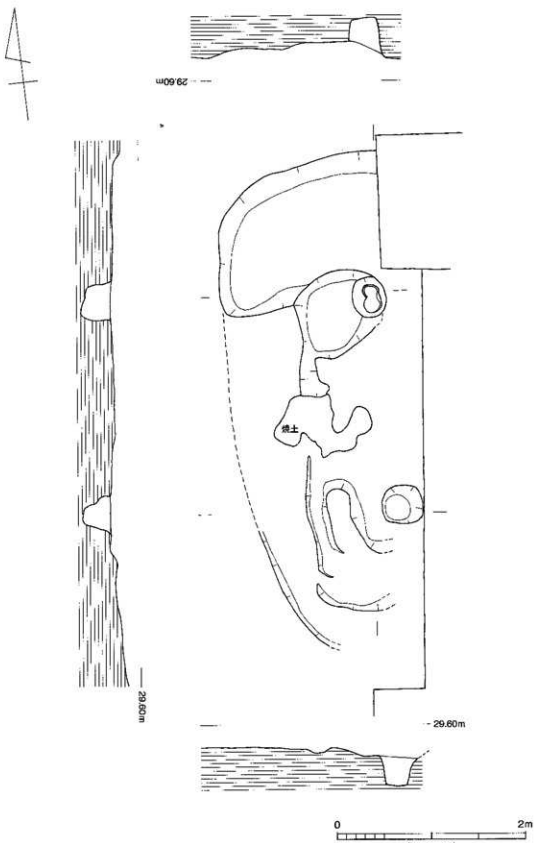


図 12　竪穴住居 SB10

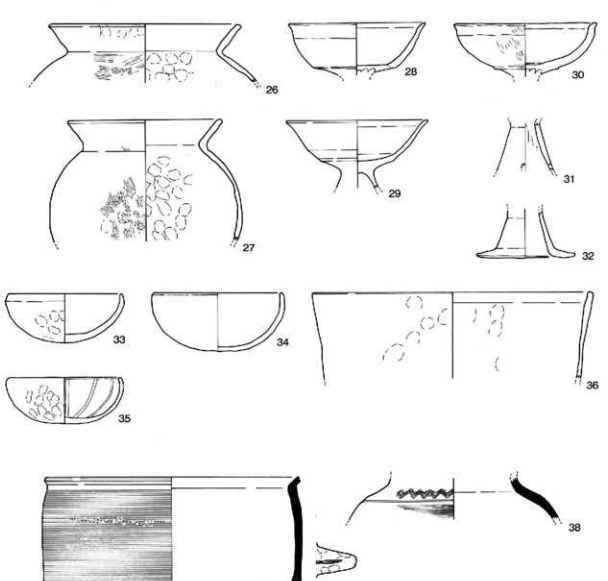


図 13　SB10 出土遺物

高坏（28 ～ 32）　坏部 28 ～ 30 のうち、28・29 は坏底部と口縁部の境に稜を持つもの、30 は埦形の坏部形態をなすものである。口径 14.2 cmを測る 28 の稜は鈍く、30 のような埦形の坏部に近い形態をなす。29 は比較的しっかりした稜を持ち、径 14.6 cmを測る口縁部は大きく外に開いている。30 で口径 15.0 cmとなっている。脚柱部片 31 には円孔が 1 箇所確認できる。32 の脚裾部は、強く屈曲し、端面全体で接地する。

鉢（33 ～ 35）　いずれも埦形をなすものである。33 は器高 5.2 cm、口径 12.0 cm、34 で器高 6.1 cm、口径 13.9 cm、35 は器高 4.9 cm、口径 11.6 cmとなっている。どの個体も内面を磨きや撫でによって丁寧に仕上げられている。35 には、幅 0.5 cm程の暗文が放射状に施されている。

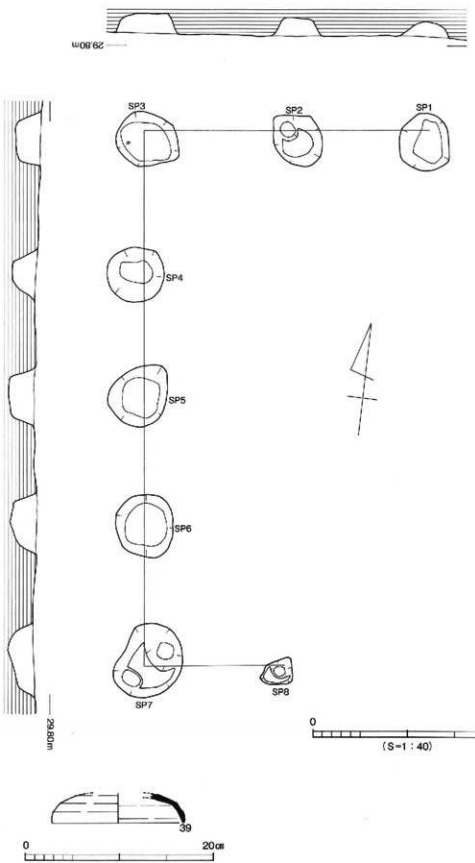


図 14　掘立柱建物 SB2・SB2 出土遺物

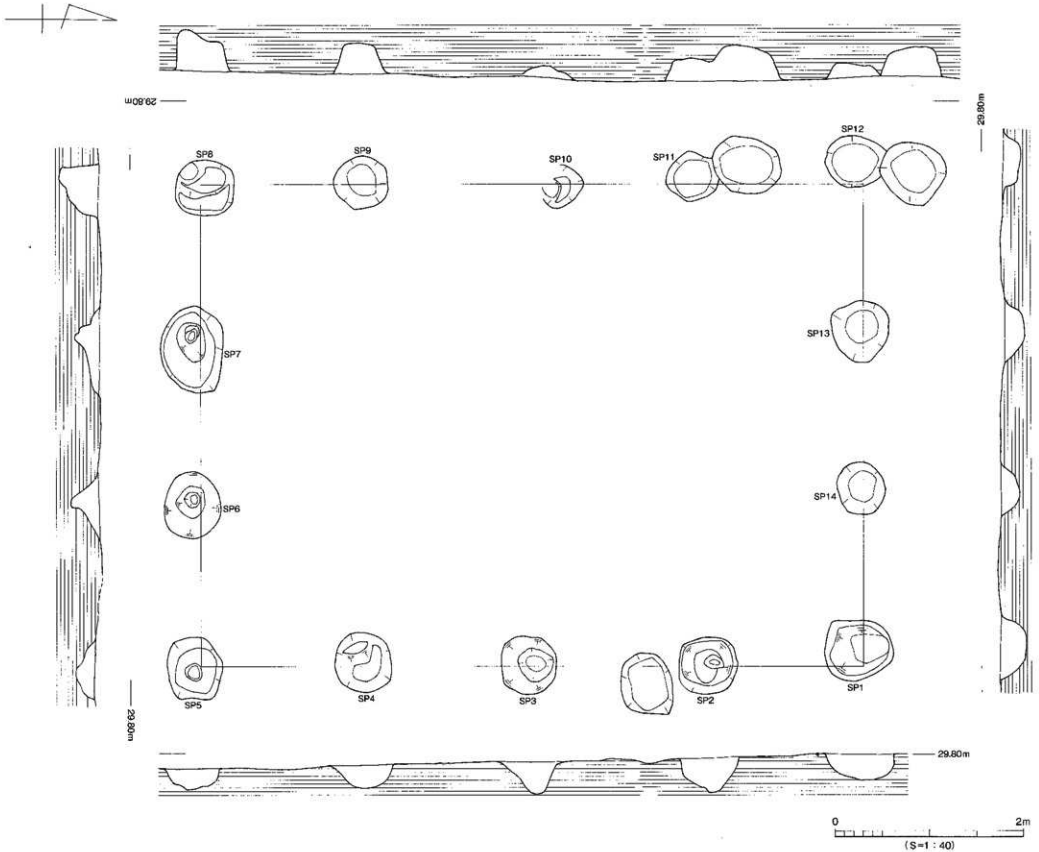


図 15　掘立柱建物 SB4

甑（36） やや外開きの口縁部片。

須恵器

鍋（37） 器高23.2㎝、復元口径26.8㎝を測る把手付の鍋である。丸みを帯びた平底、口縁部は短く外上方に折り曲げられ、口端部は凹線状に窪む。胴部の中位よりもやや下の対向する2箇所に角状の把手を持つが、この把手の上面には貫通寸前の深いスリットが入れられている。外面に0.5㎝四方の格子叩きを施した後、把手部分のやや下位から上をカキ目調整している。

壺（38） 肩部の片。櫛描波状文の下位に細沈線を1条施し、その下位をカキ目調整している。

b. 掘立柱建物

SB2（図14）

E2区検出の桁行4間、梁行2間以上になる南北棟の建物。SP5から須恵器坏蓋片の出土がある。桁行柱間1.40m、総長5.60m、梁行柱間1.50m前後になるものと思われる。この調査区出土の包含層遺物としてとりあげられているもののうち、弥生土器や古代の土師器は、本来隣接するクリッドのSK1、SX1に伴っていたものと考えられ、その他の古墳時代遺物、柱穴遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

SB2出土遺物（図14）

須恵器

坏（39） 復元口径14.0㎝の蓋片である。口端部は単純に丸く収めている。

SB4（図15）

そのほとんどがE3区におさまる範囲で検出された建物で、桁行4間、梁行3間の建物である。おおよそ柱間1.73～1.75m前後、7×5.2m規模の南北棟である。柱穴出土、あるいはE3区包含層出土の遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。

SB4出土遺物（図16）

弥生土器

壺（40） SP8出土の口縁部片。外反しながら大きく開く口縁端部内面に、櫛描波状文を施している。

土師器

甕（41） SP4の出土。比較的強く内湾しながら外に開く口縁部の破片で、端部を丸く収めている。

須恵器

坏（42・43） 42はSP1出土、復元口径11.2㎝の蓋で、尖り気味に丸く収められた口端部の内面に沈線を1条巡らせている。SP5出土の43は、復元口径10.6㎝の身である。内傾する短い立ち上がりは、やや内湾気味に伸びている。

蓋（44） 短頸壺の蓋であろうか。口径のわりにやや深さのある蓋で、端部を内傾に突出した平坦面に仕上げている。SP4出土。

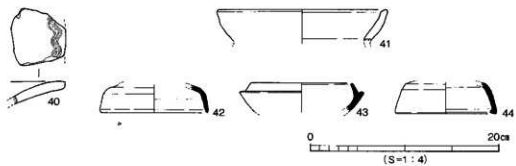


図 16　SB4 出土遺物

SB6（図 17）

柱間の見た目に若干バラツキがあるので、検討を要するが、2 × 2 間以上の東西棟として調査されている。南北 2 間 3.95m、柱間 1.97m 程度であれば図示した柱穴が拾える。東西は 1 間分しかないが、1.70m 程度の柱間になる。古墳時代後期の建物であろう。

SB6 出土遺物（図 17）

須恵器

坏（45）　SP5 出土の身小片である。短く内傾する立ち上がりを持つ。

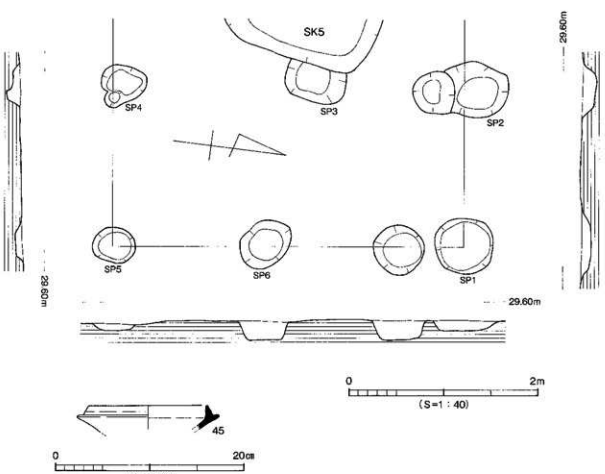


図 17　掘立柱建物 SB6・SB6 出土遺物

SB8（図 18）

調査区南端近くの W6 区で、古墳時代の建物 SB9 を切って検出された。東辺と北辺の一部が検出されたのみである。南北 1 間以上、柱間 2.0m、東西 2 間以上、柱間 1.8m、古墳時代後期の建物と考えられる。

SB8 出土遺物（図 18）

須恵器

坏・高坏（46・47）46 は SP1 出土の高坏蓋である。直径 3.4 cmの中窪みのつまみを持つ。47 は蓋口縁部で、天井部との境に鈍い稜を有する。口端部は段を持った斜めの面をなす。SP4 出土。

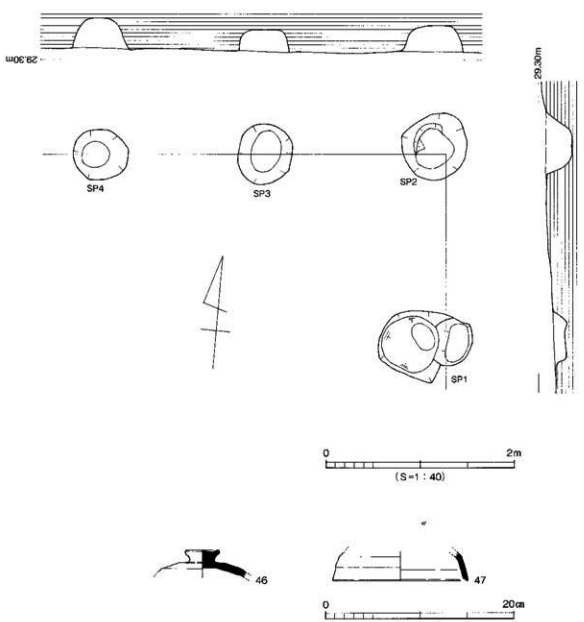


図 18　掘立柱建物 SB8・SB8 出土遺物

SB9（図19）

調査区南端のW6区で掘立SB8に切られて検出された。北辺の梁行3間分と、東辺の桁行1間分が確認されている。梁行柱間はおよそ1.5m、桁行柱間は1.7m程度になるものと思われる。図化可能な遺物の出土はなかったが、弥生土器片や、古墳時代の須恵器、土師器の小片を出土しており、これらからすれば、SB8に切られるとはいえ、あまり大きな時期差はなく、やはり古墳時代後期の遺構と考えられる。

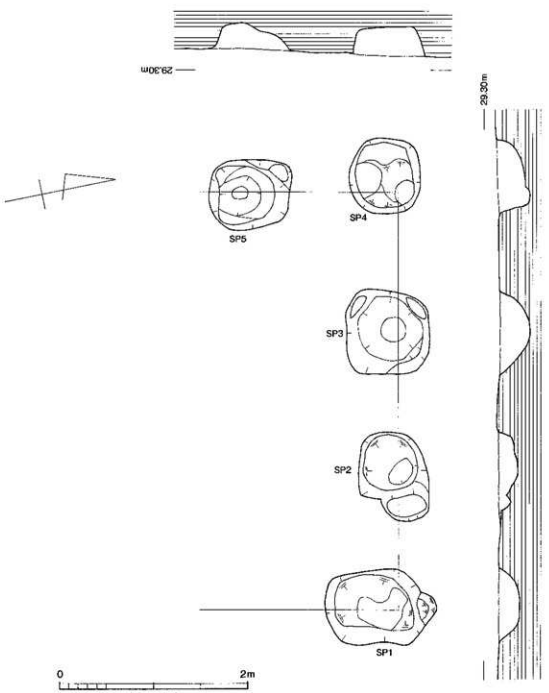


図19　掘立柱建物SB9

c. 土　坑

SK2（図 20）

W2 区北西端で検出された 0.7 × 0.9m の隅丸長方形状をなす土坑で、深さ 0.4m の断面逆台形状をなすものである。本来、建物の柱穴であったものかもしれないが、建物として捨えなかったので、土坑として扱っている。出土遺物によれば、古墳時代後期のものである。

SK2 出土遺物（図 20）

須恵器

坏（48）　短く内傾する立ち上がりを持つ小破片である。

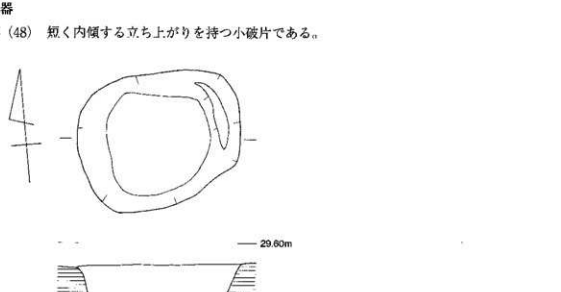


図 20　土坑 SK2・SK2 出土遺物

（4）古代の遺構と遺物

古代の遺構には掘立柱建物と土坑、溝に加えて、プランとしての把握はできなかったが、まとまった遺物の出土から本来なんらかの遺構が存在していたと考えたほうがよいものがあり、これを不明遺構として扱った。掘立柱建物は、いずれも柱痕跡の確認ができていないが、古墳時代のものと異なり、多くがその方位を磁北から東へ振る建物となっており、9 ～ 10° の範囲にあるものが 2 棟、4° 程度のものが 1 棟となっており、当地の磁北と座標北との関係からいえば、座標北に近い方位を指向する建物群ということになる。その他、SB11 とした建物のみが西におよそ 9° 振れている。

a. 掘立柱建物

SB1（図 20）

調査地北西部の W1 区にそのほとんどがおさまる建物で、南北 3 間、およそ柱間 1.5m、総長 4.5m、東西は柱間 1.9m 前後の 2 間を越える側柱建物である。磁北から東へおよそ 10° 振っている。出土遺物からすると、8 世紀代の遺構と考えられる。

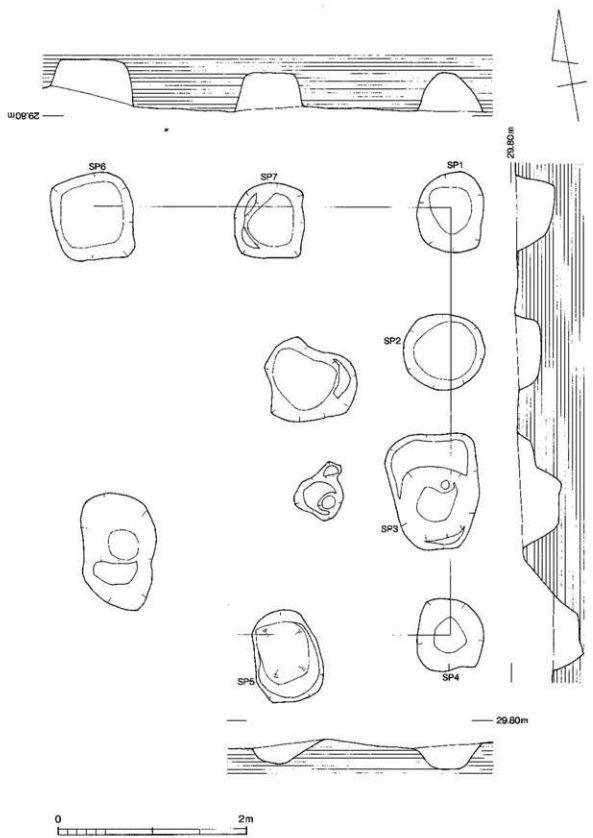


図 21　掘立柱建物 SB1

SB1 出土遺物（図 22）

土師器

皿（49） SP3 出土、復元口径 11.8 cmの皿。底部と口縁部の境を軽く面取りされ、口縁部は強く外反して外に開く。

坏（50） 貼り付け高台を持つ底部片。接地面は、やや丸みを帯びている。SP2 出土。

須恵器

坏（51・52） 51 は SP2 出土の口縁部片。端部をやや外反、尖り気味に収めている。SP5 出土の 52 は底部片で、高台端面は中窪みの面をなす。

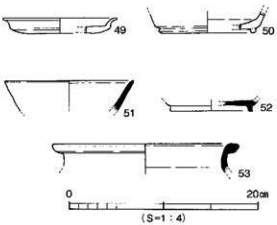


図 22 SB1 出土遺物

甕（53） これも SP5 出土の口縁部片。端部を外側に折り曲げて、玉縁状の口端部としている。上面には水平に近い平坦面がある。

SB5（図 25）

W4 区検出の建物である。梁行 3 間、柱間 1.7m、総長 5.1m、桁行 3 間、総長 5.5m の東西棟で、東 1 間分を間仕切るものか、もしくは桁行 3 間、梁行 2 間の身舎東面に 1 間分の庇を備える南北棟になる建物である。いずれにしても、東 1 間分のスパンが 2.0m とやや長めである。東辺の柱穴に比べて、内側の柱穴がやや規模が小さめであることからすると、前者の可能性が高いか。磁北から東へ約 4° 振る。図化はできなかったが、SP12 より 8 世紀代の土師器皿、もしくは坏の口縁部を出土している。

SB5 出土遺物（図 23）

弥生土器

壺（54） 平底の壺底部片、SP11 出土。

須恵器

坏（55 ～ 57） 55 は SP3 出土の蓋。器高の低い比較的単純な形態のものである。56 は SP11 の出土。天井部と口縁部境に稜を持つ。口端部は鈍い段を持った斜めの面に仕上げられている。57 は短い立ち上がりを持った身の破片、SP1 の出土。

高坏（58） 長脚二段透孔高坏脚の基部片。透孔は 3 方向に復元できる。SP11 出土。

石製品

剥片（59） SP9 出土サヌカイト剥片である。

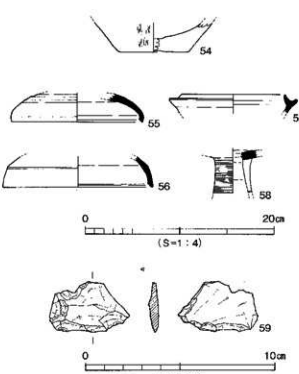


図 23 SB5 出土遺物

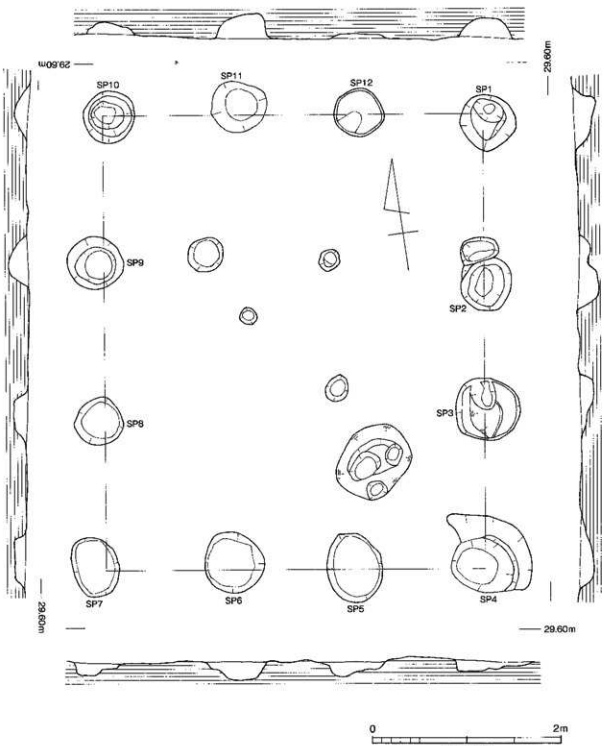


図 24　掘立柱建物 SB7

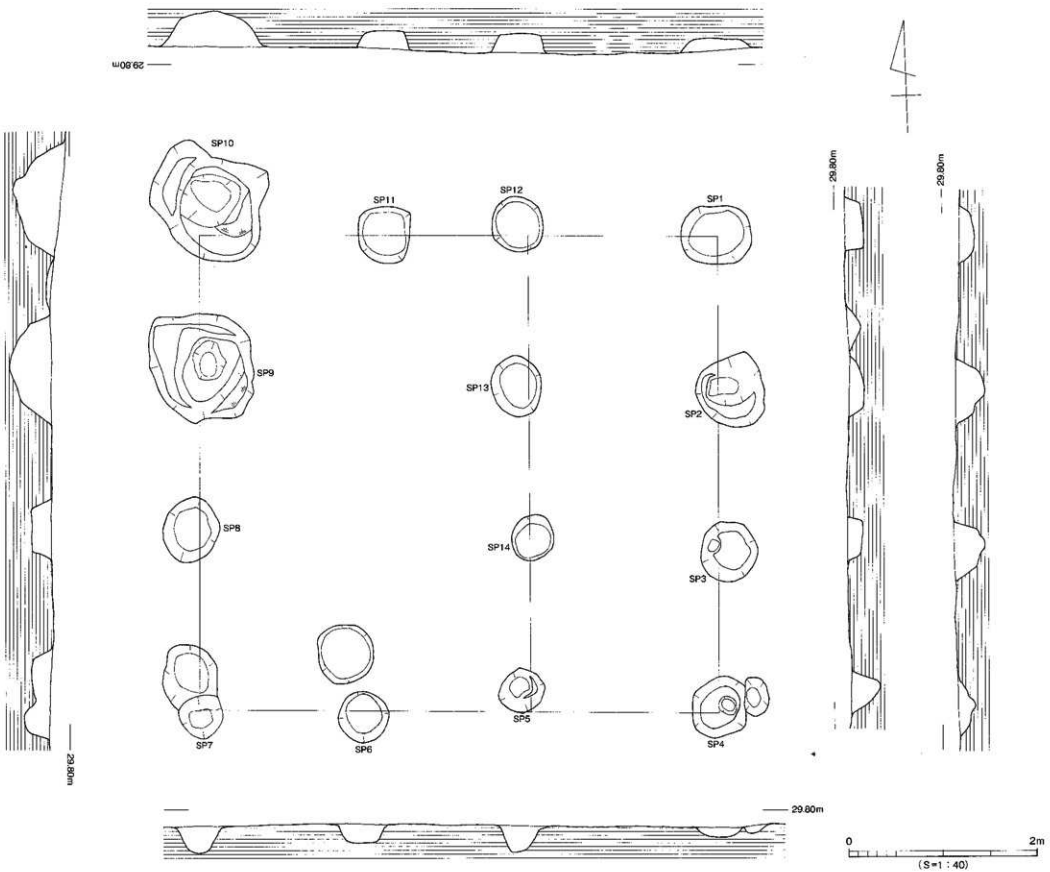


図 25　掘立柱建物 SB5

SB7（図24）

W5区検出、3×3間の側柱建物である。桁行1.8m等間の総長4.8m、梁行1.33m等間の総長4.0m程度に復元することができる。磁北から10°程度東に振っている。柱穴からの遺物の出土はない。このグリッドの包含層からは、縄文土器を除くと、5世紀末の須恵器、8世紀代の須恵器や、最も量が多い遺物として10世紀代の土師器・須恵器、その他12世紀代の青白磁、16世紀代の備前焼等、多彩な遺物の出土がある。量的に最も多い回転台土師器、10世紀代の遺構であろうか。

SB11（図26）

調査地北東隅、E1区でその南辺3間と西辺の1間分が検出された。いずれの辺も柱間1.5m、古代の建物としては、この建物だけが方位を磁北から西に振っている。柱穴出土遺物のうちに、回転台土師器坏を含むので、10世紀代の遺構と思われる。

SB11出土遺物（図26）

弥生土器

甕（60） SP3出土。やや上げ底の後期の甕底部。

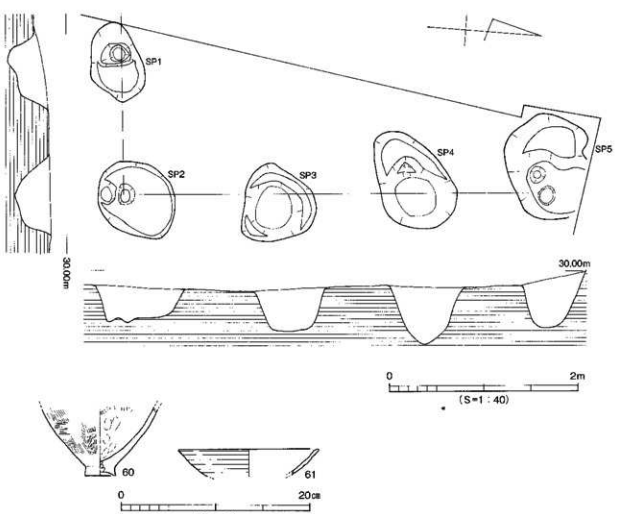


図26 掘立柱建物SB11・SB11出土遺物

土師器

坏（61） 多段撫でによる坏の口縁部片。SP2 出土。

b. 土 坑

SK5（図 27）

W4・5 区にまたがって検出された 1.3 × 1.6m 規模の隅丸長方形プランになる土坑で、深さ 0.4m を測る。部分的にテラス状になる箇所を介して、坑底はフラットになっている。

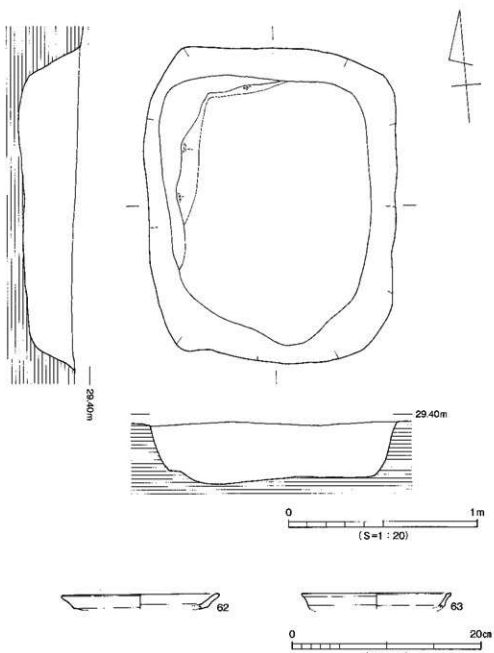


図 27 土坑 SK5・SK5 出土遺物

SK5 出土遺物（図 27）

土師器

皿（62・63） 両者ともに口径 16 cm前後の皿である。63 の外反する口縁部に対して、62 では比較的直線的に開いている。

c. 性格不明遺構

SX1（図 28）

調査区北東部、E1 区における遺構面までの掘削の段階で、明確な掘り込み等の痕跡を確認することができなかったが、図示したような 10 世紀代の遺物がまとまった状態で検出された。この出土状況からすると、なんらかの遺構が存在した可能性が高いので、性格不明遺構として取り扱っている。

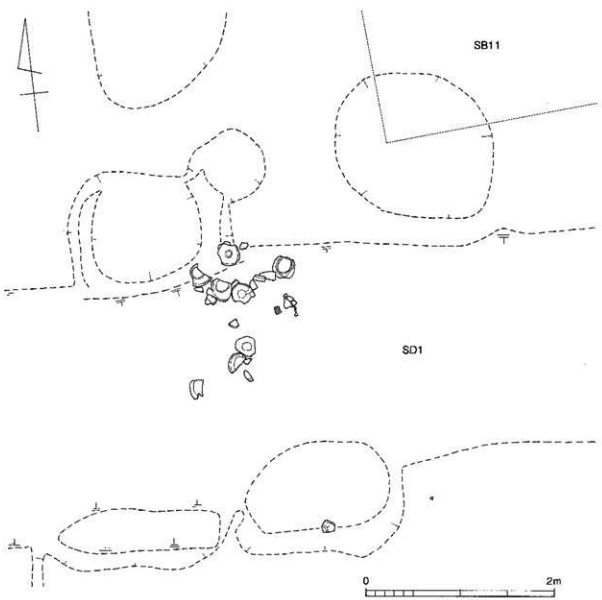


図 28 性格不明遺構 SX1 遺物出土状況

SX1 出土遺物（図 29）

土師器

坏（64 ～ 72） 底部回転ヘラ切り離しによる回転台土師器坏がまとまって出土している。器高は 3.7 ～ 4.9 cm、口径は 12.5 ～ 15.4 cmの間にあって、器高 4.0 cm、口径 13.5 cm程度のものが多い。器型は、ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開くものが多いが、65 や 68 のように強めに内湾して開くものや、71 のように突出した円板状高台を持つものがある。65、68 の外面には多段撫で痕が明瞭に残っている。

皿（73･74） これらも底部回転ヘラ切り離しによるものである。口縁部がやや外反気味に開く 73 で、器高 1.6 cm、口径 13.0 cm、直線的に開く 74 で、器高 1.8 cm、口径 13.2 cmを測る。

埦（75） 内面にハケ目調整を残す埦の口縁部片である。

鍋（76） 口縁部が緩く外反する形態の鍋片で、外面に被熱の痕跡がある。

黒色土器

埦（77・78） 両者ともに内黒埦の口縁部片である。

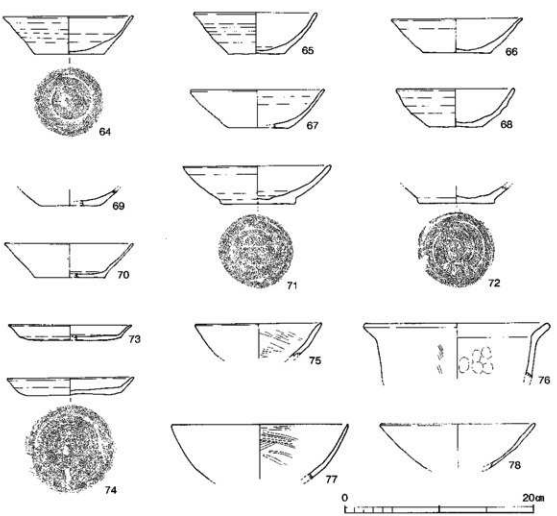


図 29 SX1 出土遺物

SX2（図5）

これも同じくE1区、SX1のやや南で検出されたものである。調査当初は弥生時代の円形竪穴住居を想定して掘削していたものであるが、床面から前述の弥生前期の土坑が検出され、また、この土坑SK1検出に至るまでに出土するものが下記のような土師器であるため、なんらかの10世紀代の掘り込みと判断した。

SX2出土遺物（図30）

土師器

坏（79～81） いずれも回転台土師器坏底部片で、切り離しはヘラによるもの。79は突出した円板高台。80はやや突出の甘いもの、81は突出しない平底となっている。

皿（82） これも回転台成形による皿の小片である。

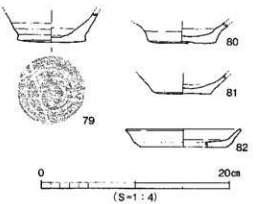


図30 SX2出土遺物

c. 溝

SD1（図5）

調査区北端に近いE～W1区を東西に走る溝で、小礫と粗砂によって埋まっており、弥生土器を出土している。周辺の柱穴群、掘立柱建物との切り合いは明確ではないが、この溝や柱穴の検出作業段階でSX1の遺物群の出土をみているところから、少なくともSX1に先行する段階の溝ではあるが、埋土からみて古墳時代まで遡ることはないと考えられる。

SD1出土遺物（図31）

弥生土器

甕（83） 直径7.7cmを測る平底の甕。外面立ち上がりの部分に縦方向の刷毛目がみられる。後期前半のものか。

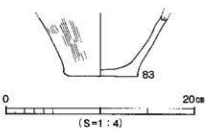


図31 SD1出土遺物

SD2

調査地中央付近のW4区からE4区にかけて、北西から南東方向に検出された溝で、幅1m、深さ3～10cm程度の遺存であった。SD1同様、粗砂で埋まっており、掘立SB5の柱穴を切っているので、SD1と同時期の遺構と思われる。

（5）中世の遺構

a. 土 坑

SK4（図32）

W5区西端で検出された、1.5×0.55mの平面形長楕円形の土坑で、横断面は深さ10cmの逆台形状をなす。12世紀中頃から後半の遺構である。

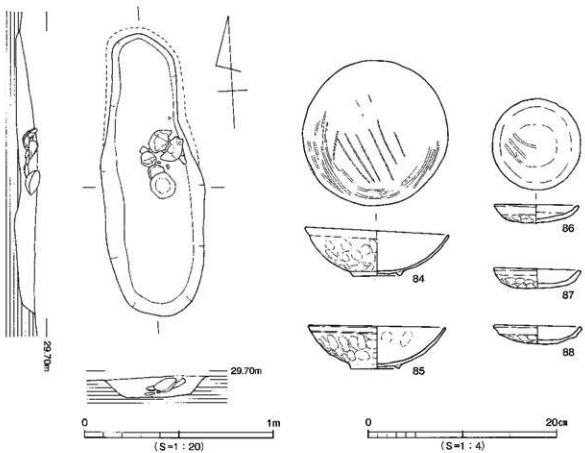


図 32　土坑 SK4・SK4 出土遺物

SK4 出土遺物（図 32）

土器

埦（84・85）　両者ともに和泉型で、内外器表面の吸着炭素が失われ、灰白色の色調を呈している。84 は、器高 4.2 ～ 5.2 cm、口径 15.1 cm、直径 5.1 cmの低い貼り付け高台は断面三角形で、部位によっては摩滅のため逆台形状を呈する部分もある。外面には指おさえによる器壁の凹凸があるが、口縁部周縁には横撫でによる窪みが巡っている。内面見込みの暗文は間隔の空いた平行線、口縁部付近には口縁部に平行な横方向の比較的密な暗文が巡っている。85 は、器高 4.3 ～ 4.6 cm、口径 14.4 cmを測る。内外面の調整は 84 と同様であるが、内面の暗文は器表面の荒れによって不明瞭になっている。

皿（86 ～ 88）　口径 9.0 cm、器高 1.9 cmを前後する、ほぼ同形態・法量の皿 3 点である。埦と同じく、口縁部周縁の外面は横撫で調整され、他の部分には指おさえの痕跡がある。色調も 2 点の埦と同様灰白色を呈している。86 の内面見込みに平行線暗文がかすかに観察できるが、ほとんど失われている。

（6）柱穴出土の遺物（図 33）

弥生土器

壺（89 ～ 91）　89 は、E1 区の SP37 出土の凹線文壺口縁部、主に下方に拡張した外傾する口端面

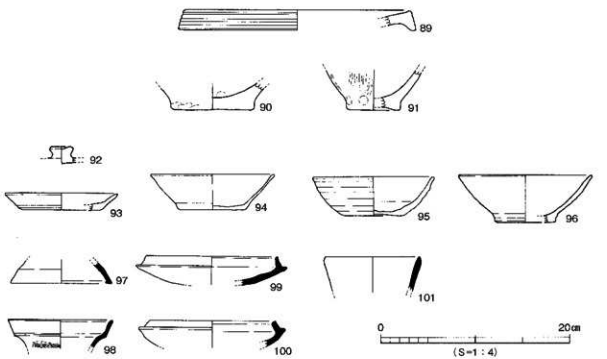


図33　柱穴出土遺物

に4条の凹線が施されるものである。施文部、口縁上面には赤色顔料の塗布がある。90はE1区SP9出土の平底の壺底部、91は同じくE1区SP37－1出土のやや上げ底になる底部片である。

土師器

蓋（92）　W3区のSP61出土。皿もしくは坏の蓋つまみ部分である。中窪みの形態をなす。

皿（93）　次の坏2点、94・95とともにE1区のSP8から出土したもので、回転台成形による皿である。

坏（94～96）　94は、ヘラ切りのやや突出した平底から直線的に外上方に開く形態をなす。95も底部ヘラ切りによる回転台土師器坏で、平底から一貫して内湾する体部・口縁部が立ち上がるものである。外面に多段撫での痕跡を残す。96は、W3区SP64の出土。形態は94に似るが、底部がより突出した形態になるもので、白い色調を呈する、いわゆる須恵系土師器と呼称されているものである。

須恵器

器種不明遺物（97）　W1区SP5出土の遺物で、端部は内側に鋭く突出した平坦面をなす。蓋もしくは、小型器種の台と思われる。

甕（98）　口縁部片。頸部との境に鋭い稜を持つ。W3区SP62の出土。

坏（99・100）　いずれも身の片である。99はW1区SP3の出土。若干扁平な器型で、内傾する立ち上がりは端部を尖り気味に収める。100も同様の器型であるが、立ち上がりは分厚く、端部に内傾する平坦面を持つ。

壺（101）　単純に端部を丸く収める、壺もしくは平瓶の口縁部である。

（7）包含層出土の遺物

包含層出土の遺物については、各掘立柱建物との関係も視野に、9 × 9m の大グリッドごとに図版を組んだ。

a. E1 区出土の遺物（図 34）

弥生土器

壺（102 ～ 106） 102 は肩部の片で、断面蒲鉾状の低く細い削り出し突帯とその直下に 4 条のヘラ描沈線を持つもので、前期後半のものである。104 の大きな平底の底部も前期～中期の大型壺の底部。104 は後期の壺の胴部上位の片で、肩部に棒状工具による記号もしくは絵画の一部と思われる施文がある。対向する 2 本の弧線で描かれた紡錘形の中ほどを、短沈線で区画するような施文であるが、意味は不明。105・106 も後期の壺の小さい平底である。

甕（107 ～ 110） いずれも口頸部あるいは上半部の片で、107 が前期前半の如意形口縁に刻み目を持つもの。108・109 は中期、110 が後期の鉢形に近い器高の比較的低いものである。

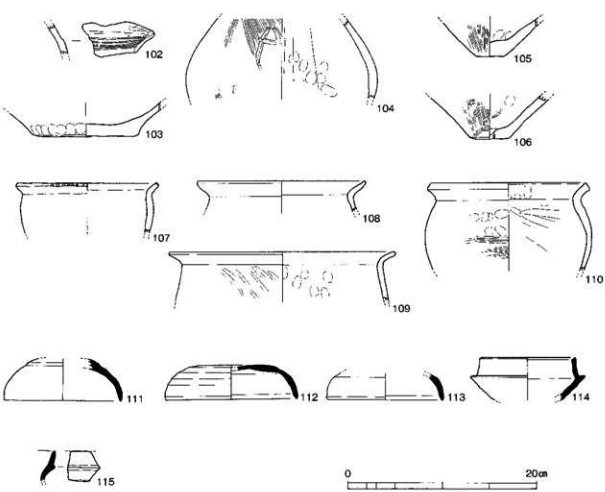


図 34　E1 区出土遺物

須恵器

坏（111～114） 蓋111～113のうち、111は天井の高い形態。112は天井、口縁部境に低い稜を持つもので、口端部を段を持った斜めの面に仕上げている。113の端部も同様で、いずれも6世紀代のものである。114は直立気味の高い立ち上がりを持つ身で、器型のわりに口径が小さい。5世紀末。

壺（115） 外面に断面形が鈍い三角形をなす突帯を1条持つ非陶邑系須恵器壺の口縁部小片。

b. W1区出土の遺物（図35）

弥生土器

甕（116～119） 119は前期前半の口頸部。短い折り曲げ口縁の端面を刻んでいる。117・118は後期の若干の上げ底になる底部。119の平底も後期の底部であるが、壺のものであるかもしれない。

鉢（120） 復元口径26.0cmを測る、ボウル形の鉢。外面を横方向に入念に磨かれている。

須恵器

高坏（121・122） 121は復元口径15.6cmの坏部で、5世紀後半の深塊形のものである。坏部外面中位の櫛描波状文の上下にそれぞれ2条の突帯が巡る。122は7世紀代の脚部片である。

壺（123） やや突出した平底。内底面にほとんど器面調整が行われていないので、坏や鉢ではなく、壺であろう。

坏（124・125） 器高4.0cm、復元口径9.8cmを測る124は、やや内湾気味の坏部と、外方に踏ん張るかたちの貼り付け高台を持つ。125は平底の坏、口縁端部をやや内湾気味に丸く収めている。いずれも8世紀代のもの。

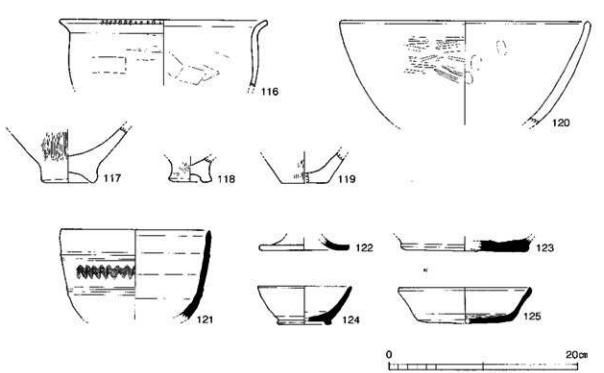


図35 W1区出土遺物

c. E2区出土の遺物（図36）

弥生土器

甕（126） 前期前半の口頸部片。如意形に折り曲げた口縁端部の端面全体を刻んでいる。

壺（127～132） 大型壺の底部127～130は、前期～中期のもの。中でも127のように外底面周縁部よりやや内側に溝状の窪みが巡るものは前期末頃の大型壺底部にまま見られる特徴である。131・132は後期の長頸壺の底部であると思われるが、甕の可能性もある。

鉢(133～136) 133は比較的薄いつくりの椀形の鉢である。口端部を外側に玉縁状にやや肥厚する。134～136はやや窪み底の底部、134が中期、他は後期のものであろう。

土師器

甕（137・138） 137は、やや内湾気味の口縁部片、138は直線的に開くもの。両者ともに端部に水平な平坦面を持つ。5世紀代のもの。

須恵器

壺（139・140） 139は、端部を玉縁状に肥厚させた口縁部片。140は、台付壺の台の部分。端部に平坦面を持ち、端面全体で接地する。屈曲部に1条の沈線があり、その直上に透孔の端部が確認できる。

坏（141） 外面に多段撫での痕跡を残す口縁部片、10世紀頃のものか。

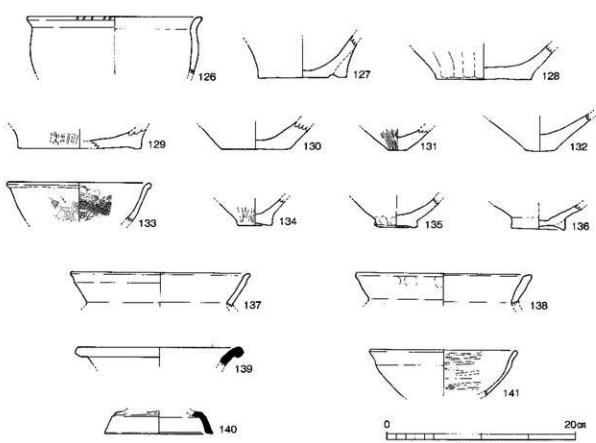


図36 E2区出土遺物

d. W2区出土の遺物（図37）

弥生土器

壺（142～145） 142・143はともにヘラ描沈線文を持つ小破片。142は頸部に近い部分と思われる。3本単位の沈線で横走する直線とその下位に弧状の施文がある。143にも同様に、3本の横走する沈線と弧状の施文が確認できる。144は突出した平底の底部で、前期のもの。145も平底の大型壺底部、時期は不詳である。

甕（146・147） 146は後期の甕口頸部。147はコイン大の平底の底部である。

須恵器

坏（148～152） 148～150は古墳時代タイプ、151・152はこれより降るものである。148は単純な形態の蓋、149・150は内傾する立ち上がりを持つ6世紀代の身である。151・152は貼り付け高台を持つ坏である。

壺（153） 玉縁状口縁を持つ口縁部片。

土師器

坏（154） 器高3.4cm、復元口径14.0cm、底径11.0cmになるもので、本調査で多く出土している回転台土師器坏と形態は異なるが、胎土・焼成ともにこれらとよく似るので、切り離し技法等、不詳の部分もあるが、同時期の同転台土師器のバリエーションのひとつであると思われる。

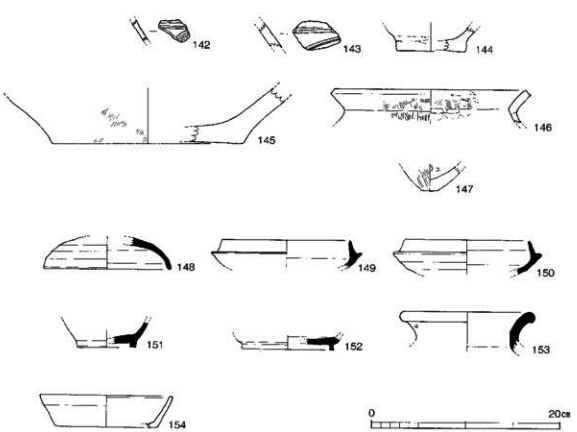


図37 W2区出土遺物

e. E3区出土の遺物（図38・39）

弥生土器

壺（155～159） 155は強く外反しながら開く口縁部で、口端部の下端を刻むもの。中期中葉。156は口端部の片で、主に下方に拡張した端面に擬凹線を施文している。後期初頭のものである。157は、後期の大型複合口縁壺の口縁部立ち上がりの片、5本単位の櫛描波状文を2段にわたって巡らせている。158・159は平底の壺底部で、158は前期～中期、159が後期のものである。

甕（160） 後期の口頸部片。折り曲げによる口縁部は端部に面を持つ。

高坏（161～163） 161は、後期のエンタシス状柱部を持つ高坏の脚台部の破片と考えられるもの。屈曲部外面に、半裁竹管による刻み甘が施されている。162は後期初頭頃の脚部片で、外面にヘラ描沈線による鋸歯文がある。163は後期の脚部片で、中位の付近に円孔が3方向に穿たれている。

支脚（164） 高さ3.0cm程度の円柱状の支脚。

土師器

甕（165～167） いずれも口縁部の片で、165・166は器肉が厚く、内湾気味に開くが、167は薄手で直線的に開く。

高坏（168・169） 168の坏部は口径14.8cm、坏底部との境に稜を持つ。169は168のような坏部形態をなすと思われる高坏の脚柱部である。

鉢（170・171） 170は口縁部の小破片であるが、ボウル形の形状をなす鉢になるものと思われる。171は短く外反する口縁部を持つ丸底の鉢になるものと思われる。

把手（172） 比較的薄い粘土板を折り曲げた、鍋または甑の把手である。

須恵器

坏（173～183） 貼り付け高台を持つ身183以外は、蓋、身ともに古墳時代タイプのものである。173～177は、天井部と口縁部境に稜あるいは沈線を持つもので、178は塊を伏せた形態の単純な器型になるものである。前者のうち、最も高く鋭い稜を持つのは173で、これに比べると174や175は低く、176では鈍い段のようになっている。また、177には2本の平行沈線が施されている。179～182の身は、いずれも内傾する比較的短い立ち上がりを持つものである。

蓋（184・185） 184は端部に水平な平坦面を持つもので、短頸壺の蓋である。また、185は端部を内側に突出した中窪みの面とするもので、かえりの退化した坏蓋であるかもしれない。

鉢（186） 段と沈線を介して外上方に開く口縁部の片である。

高坏（187） 中位に2条の突帯と櫛描波状文を持つ坏部片。

鉢（188） 口縁部外面に幅広の肥厚帯を持つもので、口端部をややドがった内面に1条の沈線が巡る。

土製品

土錘（189） 一端を僅かに欠いているが、側面観紡錘形の細管状土錘である。現存長4.6cm、最大幅2.4cm、重量13.8gを測る。

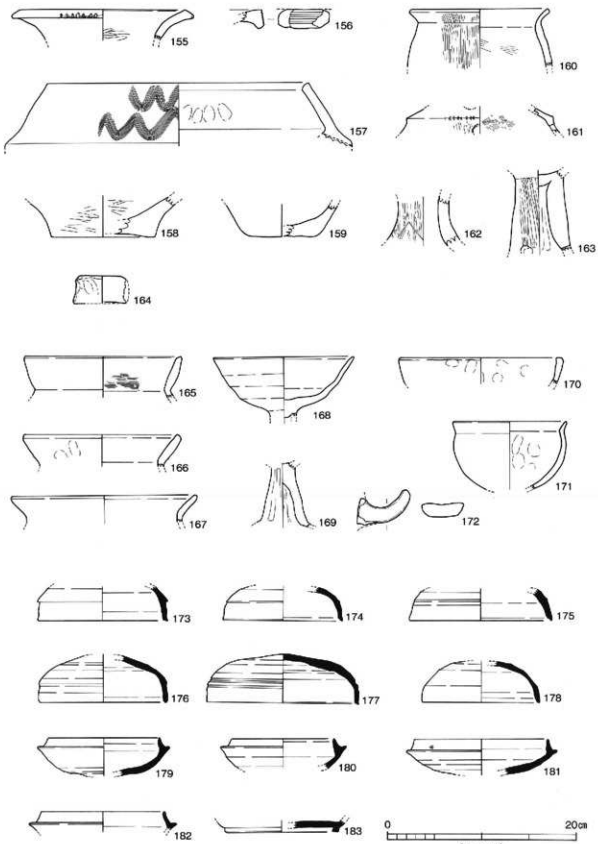


図38　E3区出土遺物（1）

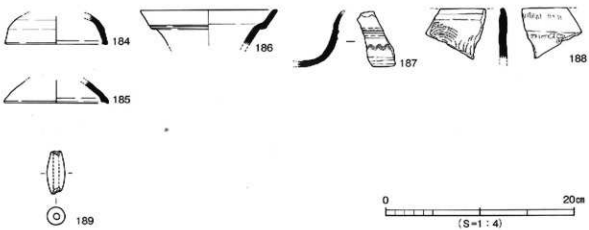


図 39　E3 区出土遺物（2）

f. W3 区出土の遺物（図 40・41）

弥生土器

壺（190）　肩部付近の破片で、交叉する細線による文様を施されている。家屋の屋根の表現か。

土師器

把手（191）　鍋または甑の把手。

坏（192～200）　192～198 は底部回転ヘラ切りによる回転台土師器坏、うち 194～198 は円板高台で、その切り離し痕は 196 の外底面に明瞭に観察できる。199 も回転台成形による土師器坏であるが、ヘラ切りした外底面に高い輪高台を貼り付けている。200 も貼り付け高台を持つ大型の坏底部である。

皿（201）　僅かに外反して開く口縁部を持つ皿。

鍋（202～204）　202 は短い口端部を丸く収めた口縁部片。203 は外に開く長めの口縁部を持ったもので、中世のものか。204 は内湾しながら短く開く口縁部を持ったもので、内外面に指頭痕が明瞭に残っている。焼成は堅緻、近世のものである。

須恵器

壺（205・206）　205 は、やや外開きの口縁部外面の口端をやや下がった位置に断面三角形の突帯が 1 条巡るもので、非陶邑系の壺口縁部片である。E1 区の包含層出土遺物のうちの 115 が同様の壺の口縁部片である。206 は、長頸壺胴部上半の片、肩部に櫛歯状工具の刺突による列点文がある。

坏（207）　器高 3.8 cm、復元口径 10.0 cm を測る身である。

高坏（208）　小型、低脚の高坏片。

鉢（209）　胴部から若干くびれて、外反気味に短い口縁部が立ち上がる鉢口縁部。

土製品

土錘（210）　端部を僅かに欠損している。現況で、全長 5.4 cm、最大幅 1.7 cm を測る。重量 14.6g となっている。

石製品

砥石（211）　陶石を素材とした砥石で、主に表裏の 2 面が用いられている。

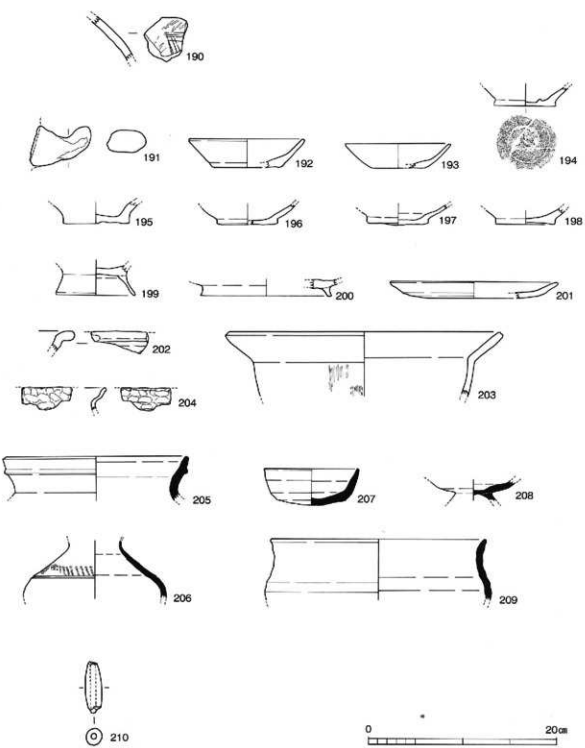


図 40　W3 区出土遺物（1）

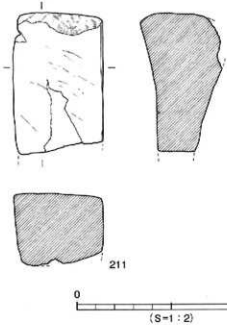


図41　W3区出土遺物（2）

g. E4区出土の遺物（図42）

弥生土器

甕（212）　如意形に折り曲げられた前期前半の口縁部片で、端部の下端を刻まれている。

壺（213・214）　213は円板状に突出した平底で、後期のものと思われる。214も後期の長頸壺の底部か。

器台（215）　器台の裾または受部と思われる板状の片。

須恵器

短頸壺（216）　偏球形の胴部に短く外反する口縁部を持つ小型の器種である。口端部は外斜した面をなしている。

坏（217）　ヘラ切りによる円板高台坏の底部。外底面は未調整。

土師器

坏（218・219）　回転台土師器坏2点のうち、218は僅かに口縁部を欠くが、ほぼ完形のもので、器高3.2～3.7cm、口径10.8cm、底径5.8cmを測る。外底面にはヘラ切り離し痕と板状圧痕が残っている。219は円板高台になるもので、やはり外底面にヘラ切り痕がある。

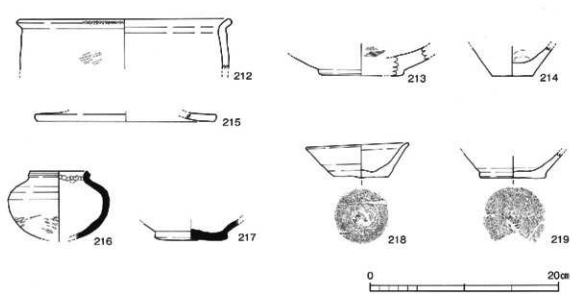


図42　E4区出土遺物

h. W4区出土の遺物（図43・44）

縄文土器

浅鉢（220） 波状口縁の浅鉢で、頸部から1条の沈線と稜を介して体部が屈曲する。内面と口頸部外面は磨かれ、体部の外面には削り痕を残している。晩期後半のもの。

弥生土器

壺（221～227） 口頸部3点ともに後期のもの。221は小型の複合口縁壺で、単純にくの字状に屈曲するもの、222は小型の長頸壺の口縁部である。223はやや大型の長頸壺の筒状頸部である。224・225は有文、あるいは絵画土器片である。223は前期のもので、肩部に3条単位のヘラ描で連続する弧状文を施されている。225は後期の壺胴部上半の片、肩部にヘラによる絵画状の線刻があるが、何を表現しているのかは不詳である。底部2点のうち226は後期の精製壺の底部で、薄くつくられた底面に薄いボタン状の突起を貼り付けて底部としたものである。平底の227は中～後期のもの。

高坏（228） 後期の高坏脚、脚高14.3cm、復元裾径17.4cmを測る。脚柱部に4方向、3段の円孔が施されている。外面は柱部から裾まで縦方向に磨かれている。坏底部との接合は充塡によっている。

甕（229） 口頸部を緩く外上方に折り曲げる後期の甕。

土師器

甕（230～232） いずれも球形の胴部に短い口縁部を持つ甕、5世紀代のものである。230は胴部をきわめて薄くつくられているが、内面に明瞭な削りの痕跡は残さず、撫で仕上げされている。後述する高坏234と同じ地点での出土。231は器高19.5cm、口径13.8cmを測るもので、230同様、外面を刷毛目、内面を撫で調整されている。口縁は、他の2点同様直線的に開き、端部に肥厚などはない。232も同様の特徴を持つが、器壁が厚く、比較的ボテっとしたつくりである。

高坏（233～236） 坏部233は坏底部と口縁部との境に鈍い稜を持つもので、口端部が僅かに外反する。234にも稜は認められるが、非常に鈍く、部分的には認められない箇所もある。口縁部は一貫して内湾する。坏底部との境の部分に2.0×2.7cmの楕円形の穿孔が、焼成後に内面から施されている。脚235は、中膨れの柱部から裾部がほとんど水平に広がるもの。236は、大きく斜め下方に広がる裾部で、端部下面が僅かに肥厚している。

坏（237） 円板高台回転台土師器の底部。

黒色土器

塊（238・239） 両者ともに内面黒色された塊で、貼り付けの輪高台を持つ。黒色処理された塊内面は放射状にヘラ磨きされている。

須恵器

坏（240） 天井部と口縁部境に稜を持つ蓋で、口端部は内面に鈍い段を持って仕上げられている。

高坏（241・242） 241は低脚の高坏の脚柱部から坏底部の片、7世紀代のもの。242は5世紀末の端脚一段透かしの脚部片である。

瓶（243） 提瓶もしくは横瓶の口縁部と思われる口径の小さい口縁部片。端部を僅かに丸く肥厚する。

緑釉陶器

塊（244） 削り出しの輪高台を持つ塊底部である。低い高台は端面全体で接地する。素地は黄乳白色の軟陶で、淡青緑色の釉が全面に施されている。畿内洛西窯産、9世紀末～10世紀初頃のものである。

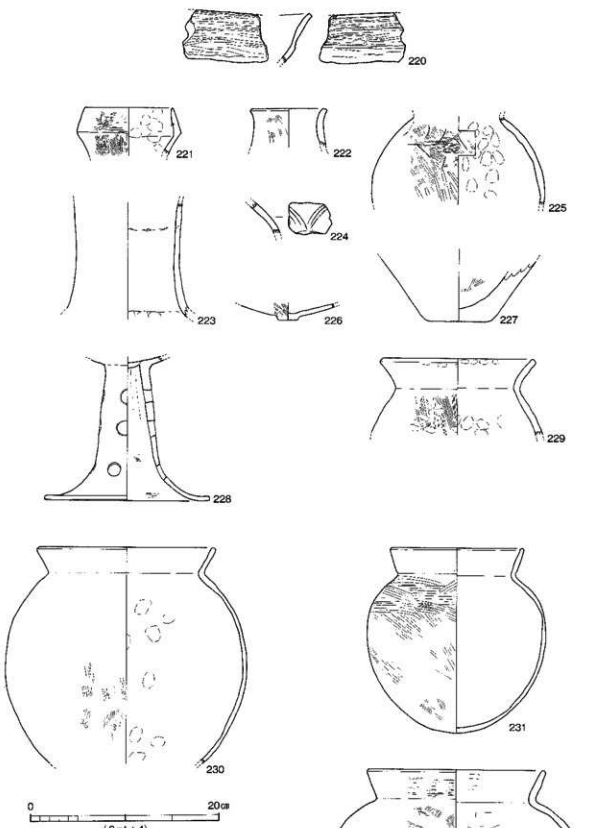


図43　W4区出土遺物（1）

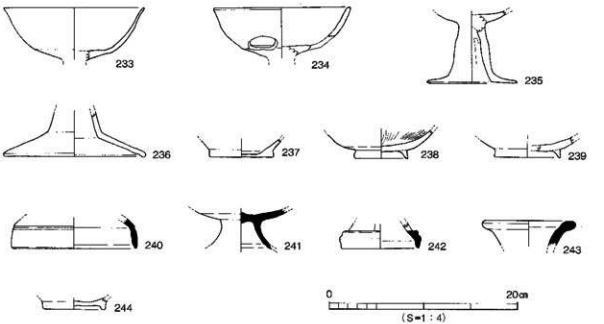


図44　W4区出土遺物（2）

i. E5区出土の遺物（図45）

弥生土器

高坏（245）　口縁部片。坏体部から稜を持って屈曲し、短い口縁が直上に立ち上がる。口端部は、やや内傾に傾いた平坦な面をなす。口縁部外面に4条の細く浅い擬凹線が施されている。後期初頭。

鉢（246・247）　246は、やや窪み底になる底部で、胴部の立ち上がり外面には指頭痕が著しい。内面は比較的平滑に撫でられている。後期のもの。247は、器高12.6cm、復元口径21.2cmになるもので、扁球形、丸底の胴部から口縁部が水平に近いところまで強く折り曲げられている。後期末。

土師器

坏（248・249）　回転台土師器坏のヘラ切りによる底部2点。249は、円板高台状を呈する。

埦（250）　復元口径14.0cmを測る埦。乳白色の色調で、きわめて薄く仕上げられている。口端部で若干外反する器型。

黒色土器

埦（251～256）　内外面黒色の256を除いてすべてA類内黒の埦である。全容のわかる253でみると、法量は器高6.5cm、復元口径16.0cm、高台径6.5cmとなっている。高台はいずれも貼り付けによる輪高台である。内面の磨きは底部片250では平行線状となっているが、252の底部付近では放射状となっている。B類の256は、内外面ともによく磨かれ、内面では口縁部付近を横方向に、その下位は縦方向に磨かれ、外面は横方向の磨きとなっている。

須恵器

埦（257）　外面に多段撫での痕跡を残す口縁部片。

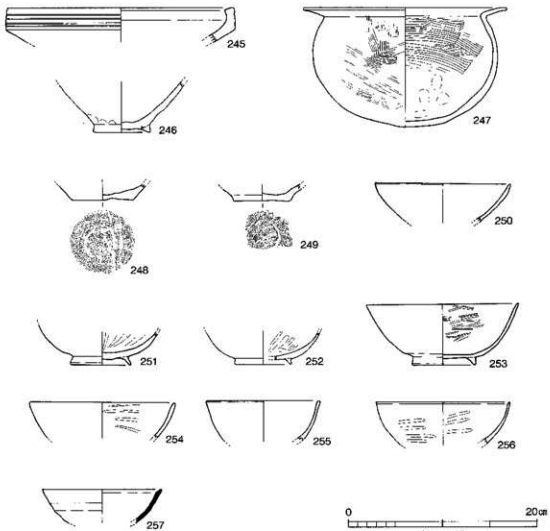


図45　E5区出土遺物

j. W5区出土の遺物（図46・47）

縄文土器

深鉢（258・259）　晩期後半、刻み目突帯文深鉢の突帯周辺の破片2点である。258は摩滅が進行しているが、断面三角形の低い突帯をDの字に刻むもので、瀬戸内型の深鉢とは異なって、単純なバケツ型の器型になるものである。突帯の外面には横方向の削り痕がある。259の小片は、断面三角形の突帯を巻貝の一部分を用いて刻んでいるようである。

土師器

甕（260）　若干歪んでいるので、口径に不安はあるが、8世紀代と思われる甕の口縁部片である。肉厚のつくりで、外面の胴部、口縁部を縦方向に幅広の刷毛目調整した後、口縁部のみを撫で消している。内面口縁部にも横方向に刷毛目がある。

坏（261～269）　261～268は、底部ヘラ切りの回転台土師器坏の一群である。完形品261で、その法量は器高4.0cm、口径11.2cm、底径6.1cmを測る。262もほぼ同様のサイズで、両者ともやや突出した円板高台状をなしている。263～268のその他の底部等も同様の器型、法量をなすと思われる。

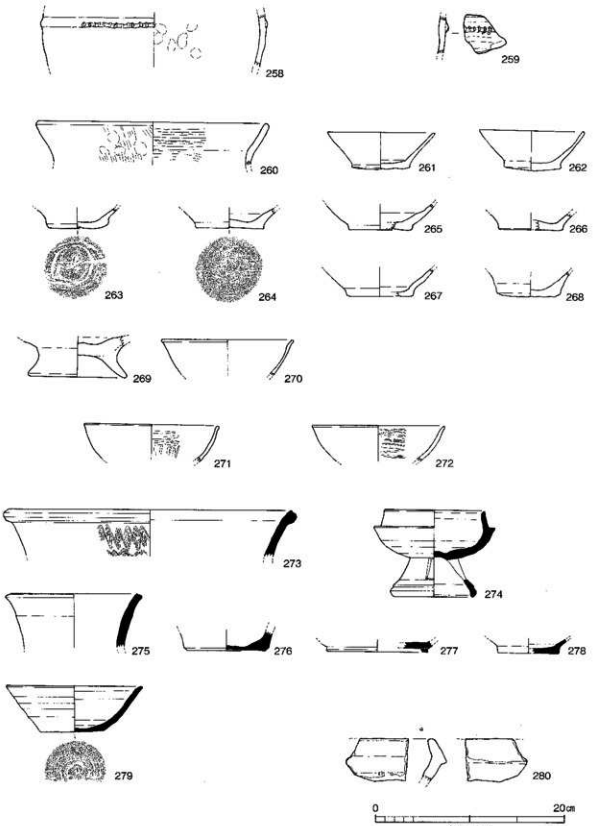
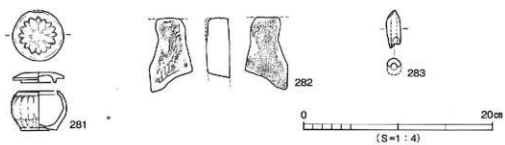


図 46　W5 区出土遺物（1）



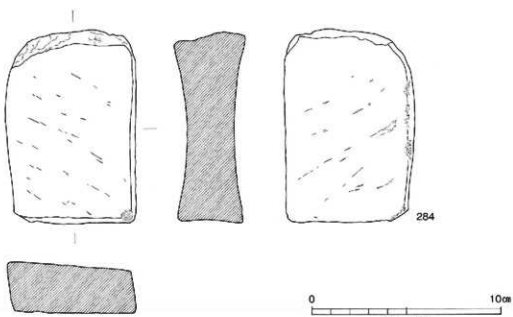


図 47　W5 区出土遺物（2）

10 世紀後半頃のものか。269 は、回転台成形の坏、もしくは皿の底部に直径 10.5 cm、高さ 2.0 cmを越える高台を貼り付けた大型のもの。高台は外方向にハの字状に踏んばる形態である。

埦（270）　器壁を薄く、丁寧に成形されている。焼成は白色で、須恵器に近い硬質の土師器である。

黒色土器

埦（271・272）　両者ともに、A 類口縁部の破片。271 の内面口端部直下には鈍い稜を持っている。

須恵器

甕（273）　口頸部小片。口端部外面に断面台形状の突帯を貼り付け、肥厚する。頸部には比較的粗い波状文が 2 段まで確認できる。6 世紀代のものであろう。

高坏（274）　短脚一段透かしの有蓋高坏。5 世紀末。

壺(275･276)　275 は、復元口径 13.2 cmで、単純に外上方に開く口頸部。276 は、平底の底部、8 世紀代。

坏（277 ～ 279）　277 は、貼り付け高台を持つ底部片。278・279 は、平底、底部ヘラ切り離しによるものである。278 は、円板高台状を呈し、外底面には板状痕跡がある。279 は、器高 5.0 cm、口径 14.1 cmを測るもので、外底面にヘラ切り離しの痕跡が明瞭に残っている。

陶器

擂鉢（280） 備前焼16世紀代の擂鉢である。胴部から外面に稜を持って口縁部が内傾して立ち上がる。内面には擂目の上端が僅かに観察できる。

磁器

合子（281） 青白磁逆弁文合子の蓋と身のセットである。蓋の内面と身の外底面から胴部下位1/4程度の部分までは施釉されない。また、身の口端部から口縁部内面にかけても同様、無釉である。蓋・身の外面に型打ちと思われる逆弁文が浮き彫りされている。12世紀代のものであろう。

平瓦（282） 細縄叩きの平瓦小片で、かなり磨耗している。

土製品

土錘(283) 側面観紡錘形の管状土錘の破損品。主に縦方向に半裁されており、現況で3.96gを量る。

石製品

砥石（284） 陶石を素材とした砥石で、直方体の対向する広い2面を用いている。

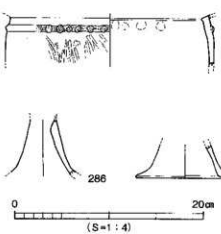


図48 E6区出土遺物

k. E6区出土の遺物（図48）

弥生土器

甕（285） 中期中葉～後葉の甕。頸部をやや下った位置に圧痕文突帯が1条巡る。頸部の屈曲部内面と口縁部上面とをつまむように横撫でするために生じる断面三角形の突起帯が内面に巡っている。

土師器

高坏（286・287） 脚柱部片と裾部の片。

l. W6区出土の遺物（図49）

弥生土器

壺（288・289） 288は、中期初頭の壺頸部施文帯付近の片。頸部下位に施された平行沈線は、やや幅が広いが、ヘラによるものではなく櫛歯状工具によるものである。289は後期の複合口縁、屈曲部が簾状を呈しないものである。

鉢（290・291） 290は、中～後期の小型の鉢。折り曲げによる短い口縁部を持つ。291は、口縁部に凹凸を設けた異形の鉢口縁部で、もっと浅い形態になるかもしれない。内外面ともに磨かれている。前期末頃のものか。

甕（292～294） 292は中期中葉～後葉の甕上部の片である。口端部はつまむように横撫でされ、端面はやや上方に肥厚した凹面をなしている。頸部屈曲部内面には285同様の突起帯が巡っている。293は、中期後半～後期初頭のくびれの上げ底になる底部。294は、これよりやや下る後期の底部である。

高坏（295） 後期の脚柱部。坏底部との接合は充填による。

浮文（296） 後期の壺もしくは器台口端面から脱落した円形浮文。中央部の孔は貫通しない。

土師器

坏（297・298） 回転台土師器坏の底部片2点。

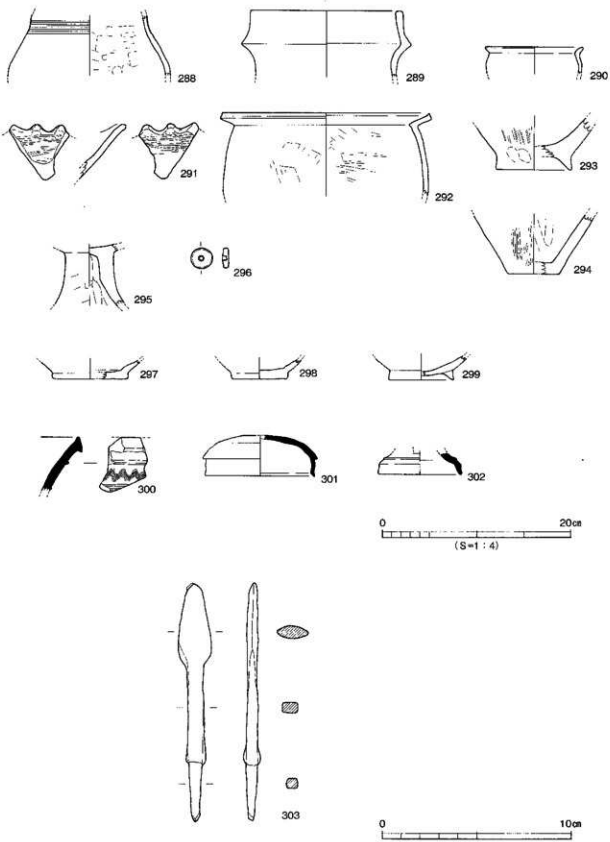

288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
0 20cm
(S=1:4)
303
0 10cm
(S=1:2)

図 49　W6 区出土遺物

黒色土器

埦（299） 断面三角形の輪高台を貼り付けられた埦底部。内面の磨きは確認できない。

須恵器

器台（300） 高坏形器台の受部口縁小片、脚の口縁であるかもしれない。口端部を上下方に拡張、その下位に断面三角形状の細い突帯が2段、その間に櫛描き波状文が施されている。5世紀代。

坏（301） 天井、口縁部境に鋭い稜を持つ。口端部は傾いた若干の凹面をなす。

高坏（302） 短脚一段透かし有蓋高坏の脚端部。透かしの下端面と端部外面の1条の突帯が確認できる。端部は尖り気味に丸く収められている。

鉄製品

鉄鏃（303） 柳葉形の鉄鏃、全長12.5cmを測るものである。うち、刃部長4.2cm、身部長5.2cm、茎部長3.1cmとなっている。刃部の横断面は鏑を持たない紡錘形、身部、茎部ともそれぞれ長方形、方形断面で、現況重量18.48gを量る。

m. 採集および出土位置不明遺物（図50）

弥生土器

壺（304） 前期の壺肩部片。ほとんど沈線のような浅い段が認められる。

甕（305･306） 305は前期の口頸部片。如意形に緩く折り曲げられた口縁部は、端部を丸く仕上げ、端面に刻み目を施している。306は後期の口頸部片、胴部から口縁部外面に櫛毛目が施されている。

土師器

高坏(307） 復元口径15.2cmを測る坏部片。坏底部との境に鈍い稜を持つが、やや膨高な器型である。

黒色土器

埦（308） A類の底部、高台径6.95cmを測る。内面の磨きの痕跡は磨耗のため残っていない。

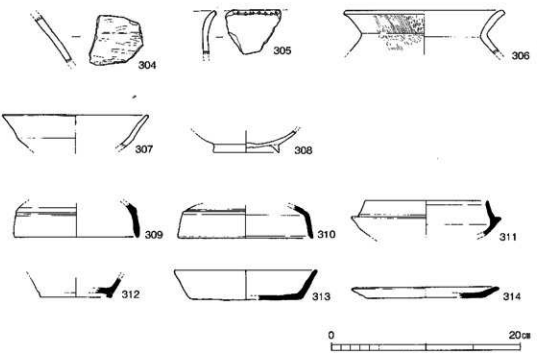
須恵器

坏（309～313） 309～311は古墳時代タイプのもので、309･310が蓋である。両者ともに、天井部、口縁部境に稜を持つが、309の稜は鈍く、丸みを帯びた段と凹線のようになっている。310の稜には鋭さはあるが低い。口端部は、段を持った斜めの面をなしている。311は身、立ち上がりは比較的長く、やや内に傾く。端部の処理は、前二者の蓋と同様である。312は、貼り付け高台を持つ底部である。313は、器高3.1cmと低く、底径11.4cmの平底から斜め上方に立ち上がり、復元口径16.0cmを測る口縁部が開くものである。

皿（314） 器高1.1cm、復元口径、底径、それぞれ14.8cm、12.2cmの皿。焼成は甘い。

鉄製品

鑿（315） 全長17.7cm、最大幅1.1cm、最大厚0.8cmを測る細形、棒状の平鑿。刃部幅0.6cmとなっている。



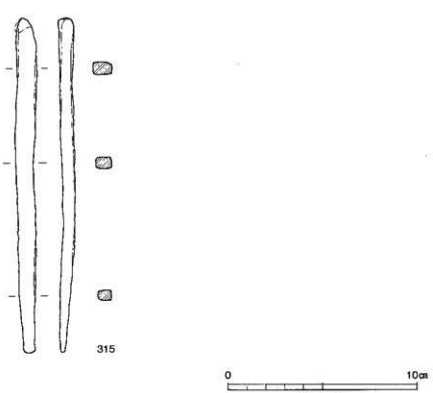


図 50　採集・出土地不明遺物

3．小　結

調査では、弥生時代前期、古墳時代中～後期、古代の遺構がそれぞれ検出された。弥生時代の土坑SK1には、若干の混入はあるものの、その大方の遺物から前期前半期のものと位置づけた。

古墳時代の遺構は、竪穴住居2棟と掘立柱建物5棟と土坑1基であった。2棟の竪穴住居は、方形あるいは隅丸方形プランのもので、これにも若干の混入はあるが、出土遺物から5世紀末頃のものと考えてよい。なかでも、SB10としたものからは非陶邑系の須恵器鍋の出土があり注目される。掘立柱建物は、6世紀後半頃のもので、その全容が明らかなものは少ないが、円形の柱穴で構成され、おそらく3×3間になるものが多いと思われる。また、その多くがその方位を磁北よりも西に振ることも特徴的である。

古代の遺構には、掘立柱建物4棟、溝2条がある。掘立柱建物は、8世紀～10世紀代のものと考えられるが、その柱穴プランや3×3間規模であることなど、古墳時代の掘立と共通する部分が多いが、方位を磁北より東に振るものが多いところが異なっている。この方位は当地における座標北に近く、古代に至って、建物としてより座標北を指向する傾向が強まったものと思われる。

さて、中村松田遺跡1～3次調査、七ノ坪遺跡2次調査や本書に報告された中村長生寺遺跡など、近隣での既往の調査を概観してみると、弥生時代に関しては、特に南西150mの中村松田遺跡にみられるように後期後葉の竪穴住居群で構成される集落が卓越しており、前期の遺構はほとんど知られていない。また、調査地南～南東における市道中村桑原線の一連の調査においても、後期が中心で前期の遺構はみられていない。したがって、現在のところ点として存在するのみであり、今後小学校構内を含めた東方、あるいは北東方向に注目する必要がある。

古墳時代の遺構についても周辺域には希薄で、近隣では南方250mの中村桑原線関連、小坂遺跡5次調査で竪穴住居1棟の検出がみられるのみである。古代の遺構については、中村松田遺跡1・2次調査の古代の掘立柱建物それぞれ1棟ずつ、あるいは本書における中村長生寺遺跡の1棟、また七ノ坪遺跡での溝の検出などがあげられ、遺跡としてのひろがりは比較的広範囲に認められるが、現状では分布の中心は古墳時代同様本調査地にあるということになろう。

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、胴上－胴部上半、胴下－胴部下半、底－底部、天－天井部

胎土・焼成欄　長－長石、石－石英、金－金雲母、（数値）－鉱物粒の大きさ（mm）、◎－焼成良好、○－焼成やや良、△－焼成不良

表1　SK1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土・焼成	備考	図版
1	壺	口径 (19.0) 残高 3.3	大型品で口縁部下に段を有する。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金○		10
2	壺	残高 2.3	強く屈曲する口縁部。	ヨコナデ	ミガキ	浅黄色 浅黄色	石・長(1) 赤・金○		10
3	壺	口径 (16.2) 残高 7.2	口縁部はやや強めに外方向に屈曲する。頸部は直線的に内傾する。	ミガキ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1−2) 金○		10
4	壺	口径 (25.0) 残高 8.5	外方向の折り曲げ口縁で、頸部はあまり張らない。	[口]ヨコナデ [胴]ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金○		10
5	壺	残高 12.6	肩部に段を持つ頸部から胴部の片。	ミガキ	指頭痕→ナデ	淡黄色・黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) 金○		10
6	壺	残高 4.2	肩部上位に段と横方向の沈線、段から斜め方向下位に2条の沈線。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい黄色	石・長(1) 金○		10
7	壺	残高 3.6	2条単位の横走するヘラ描沈線と、下位に斜め方向の短い沈線。	マメツ[ミガキ]	マメツ	浅黄色 灰白色	石・長(1) 金○		10
8	壺	残高 2.8	肩を持つ細い刷り出し突帯の上下位に2条単位の細く長い沈線、突帯に斜線状に施文を持つ。	ミガキ	ナデ・指頭痕	橙色 浅黄色	石・長(1) 含雲母砂粒○		10
9	壺	底径 9.8 残高 3.3	平底。	ハケ→ミガキ [底面]ナデ	ナデ [底面]指頭痕	灰白色 灰白色	石・長(1−2) 金○	内に黒斑！	
10	壺	底径 11.7 残高 3.3	平底。	ミガキ→ナデ・指頭痕 [底面]ミガキ	ナデ	褐色 褐灰色・灰黄褐色	石・長(1) 金○		
11	紡錘車	径 6.4 厚み 1.2 重さ 65.92g	直径0.7cmの焼成前穿孔を施す。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) 金○		10
12	甕	口径 (16.4) 残高 3.5	直線的に開く口縁部で、端部に水平な面を持つ。	マメツ	マメツ	赤褐色・黄褐色 にぶい赤褐色	石・長(1−3) 金○		

表2　SB3出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土・焼成	備考	図版
13	甕	口径 (29.4) 残高 3.1	やや内湾気味に短く開く口縁部を持つ。	ヨコナデ [胴]ハケ	ナデ	明褐色 明褐色	長(1−3) ○		
14	甕	口径 (18.6) 残高 4.2	やや内湾気味に短く開く口縁。端部は丸く収める。	ヨコナデ	マメツ(指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1−2) ◎		
15	甕	口径 (17.9) 残高 9.7	口縁部は強く内湾する。	[口]ハケ→ナデ [胴]ハケ(5本/cm)	[口]ヨコナデ [胴]ハケ→ナデ・指頭痕	にぶい橙褐色 明褐色	石・長(1) ○		10

16	甕	口径 (18.8) 残高 20.3	球形の胴部にやや内湾気味に短く開く口縁帯。	口:ヨコナデ ハケ(4本/cm)	口]ヨコナデ 胴]ハケ→ナデ・指頭痕	浅黄橙・灰褐色 にぶい赤褐・黒色	石・長(1~2) 含細砂粒 ○		10
17	鉢	口径 (13.0) 残高 5.3	外反しながら端部へも行くすぼまり胴部。	ハケ	マメツ(ヨコナデ)	赤橙・黄橙色 赤橙色	石・長(1~2) ○		
18	甑	残高 6.6	把手部分の片。	ナデ(指頭痕)	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~7) ○		
19	坏	底径 (16.0) 残高 3.5	口縁部と大井部の境にやや浅い稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1) ◎		
20	坏	口径 (14.2) 残高 4.1	口縁部は単純に索り気味に丸く収められている。	口]回転ヘラケズリ 胴]回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		
21	坏	口径 (12.2) 残高 2.8	口縁部と大井部境に稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒色	長(1) ○		
22	坏	残高 4.5	身の片で内傾気味に立ち上る。	口]回転ナデ 底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎	自然釉	
23	高坏	口径 (9.2) 残高 3.3	短脚。段透かしの脚部片で、裾端部も近に鋭い突帯が1条巡る。	脚]ナデ月 脚裾]回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	石(1) ◎		
24	高坏	残高 2.1	長脚二段透かしと思われるものの杯底部片で、外面に斜線文が施されている。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	灰色 灰色	石(1~2) ◎		
25	壺	底径 (7.2) 残高 2.0	平底。	マメツ(ナデ?)	マメツ(ナデ?)	褐灰色 褐灰色	石・長(1~3) ◎		

表3 SB10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	壺	口径 (19.8) 残高 6.1	内湾気味に外傾し、端部に水平な面を持つ。	口]回転ナデ→ヨコナデ 胴]ハケ→ナデ	口]ヨコナデ 胴]指頭痕→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎		
27	壺	口径 (16.0) 残高 12.8	球形の胴部から直線的に外に開く口縁部を持ち、端部を丸く収める。	口]ヨコナデ 胴]指頭痕→ナデ	口]ヨコナデ 胴]指頭痕	にぶい黄色 にぶい黄色	石(1~2) ◎		
28	高坏	口径 14.4 残高 5.5	坏底部と口縁部の境にごく浅い稜を持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 明赤褐色	含細砂粒 ◎		11
29	高坏	口径 (14.6) 残高 7.2	坏底部と口縁部の境にしっかりした稜を持つ。	マメツ	マメツ	にぶい橙 にぶい赤褐色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		11
30	高坏	口径 14.8 残高 5.4	塊形の坏部に近い形態をなす。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	長(1) ◎		11
31	高坏	残高 5.2	脚柱部片で円孔が一箇所ある。	マメツ	シボリ痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ◎		
32	高坏	底径 10.4 残高 5.1	脚裾部は強く屈曲し、端面全体で接地する。	ナデ	マメツ(一部ハケ)	にぶい褐色 にぶい褐色	含細砂粒 ◎	煤付着	
33	鉢	口径 12.0 器高 5.2	塊形。	口]ヨコナデ 胴底]ナデ	ヨコナデ	にぶい黄色 にぶい黄色	含細砂粒 ◎		11
34	鉢	口径 13.9 器高 6.1	塊形。	マメツ	口]ヨコナデ マメツ	明褐色 明褐色	含細砂粒 ◎		11
35	鉢	口径 11.6 器高 4.9	塊形をなすもので、内面に放射状に暗文を施す。	胴底痕→ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 明褐色	含細砂粒 ◎		11
36	甑	口径 (29.0) 残高 9.1	やや外開きの口縁部片。	胴部痕→ナデ	胴部痕→ナデ	にぶい黄橙色 明褐色	石(1~3) ◎		
37	鍋	口径 26.8 器高 23.2	スリットの入る把手付の鍋で口縁部は短く外上方に折り曲げられ、口端部は凹線状に強む。	口]ヨコナデ 胴上]タタキ→カキ目 胴下]タタキ	胴上]ヨコナデ 胴下]ナデ・指頭痕	灰・黄褐色 灰色	長(1~3) ◎		11
38	壺	残高 4.3	屑の片で、櫛描波状文の下位に凹比線を1条施している。	頸]ヨコナデ 胴]カキ目→ナデ	ヨコナデ	暗灰色 青灰色	石(1) ◎	自然釉	

表4　SB2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	坏	口径 (14.0) 残高 3.1	端部は丸く収められている。	[上]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 明青灰色	長(1) ◎		

表5　SB4出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
40	壺	残高 2.4	大きく開く口縁端内面に擬凹線状文を施している。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
41	甕	口径 17.8 残高 3.4	内湾しながら外に開く口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	右・長(1) ◎		
42	坏	口径 (11.2) 残高 2.9	尖り気味に丸く収められた口縁部の内面に沈線が1条巡る。	[上]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
43	坏	口径 10.6 残高 3.1	内傾する短い立ち上がりは、やや内湾気味にのびている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1~6) ◎	自然釉	
44	甕	口径 10.6 残高 3.4	短頸壺の蓋。口径の縁に深い溝で、端部を内側に突出した半円面に仕上げている。	[上]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1~2) ◎		

表6　SB6出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
45	坏	口径 (12.4) 残高 2.9	短く内傾する立ち上がりを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		

表7　SB8出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
46	高坏	摘径 3.4 残高 2.9	高坏の蓋で、中空のつまみを持つ。	[つまみ]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
47	高坏	口径 (14.2) 残高 3.1	脚上端部で、天井部との境に鋭い稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		

表8　SK2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
48	坏	口径 (12.6) 残高 2.9	短く内傾する立ち上がりを持つ小破片。	[上]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	含細砂粒 ○		

表9　SB1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
49	皿	口径 (11.8) 底径 (17.0) 器高 1.6	底部と口縁部の境を低く屈折させ、口縁部は強く外反して外に開く。	回転ナデ [底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		
50	坏	底径 (9.6) 残高 2.2	貼り付け高台を持つ底部片。接地面は丸みを帯びている。	マメツ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~2) ◎		
51	坏	口径 (13.6) 残高 3.1	端部をやや外反、尖り気味に収めている。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	含細砂粒 ○		
52	坏	残高 1.2	高台端部は中窪みの面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
53	壺	口径 (19.2) 残高 3.1	玉縁状の口端部で、端部を外側に折り曲げている。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1~2) ◎		

表10　SB5出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
54	壺	底径 (7.2) 残高 3.1	平底。	ハケ→ナデ	工具によるナデ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ○	黒斑	
55	坏	口径 (13.8) 残高 3.0	器高の低い比較的単純な形態。	[L]回転ナデ [K]回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗赤褐色 暗赤褐色	石(1～2) ○		
56	坏	口径 (15.8) 残高 3.2	天井部と口縁部の境に段を持つ。口縁部は緩い段を持った斜めの面に仕上げられている。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1～2) ○		
57	坏	口径 (10.8) 残高 2.0	加い立ち上がりを持った身の破片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
58	高坏	残高 4.5	長脚二段透孔高坏脚の基部片。透孔は3方向。	カキ目→回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		

表11　SB5出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
59	剥片		サヌカイト	2.7	4.2	0.5	5.98		

表12　SB11出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
60	甕	底径 (3.2) 残高 7.3	やや上げ底の底部。	ハケ(7本/cm)	ハケ→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐・黒褐色	石・長(1～2) ○	内面・底面外面・煤付着	
61	坏	口径 (14.8) 残高 2.8	多段撚での口縁部片。	回転ナデ	ナデ	橙色 橙色	長(1) ○		

表13　SK5出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
62	皿	口径 (16.6) 残高 1.5	比較的直線的に開く口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
63	皿	口径 (15.8) 残高 1.6	外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰・灰白色 褐灰・灰白色	石(1) 赤 ○		

表14　SX1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
64	坏	口径 13.6 底径 7.0 器高 4.1	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	[C]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	暗赤褐色 にぶい橙色	長(1) ○		12
65	坏	口径 12.9 底径 5.9 器高 4.1	内湾して開く口縁部。	[C]回転ナデ [底]ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	明赤褐色 明赤褐色	含細砂粒 ○		12
66	坏	口径 13.7 底径 7.2 器高 3.6	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	[C]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	明赤褐・灰白色 明赤褐・灰白色	含細砂粒 △		12
67	坏	口径 14.1 底径 6.3 器高 4.1	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	ヘラナズリ	回転ナデ	灰白・赤褐色 灰褐色	含細砂粒 ○		12
68	坏	口径 12.2 底径 5.7 器高 4.0	内湾して開く口縁部。	[C]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰褐色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		12
69	坏	底径 (6.2) 残高 1.7	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	[C]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	褐灰色 褐灰色	含細砂粒 ○		
70	坏	口径 (13.4) 底径 (7.4) 器高 3.7	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	[L]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
71	坏	口径 15.5 底径 7.5 器高 4.0	突出した円板状高台を持つ。	[L]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	マメツ	橙色 橙色	含細砂粒 ○		12

72	坏	底径 8.0 器高 1.9	ヘラ切り離しの底部からほぼ直線的に外上方に開く。	[ヨコナデ]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	橙色 淡黄色	含細砂粒 ○		
73	皿	口径 13.0 底径 9.2 器高 1.6	ヘラ切り離しによるもで、口縁部がやや外反気味に開く。	[ヨコナデ]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄色 灰白色	含細砂粒 ○		
74	皿	口径 13.2 底径 8.9 器高 1.8	ヘラ切り離しによるもで、口縁部が直線的に開く。	[ヨコ]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	橙色 明赤褐色	含細砂粒 ◎		12
75	塊	口径 (13.2) 残高 3.6	口縁部片。	ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 橙色	含細砂粒 ◎		
76	鍋	口径 (19.2) 残高 5.7	口縁部が緩く外反する形態の鍋片。	マメツ(ハケ)	[ヨ]回転ナデ [胴]指頭圧→ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		
77	塊	口径 (18.6) 残高 5.7	内黒塊の口縁部片。	マメツ	ミガキ	明褐色 黒色	石・長(1) ○		
78	塊	口径 (16.2) 残高 4.8	内黒塊の口縁部片。	[ヨ]回転ナデ [胴]マメツ	ミガキ	黒・にぶい黄橙色 黒色	石・長(1) ○		

表15　SX2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
79	坏	底径 7.2 残高 3.2	ヘラ切りによる底部片で、突出した円盤高台。	回転ナデ [底面]回転ヘラ切り	回転ナデ	橙色 橙色	含細砂粒 ○		
80	坏	底径 (6.0) 残高 2.3	ヘラきりによる底部片で、突出は「ハ」。	ヨコナデ [底面]マメツ(ナデ)	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	含細砂粒 ○		
81	坏	底径 (5.9) 残高 2.2	平底。	ヨコナデ [底角]→ケズリ	ヨコナデ	浅黄橙色、暗褐色 淡橙色	含細砂粒 ○		
82	皿	口径 (11.8) 底径 (8.6) 器高 1.8	皿の小片。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ◎		

表16　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
83	壺	底径 7.7 残高 6.5	平底。	胴]ハケ(5本/cm)・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 浅黄色	石・長(1～2) ◎	黒斑	

表17　SK4出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
84	塊	口径 15.1 底径 5.1 器高 5.2	和泉型で口縁部付近には口縁部に平行な横方向の暗文が巡っている。	[ヨ]ヨコナデ マメツ(指頭痕)	マメツ	灰色 灰色	含細砂粒 ○	煤付着	12
85	塊	口径 14.4 底径 5.0 器高 4.6	和泉型で内面の暗文は器表面の荒れによって不明瞭である。	[ヨ]ヨコナデ 指頭痕→ハケ	ナデ	灰[ヨ]色 灰白色	含細砂粒 ○		12
86	皿	口径 9.0 器高 1.9	塊と同じく口縁部は横撫で。	[ヨ]ヨコナデ [底]指頭痕	マメツ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		13
87	皿	口径 8.9 器高 1.8	坏と同じく口縁部は横撫で。	[ヨ]ヨコナデ [底]指頭痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		13
88	皿	口径 8.7 器高 1.9	塊と同じく口縁部は横撫で。	[ヨ]ヨコナデ [底]指頭痕	ヨコナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		13

表18　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
89	壺	口径 (23.4) 残高 2.1	頸部文窓1段部で、下位に起源した外傾する1条凹線に4条の沈線が施されている。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1) ◎	赤色顔料	
90	壺	底径 (8.2) 残高 2.9	平底。	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(1～2) 金 ◎		

91	壺	底径 (5.2) 残高 4.3	上げ底。	[胴]ハケ(8本/cm) [底]指頭痕→ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(1～4) ○		
92	蓋	摘径 2.2 残高 1.6	中凹みの坏の蓋のつまみ部分。	ヨコナデ・ナデ	ミガキ?	明黄褐色 褐色	石(1) ◎		
93	皿	口径 (11.8) 器高 1.8	同転台成形による皿。	ナデ [底]ケズリ	ナデ	灰白・橙色 灰白・橙色	含細砂粒 ◎		
94	坏	口径 (13.6) 底径 (6.8) 器高 3.8	へラ切りのやや突出した平底から直線的に外上方に開く形態。	マメツ [底]へラ切り	マメツ	浅黄色 灰色	含細砂粒 ○		
95	坏	口径 (12.6) 底径 (6.3) 器高 4.1	平底から一貫して内湾する体部。	回転ナデ [底]へラ切り	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		
96	坏	口径 (13.8) 底径 (6.0) 器高 5.0	突出した底部。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	含細砂粒 △		
97	小型	底径 (10.6) 残高 2.5	底部の内側に鋭く突出した平坦面を持つ武蔵。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 黒色	含細砂粒 ○		
98	鉢	口径 (11.0) 器高 3.6	口縁部付で、頸部との境に鋭い稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白・暗灰色 灰オリーブ色	含細砂粒 ◎	自然釉	
99	坏	口径 (13.8) 残高 3.0	内湾する立ち上がりは、端部を尖り気味に収める。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
100	坏	口径 (13.2) 残高 2.7	立ち上がりは分厚く、端部は内傾する平坦面を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○		
101	壺	口径 (10.6) 残高 3.6	壺もしくは平底の口縁部で端部を丸く収める。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	含細砂粒 ◎	自然釉	

表19　E1区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
102	壺	残高 3.8	肩部の片で削りだし突帯とその下に4条のヘラ描沈線を持つ。	ミガキ	指頭痕・ナデ	にぶい橙色 浅黄色	石・長(1) ○		
103	壺	底径 10.0 残高 3.6	平底。	[胴]ナデ [底]指頭痕 [底周]ナデ	マメツ	褐灰・ にぶい褐色 浅黄色	石(2) ○		
104	壺	残高 3.8	肩部に棒状工具による記号もしくは絵画の一部と思われる施文。	ハケ	指頭痕→ケズリ	明褐灰色 黄褐色	石(2) ○		13
105	壺	底径 10.0 残高 3.6	平底。	ハケ(8本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	にぶい褐 ～灰色 浅黄橙色	石・長(1～2) ○		
106	壺	底径 (4.2) 残高 4.6	平底。	[胴]ハケ(8本/cm) [底周]ナデ	ハケ・指頭痕→ナデ	にぶい橙 ～灰褐色 褐灰色	石・長(1) 金 ◎	黒斑	
107	鉢	口径 (14.6) 残高 5.3	口縁に刺み目を持つ。	マメツ	ナデ	灰白色	石・長(1) ○		
108	鉢	口径 (17.4) 残高 3.2	鉢形に近い。	マメツ	[口]ヨコナデ ナデ	にぶい赤褐色 褐灰色	石・長(2) ○		
109	鉢	口径 (23.6) 残高 5.2	鉢形に近い。	[口]ヨコナデ [胴]ミガキ	[口]同転ナデ [胴]指頭痕→ナデ	にぶい褐色	石(2) 金 ◎		
110	鉢	口径 (16.4) 残高 9.2	鉢形に近い。	[口]指頭痕→ヨコナデ [胴上]指頭痕→ナデ [胴下]ハケ→ナデ	[口]同転ナデ ナデ	にぶい褐色	石・長(2) 金 ◎		
111	坏	口径 (12.2) 残高 4.4	大井の高い坏蓋。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 〃	長(1) ◎		
112	坏	口径 (13.8) 器高 3.6	天井、口縁部境に稜を持つ。	[口]同転ナデ [天]ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
113	坏	口径 (12.0) 残高 2.8	6世紀代の坏蓋。	[口]同転ナデ [天]ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色	長(1) ◎		
114	坏	口径 (10.0) 残高 4.5	直立気味の高い立ち上がりを持つ身で口径が小さい。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	長(1) ◎		
115	壺	残高 3.2	外方向の折り曲げ口縁で、頸部はあまり締かくない。	回転ナデ	回転ナデ	暗紫灰色 灰色	含細砂粒 ◎		

表20　W1区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
116	壁	口径 (21.6) 残高 6.9	折り曲げ口縁。端面に刻み。	工具によるナデ	工具によるナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
117	甕	底径 5.3 残高 5.5	上げ底の底部。	[胴]ハケ(6本/cm) [底]ヨコナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1~3) ○		
118	甕	底径 3.6 残高 2.6	上げ底の底部。	[底]ハケ(6本/cm) [胴]ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) ○	内に黒斑	
119	甕	底径 (4.8) 残高 3.3	平底。	[胴]ハケ(8本/cm) [底]ナデ	ナデ	にぶい橙色 明褐灰色	石(1) ○		
120	鉢	口径 (26.0) 残高 10.9	ボウル形の鉢。	ミガキ	胴部横→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石(1~2) ○		
121	高坏	LI径 (15.6) 残高 9.4	深皿形のもので櫛描波状文が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	含細砂粒 ○		14
122	高坏	底径 (9.0) 残高 1.2	脚部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰・暗灰色 灰色	長(1) ○		
123	壺	底径 (12.6) 残高 1.4	平底。	[底]ヨコナデ [底面]ナデ	ケズリ	灰色 灰色	石(1) ○		
124	坏	LI径 (9.8)・ 底径 (5.4) 器高 4.0	内湾気味の坏部と貼り付け高台を持つ。	[口]回転ナデ [高台端]ヘラナデ [底]ヨコナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
125	坏	LI径 (13.8) 底径 (10.0) 器高 3.8	口縁端部を内湾気味に丸く収める。	[口,回転ナデ 底面]ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		14

表21　E2区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
126	甕	口径 (18.0) 残高 6.1	如意形に折り曲げた口縁端部を刻んでいる。	ナデ	ヘラケズリ(工具によるナデ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) 金 ○		
127	壺	底径 9.2 残高 4.5	外底面周縁部内側に凹凸の歪みがある。	ナデ	ナデ・指頭痕	橙・灰褐・黄褐色 橙色	石・長(1) ○		
128	壺	底径 9.9 残高 3.7	人型壺の底部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1~3) ○	黒斑	
129	壺	底径 (12.8) 残高 2.0	人型壺の底部。	[底]ハケ(8本/cm) [底面]ナデ	ナデ	灰白色 黒褐色	石・長(1~2) 金 ○		
130	壺	底径 (7.2) 残高 3.0	人型壺の底部。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 褐色	石・長(1) ○		
131	壺	底径 2.0 残高 2.2	平底。	ハケ(7本/cm)	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○		
132	壺	底径 3.2 残高 3.9	平底。	ハケ・ナデ	ナデ・指頭痕	黄褐色 黒褐色	石・長(1~3) ○		
133	鉢	口径 (14.8) 残高 4.1	口縁部を外側に玉縁状に肥厚する。	[口]ヨコナデ [肩]ハケ	[口]ハケ→ナデ [肩]ハケ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石(1) ○	黒斑	
134	鉢	底径 3.4 残高 2.8	深み底。	[底]ミガキ [底面]ナデ	ミガキ?ナデ?	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○	黒斑	
135	鉢	底径 3.8 残高 3.2	深み底。	ナデ・指頭痕	ナデ	にぶい橙・浅黄色 橙色	石(1~3) ○	黒斑	
136	鉢	底径 5.5 残高 2.7	深み底。	[底]ナデ [底面]ケズリ→ナデ	ヘラミガキ(ナデ)	明褐色 橙色	石・長(1~3) ○		
137	壺	口径 (18.8) 残高 3.5	内湾気味の口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) 金・赤 ○		

138	壺	口径 (18.2) 残高 3.3	直線的に開く口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色 にぶい橙褐色	石(1) 金・赤 ○	
139	壺	口径 (17.0) 残高 2.0	頸部を玉縁状に肥厚させた口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○	
140	壺	底径 11.4 残高 2.4	台付壺の台の部分。屈曲部に3条の沈線があり、直上に透孔の痕跡が確認できる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) ○	
141	坏	口径 15.4 残高 4.9	口縁部に多段階での歪みを残す。	ヨコナデ	ミガキ	灰白・黒色 黒色	石・長(1) ○	

表22　W2区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
142	壺	残高 2.3	ヘラ描沈線文を持つ小破片。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
143	壺	残高 3.1	ヘラ描沈線文を持つ小破片。	ナデ	ナデ・指頭痕	黄橙色 灰白色	石・長(1) ○		
144	壺	底径 (7.2) 残高 2.5	突出した平底の底部。	ナデ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ○		
145	壺	底径 (20.0) 残高 5.8	平底。	[胴]ハケ→ナデ [底]ナデ	ナデ	暗褐灰色 黒褐色	石・長(1～3) 金 ○		
146	甕	口径 (20.2) 残高 3.4	口頸部片。	[口縁]ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)	[口縁]ハケ [口]指頭痕→ナデ	暗赤褐色 明赤褐色 黄橙色	石(1) 金 ○		
147	甕	底径 1.6 残高 2.7	コイン大の平底。	[底]ハケ [底面]ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石(1～3) 金 ○	黒斑	
148	坏	口径 (13.2) 残高 3.3	単純な形態の壺。	[口]回転ナデ [大]ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
149	坏	口径 (13.4) 残高 2.8	内傾する立ち上がりを持つ身。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
150	坏	口径 (13.0) 残高 3.6	内傾する立ち上がりを持つ身。	[口]回転ナデ [底]ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰褐色	石(1) ○		
151	坏	底径 (6.0) 残高 2.8	貼り付け高台を持つ坏。	[底]回転ナデ [底面]ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
152	坏	底径 (9.6) 残高 1.5	貼り付け高台を持つ坏。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
153	壺	口径 (13.2) 残高 4.2	口縁は玉縁状である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1～3) ○		
154	坏	口径 (14.0) 底径 (11.0) 器高 3.4	回転台土師器。	回転ナデ	回転ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○		

表23　E3区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
155	壺	口径 (17.2) 残高 3.2	外反しながら開く口縁部で、1条の沈線が口縁部の下端を縁取る。	ヨコナデ	1)頸部ヨコナデ 2)ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石(2) ○		
156	壺	残高 2.0	口頸部の片で、下方に垂直した隆線に指頭痕を施している。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
157	壺	口径 (27.6) 残高 6.8	複合口縁壺の口頸で、5本単位の櫛描波状文を2段にわたって巡らせている。	ナデ	ナデ・指頭痕	灰白・橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
158	壺	底径 (11.0) 残高 4.2	平底。	[底]ミガキ [底面]ナデ	ミガキ	灰白色 黒色	石(1～2) 金 ○		
159	壺	底径 (6.6) 残高 3.4	平底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 浅黄色	石・長(1～2) 含・赤 ○		

160	甕	口径 (14.2) 残高 6.2	押し出すによる口縁部は端部に面を持つ。	口縁]ナデ 口]ハケ	ハケ→ナデ	暗色 橙色	長(1~2) ○		
161	高坏	残高 2.6	エンタシス状柱部を持つ脚部片。	ミガキ	ハケ	にぶい黄橙色 黒色	石(1) 金 ○		
162	高坏	残高 5.3	外面にヘラ描沈線による脱箔文。	ミガキ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石(1) ○		
163	高坏	残高 8.0	中位の付近に円孔が3方向に穿たれている。	ハケ(12本/cm)→ミガキ	ナデ	灰黄に近い褐色 灰黄に近い褐色	石・長(1) ○		
164	支脚	器高 3.0	円柱状の支脚。	ナデ・指頭痕		明褐色 明褐色	石・長(1) ○		
165	甕	口径 (16.4) 残高 4.4	受部は器肉が厚く内湾気味に開く。	ヨコナデ	ハケ	にぶい黄色 にぶい黄色	石・長(1~2) ○		
166	甕	口径 (16.2) 残高 3.3	受部は器肉が厚く内湾気味に開く。	ヨコナデ・指頭痕	ヨコナデ	黄褐色 黄橙色	石(1~2) 金・赤 ○		
167	甕	口径 (19.4) 残高 2.8	口縁は直線的に開く。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石(1~2) 金・赤 ○		
168	高坏	口径 14.8 残高 6.5	坏部、坏底部との境に稜を持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ・指頭痕	にぶい橙色 明赤褐色	長(1) ○	黒焼	14
169	高坏	残高 6.8	脚柱部片。	ミガキ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1) ○		
170	鉢	口径 (17.0) 残高 2.7	口縁部片。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	黒褐色 にぶい黄褐色	含細砂粒 ○		
171	鉢	口径 (11.8) 残高 7.1	短く外反する口縁部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
172	把手	残高 3.7	鍋または甑。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~3) ○		
173	坏	口径 (13.6) 残高 3.6	底、天井部と口縁部の境に鋭い稜を持つ。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	石(1~2) ○		
174	坏	口径 (12.6) 残高 3.5	底、天井部と口縁部の境に稜を持つ。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	含細砂粒 ○		
175	坏	口径 (14.8) 残高 3.3	底、天井部と口縁部の境に鋭い稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	含細砂粒 ○		
176	坏	口径 (13.2) 残高 5.0	底、天井部と口縁部の境に稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1~2) ○		
177	坏	口径 (16.0) 残高 5.2	底、天井部と口縁部の境に2本の半行沈線。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○		
178	坏	口径 (12.2) 残高 4.4	底、境をふせたような形態。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
179	坏	口径 (11.8) 残高 4.0	身、内傾する比較的短い立ち上がりを持つ。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	長(1) ○		
180	坏	口径 (10.8) 残高 3.1	身、内傾する比較的短い立ち上がりを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1~2) ○		
181	坏	口径 (14.0) 残高 3.7	身、内傾する比較的短い立ち上がりを持つ。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	含細砂粒 ○		
182	坏	口径 (13.0) 残高 2.0	身、内傾する比較的短い立ち上がりを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
183	坏	脚径 (11.6) 残高 1.2	身、貼り付け高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石(1) ○		

184	盌	口径 (10.8) 残高 3.1	短頸壺の蓋。口縁端部は水平な平坦面。	[内]回転ナデ [外]回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	含細砂粒 ○			
185	盌	口径 (11.0) 残高 2.3	内側に突出した中膨みの面を持った口縁端部。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ○			
186	鉢	口径 (14.4) 残高 3.7	口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰・暗灰色	長(1) ◎			
187	高坏	残高 5.8	坏部片。2条の突帯と櫛描波状文を施す。	[坏上]ナデ [坏下]ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰・暗灰色	長(1) ◎			
188	鉢	残高 5.3	口縁部外面に肥広の肥厚帯。端部下位に沈線1条。	タタキ→回転ナデ	タタキ→回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○			
189	土錘	長さ (4.6) 幅 2.4 重さ 13.8g	側面楕納錘形の紡錘状。	マメツ	マメツ	明赤灰・橙色 明赤灰・橙色	含細砂粒 ◎			15

表24 W3区出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
190	盌	残高 4.6	線刻または絵画。屑部付近の片。	ミガキ	磨滅痕	褐灰色 灰白・褐灰色	石・長(1) ◎		
191	把手	残高 4.2	鍋または甑。	マメツ		明赤褐色	石(4) ○		
192	坏	口径 (12.0) 底径 (7.0) 器高 3.6	外反する口縁部。	ヨコナデ [底面]マメツ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ◎		
193	坏	口径 (11.0) 底径 (4.2) 器高 2.6	わずかに内湾しながら立ち上る口縁。	ヨコナデ [底面]回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		
194	坏	底径 6.5 残高 2.1	円板高台。	ミガキ [底面]回転ヘラ切り	ナデ	にぶい橙色 暗褐色	長(1) ○		
195	坏	底径 (6.8) 残高 2.3	円板高台。	ヨコナデ [底面]回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ◎		
196	坏	底径 6.4 残高 2.2	円板高台。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長(1) ◎		
197	坏	底径 (6.2) 残高 2.8	円板高台。	マメツ [底面]回転ヘラ切り	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) ◎		
198	坏	底径 6.0 残高 1.8	円板高台。	マメツ	マメツ	明褐色 にぶい橙色	長(1) ○		
199	坏	底径 8.2 残高 3.2	ヘラ切りした外底面に強い粘り付け輪高台。	ナデ	ナデ	灰白・淡赤橙色 灰白・淡赤橙色	長(1) 赤 ○		
200	坏	底径 (13.8) 残高 1.7	大型品。貼り付け高台。	ヨコナデ・糸切り痕	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
201	皿	口径 (17.4) 底径 (10.0) 器高 1.7	わずかに外反して開く口縁。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	長(1) ◎		
202	鍋	残高 2.1	丸く収めた短い口縁端部。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	含細砂粒 ◎		
203	鍋	口径 (28.4) 残高 6.8	外に開く長めの口縁。	[上]ナデ [胴]ハケ	ハケ	明褐灰色 浅黄橙色	石・長(1～3) ○		
204	鍋	残高 2.4	内湾しながら短く開く口縁。	斜位痕	斜位痕	オリーブ灰色 灰白色	石・長(1) ◎		
205	壺	口径 (18.8) 残高 4.7	口縁端部やや下に断面三角形の突帯1条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
206	壺	残高 6.0	長頸壺の胴部片。屑部に刺突列点文。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	長(1～3) ◎		

207	坏	口径 (10.0) 底径 7.2 器高 3.8	身。	[口]回転ナデ [底]ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		14
208	高坏	残高 2.2	小型品。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1) ○		
209	鉢	口径 (22.6) 残高 6.4	外反気味に起く立ち上る口縁。若干のくびれを持つ胴部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
210	土錘	長さ 5.4 幅 1.7 重さ 14.6g	細管状。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡橙色	長(1) ○		15

表25　W3区出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
211	砥石		砂岩	7.5	4.7	3.8	169.58		

表26　E4区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
212	甕	口径 (22.0) 残高 5.3	如意形に折り曲げられた口縁。頸部下端に隆み。	[口]ヨコナデ [肩]ハケ→ナデ	[上]ヨコナデ [肩]ナデ	褐灰色 橙色	石(1) 金 ○		
213	壺	底径 (9.0) 残高 3.1	円板状に突出した平底。	ナデ	ハケ→ナデ	浅黄色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	
214	壺	底径 (4.4) 残高 3.1	平底。	ナデ	指ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ○		
215	器台	推定 (18.8) 残高 1.0	鍔または口縁部の片。	[裾部]ヨコナデ [肩]ハケ→ヨコナデ	[裾部]ハケ(6本/cm)	にぶい黄褐色 灰黄褐色	含細砂粒 金 ○		
216	短頸壺	口径 (6.0) 残高 7.1	小型品。短く外反する口縁。端部は外斜した面をなす。偏球形の胴体。	[上]肩上下回転ナデ [肩下]ナデ・指頭圧痕 ナデ	[口・肩上]回転ナデ [肩下]ヘラ [肩下]ナデナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
217	坏	底径 7.6 残高 2.2	円板高台。	ヨコナデ [底面]ヘラ切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
218	坏	口径 10.8 底径 5.8 器高 3.2	外底面にヘラ切り離し底と板状圧痕。	ヨコナデ [底面]ヘラ切り	ヨコナデ	橙色 淡橙色	含細砂粒 ○		14
219	坏	底径 6.5 残高 2.7	円板高台。	ヨコナデ [底面]ヘラ切り	ヨコナデ	淡橙色 淡橙色	石(1) ○		

表27　W4区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
220	浅鉢	残高 5.4	波状口縁。頂部から3条の沈線と穿を介して沈部が垂曲する。	ミガキ	ミガキ	黒褐色 黒褐色	長(1) 金 ○	屋付着	
221	壺	口径 (9.2) 残高 4.9	複合口縁壺。「く」の字口縁。	ナデ・ハケ(8本/cm)	指頭痕→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		
222	壺	口径 (7.6) 残高 4.0	長頸壺。小型品。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	含細砂粒 金 ○		
223	壺	残高 13.0	やや大型の長頸壺。鐘状の頸部。	マメツ	マメツ [頸下]指頭痕	浅黄橙色 浅黄橙～黒色	石・長(1～3) 金・赤 ○		
224	壺	残高 3.4	胴部片。3条単位のヘラ描沈線文。	工具によるナデ	工具によるナデ	にぶい褐色 褐色	石・長(1) ○		
225	壺	残高 9.3	胴部片の肩部に絵画状の線刻。	[胴上]ハケ(10本/cm) [胴下]ハケ→ナデ→ミガキ	指頭痕	明褐色 浅黄～黒色	石・長(2) ○		13
226	壺	底径 2.0 残高 1.8	ボタン状の突起を貼り付けた底部。	ヘラミガキ [底面]ナデ	ナデ	灰黄色 灰白～灰褐色	石・長(1～3) ○	黒斑	
227	壺	底径 6.0 残高 6.3	平底。	マメツ	マメツ(ハケ)	灰白色 灰白色	石・長(1～3) ○		

228	高坏	底径 17.4 残高 15.2	脚端、柱部に3方向3段の円孔。	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	橙・にぶい橙色 にぶい橙色	長(2) ○		13
229	甕	口径 (15.8) 残高 8.0	緩く外上方に折り曲げる口頸部。	[口]回転ロ→ヨコナデ(2) [頸]刺突文→ヨコナデ	[口]ヨコナデ [頸]刷毛目調整→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(2) 金		
230	甕	口径 (18.2) 器高 22.8	外反する口縁。球形の胴部。	ナデ/[胴下]ハケ	ナデ・指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(5) ○		13
231	甕	口径 (13.8) 残高 19.5	やや外反する口縁。球形の胴部。	[口]ヨコナデ [胴下]ナデ	指ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(2) ○		14
232	甕	口径 (18.4) 残高 7.2	厚めの壺縁。	ハケ(10本/cm)	工具によるナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) ○		
233	高坏	口径 (14.6) 残高 5.2	わずかに外反する口縁。口縁と坏底部の境に鋭い稜を持つ。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) ○		
234	高坏	口径 14.4 残高 5.0	内湾する口縁部。坏底部との境に楕円形の焼成後穿孔。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 灰褐色	含細砂粒 ○		14
235	高坏	底径 9.4 残高 7.6	中断れの柱部。水平に広がる裾部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	含細砂粒 ○		
236	高坏	底径 (14.8) 残高 4.7	大きく斜め下方に広がる脚部。	マメツ	マメツ	にぶい赤褐色 暗オリーブ褐色	石・長(1~3) ○		
237	坏	底径 (6.6) 残高 2.0	円板高台。	ナデ [底面]回転ヘラ切り	ナデ	灰白色 灰白色	長(1) 赤 ○		
238	塊	底径 (5.6) 残高 3.1	内湾上器。貼り付け高台。	ナデ [底]回転ヘラ切り	ヘラミガキ	暗黄褐色 黒色	石・長(1) ○		
239	塊	底径 (6.8) 残高 2.2	内湾上器。貼り付け高台。	ナデ(ミガキ)	ヘラミガキ	灰白色 黒色	長(1) ○		
240	坏	口径 (13.0) 残高 3.2	蓋。内面に浅い段を持つ口縁。天井部と口縁部境に稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~3) ○		
241	高坏	残高 4.3	脚柱から坏底部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
242	高坏	底径 (8.0) 残高 2.7	細脚一段透かし。	回転ナデ	指ナデ	灰色 青灰色	長(1) ○		
243	瓶	口径 (9.0) 残高 2.7	摂取もしくは横変。わずかに丸く肥厚した端部。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰・灰色 灰色	長(1) ○		
244	塊	底径 (6.5) 残高 1.2	緑釉陶器。削り出し輪高台。	ケズリ→ナデ	回転ナデ	淡青緑色 淡青緑色	精製土 ○	施釉	15

表28 E5区出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
245	高坏	口径 (23.8) 残高 3.6	坏体部から稜を柱って開脚し、短くかち上る口縁。外面に4条の沈凹線。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~2) ○		
246	鉢	底径 (5.6) 残高 5.4	やや偏み底。	[胴]ケズリ→ナデ [底]ナデ	[胴]ナデ [底]指頭痕	灰褐色 橙色	石・長(1~2) ○		
247	鉢	口径 (21.2) 器高 12.6	水平近くまで強く内面ナデられた口縁。偏球形の胴部。丸底。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ→ナデ(6本/cm)	[口]ヨコナデ [胴上]ハケ(8本/cm) [胴下]指頭痕→ナデ	明褐色 にぶい褐・黒灰色	石(1~2) ○	黒磯	13
248	坏	底径 6.4 残高 1.7	底部片。	回転ナデ・ミガキ [底面]ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰・灰色 灰色	長(1) ○		
249	坏	底径 6.0 残高 1.7	円板高台。	回転ナデ [底面]自転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
250	塊	口径 (14.0) 器高 4.1	着干外反する口縁部。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		

251	境	底径 (6.3) 残高 4.2	黒色土器。貼り付け高台。A類。	口下ミガキ 口上ヨコナデ 底ヘラ切り	ミガキ	浅黄橙色 黒色	石・長(1) ○		15
252	境	底径 (6.0) 残高 3.5	黒色土器。貼り付け高台。A類。	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 黒色	含細砂粒 ○		
253	境	口径 16.0 器高 6.5 器高 6.5	黒色土器。貼り付け高台。A類。	回転ナデ	ミガキ	灰白色 黒色	含細砂粒 ○		15
254	境	口径 (15.8) 器高 3.8	黒色土器。A類。	回転ナデ	ミガキ	灰褐色 黒色	石・長(1) ○		
255	境	口径 (12.0) 残高 4.3	黒色土器。A類。	ナデ(ミガキ?)	ミガキ	淡黄・黒色 黒色	石・長(1) ○		
256	境	口径 (14.0) 残高 4.4	黒色土器。内湾気味に立ち上る口縁。B類。	ミガキ	ミガキ	黒色 黒色	含細砂粒 ○		
257	境	口径 (12.6) 残高 3.5	口縁内面に稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		

表29　W5区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面) (内面)	焼成	備考	図版
258	深鉢	残高 5.6	胴部片。断面三角形の低い突帯に「D」の字状の刻み。	マメツ	指頭痕・ナデ(ミガキ?)	淡黄色 淡黄色	石・長(2) ○	黒斑	
259	深鉢	残高 3.0	胴部片。断面三角形の突帯に巻貝による刻み。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
260	甕	口径 (24.2) 残高 4.5	肉厚の口縁部片。	[L]連]ヨコナデ 指頭痕・ハケ(本来はヨコナデ)	[口縁]ヨコナデ ハケ	黒褐色 褐灰色 黒褐色	含細砂粒 ○		
261	坏	口径 11.2 底径 6.1 器高 4.0	外反する口縁。円板高台。	マメツ [底]回転ヘラ切り	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		14
262	坏	口径 11.0 底径 5.9 器高 4.2	内湾気味に立ち上る口縁。円板高台。	マメツ [底]回転ヘラ切り	マメツ	浅黄色 浅黄色	石・長(1) ○		14
263	坏	底径 6.3 残高 2.0	円板高台。	ナデ [底]回転ヘラ切り→ナデ	ナデ	淡橙色 淡橙色	石・長(1~2) ○		
264	坏	底径 7.1 残高 2.2	円板高台。	ナデ [底]回転ヘラ切り→ナデ	ナデ	明褐色 暗褐色	長(1) ○	黒斑	
265	坏	底径 (6.8) 残高 2.8	円板高台。	ヨコナデ [底]回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1) ○		
266	坏	底径 (6.8) 残高 1.8	円板高台。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り→ナデ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		
267	坏	底径 (7.0) 残高 3.0	円板高台。	ヨコナデ [底]回転ヘラ切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
268	坏	底径 (6.7) 残高 2.7	円板高台。	ナデ [底]回転ヘラ切り	ナデ	淡橙色 橙色	長(1) ○		
269	坏	底径 10.5 残高 4.3	大型品。貼り付け高台。	ヨコナデ	ヨコナデ(ハケ?)	浅黄橙色 黒褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	
270	壺	口径 (13.8) 残高 3.8	器壁は薄い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
271	壺	L径 (14.0) 残高 3.8	内黒土器。口縁部内面直下に細い稜を持つ。A類。	マメツ	ヘラミガキ	浅黄橙色・灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○		
272	壺	L径 (14.0) 残高 3.8	内黒土器。A類。	マメツ	ヘラミガキ	明黄褐色・黒色 黒色	石・長(1) ○		
273	壺	L径 (10.6) 底径 (8.2) 器高 9.1	口縁は断面台形状の突帯を貼り付けて肥厚させている。頸部に波状文が施文で施文できる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	含細砂粒 ○		

271	高杯	口径 (10.4) 脚径 (8.2) 器高 9.1	短脚一段透かしの有蓋高杯。	[坏口]ヨコナデ [坏底]ヘラケズリ [脚]ヨコナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ○		
275	壺	口径 (13.2) 残高 5.7	外上方に開く口頸部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		
276	壺	底径 (8.2) 残高 2.3	平底。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰~青灰色	含細砂粒 ○		
277	坏	底径 (10.6) 残高 1.2	貼付け高台。	回転ナデ	回転ナデ→タテナデ	暗灰色 青灰色	長(1) ○		
278	坏	底径 (6.4) 残高 1.6	円板高台。底面に板目痕。	回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		
279	坏	口径 (14.1) 底径 6.7 器高 5.0	平底。外反する口縁。	回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○		14
280	鉢	残高 4.5	内側して立ち上がる口縁。	[口]回転ナデ タテナデ	[口]回転ナデ ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	含細砂粒 ○		
281	合子	口径 3.6 器高 1.1	蓋・身の外面に紐打ち薄弁文。	回転ナデ	回転ナデ	明緑灰色 灰白色	含細砂粒 ◎	施釉	16
283	土錘	長さ (4.0) 幅 1.5 重さ 3.9g	側面観楕円形の管状土錘。	マメツ	マメツ	淡橙色 淡橙色	長(1) ○		15

表30 W5区出土遺物観察表 瓦

番号	器種	法量				調整		胎土	焼成	備考	図版
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	凸面	凹面				
282	平瓦	6.3	4.5	2.5		縄掛タタキ	布目				16

表31 W5区出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
284	砥石		陶石	10.3	6.9	3.8	352.6		

表32 E6区出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面) (内面)	胎土	焼成	備考	図版
285	甕	残高 5.3	頸部をやや下がった位置に厄痕文突帯1条。	[上]ヨコナデ [胴]タテミガキ	胴頂部:ヨコナデ	褐色 灰褐色	長(1) ○			
286	高坏	残高 5.9	脚柱部片。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) ○			
287	高坏	底径 (10.4) 残高 3.6	裾部片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石(1) ○			

表33 W6区出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面) (内面)	胎土	焼成	備考	図版
288	壺	残高 6.5	頸部片。下位に櫛描状工具による平行沈線。	タテミガキ	工具によるナデ	黒褐色 褐灰色	長(1) ◎			
289	壺	口径 (15.8) 残高 7.0	複合口縁壺。	マメツ	マメツ	明黄褐色 淡黄橙色	石(1~2) ○			
290	鉢	口径 (10.2) 残高 2.8	初句山子による短い口縁。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長(1~2) ○			
291	鉢	残高 5.7	口縁部に凹凸を設けている。	ミガキ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) ◎			
292	甕	口径 (21.8) 残高 8.7	口縁端部はやや上方に肥圧した面をなす。	[上端]ヨコナデ [肩]上向によるナデ	[口]ヨコナデ [胴]ハケ	褐灰色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○			
293	甕	底径 (8.0) 残高 5.6	くびれを持った上げ底。	[底上]ハケ ヨコナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい赤橙・灰白色	石・長(1~2) ◎			
294	甕	底径 5.4 残高 6.3	平底。	ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○			

295	高坏	残高 6.5	脚柱部。	下段によるナデ	[脚部]マメツ(ナデ) [脚裾]ナデ	にぶい橙・黒褐色 にぶい橙・黒褐色	石・長(1~3) ◎			
296	浮文	長さ 2.1 幅 2.3 厚さ 0.6	壺もしくは甕台口 縁面から脱落した円形浮文。	ナデ		にぶい褐色 にぶい褐色	含細砂粒 ○			
297	坏	底径 (7.6) 残高 2.0	円板高台。	ナデ [底面]マメツ(回転ヘラケズリ)	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1) ○			
298	塊	底径 2.9 残高 2.1	円板高台。	マメツ(ナデ) [底面]回転ヘラケズリ→ナデ	マメツ(ナデ)	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○			
299	塊	底径 (6.8) 残高 2.6	貼り付け輪高台。	回転ナデ	ミガキ・ナデ?	淡黄色 黒色	含細砂粒 ◎			
300	器台	残高 5.7	口縁部は上下に被張される。断面三角形の細い突帯状。その間に沈線文。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	含細砂粒 ◎			
301	坏	口径 (11.6) 残高 4.3	大井澤と口縁部の境に鋭い稜を持つ。	[上]回転ヘラケズリ [上]回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	石・長(1~3) ◎			
302	高坏	底径 (8.6) 残高 2.2	有舎高坏の脚端部片。短脚且段透かし。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎			

表34　W6区出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
303	鉄鏃		鉄	12.5	1.3	0.9	18.48		16

表35　採集・出土地不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
304	壺	残高 5.2	肩部片。沈線のような浅い段。	ミガキ	斜位削→ナデ	灰白色 浅黄色	石(1) ○		
305	甕	残高 4.6	如意形に緩く折り曲げられた口縁。端部は丸く収める。偏曲に刻み。	マメツ(ロクロナデ)	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) 金 ○		
306	甕	口径 (16.4) 残高 4.7	大きく外反する口縁。	ハケ(8本/cm)	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙、灰褐色	石・長(1~2) ○		
307	高坏	口径 (15.2) 残高 3.2	口縁と坏底部の境に鋭い稜を持つ。	マメツ	マメツ	明褐色 明褐色	含細砂粒 ○		
308	塊	底径 7.8 残高 2.3	黒色土器A類。	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~2) ◎		
309	坏	口径 (13.0) 残高 3.6	蓋。口縁部と天井部の境に鋭い稜を持つ。	[天]回転ナデ [天]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
310	坏	口径 (14.0) 残高 3.5	蓋。口縁部と天井部の境に鋭い稜を持つ。	[口]回転ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		
311	坏	口径 (12.8) 残高 3.7	身。立ち上がは比較的長く、やや内傾する。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
312	坏	底径 (7.4) 残高 2.2	身。貼り付け高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
313	坏	口径 (16.0) 底径 (11.4) 器高 3.1	平底から斜めに立ち上り、口縁部が強く。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	含細砂粒 △		
314	皿	口径 (14.8) 底径 (12.2) 器高 1.1	大きく開く口縁。	回転ナデ [底面]ヘラ切り→ナデ?	回転ナデ・ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 △	黒斑	

表36　採集・出土地不明遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
315	鞴		鉄	17.7	1.1	0.8			16

第3章

拓南中学校構内遺跡

第３章　拓南中学校構内遺跡

１．調査の経過と組織

1984（昭和59）年、松山市教育委員会（以下、市教委）は松山市枝松五丁目所在の拓南中学校構内において校舎の増築を計画した。中学校敷地の南半は松山市の指定する文化財包蔵地、「111　小坂五丁目遺物包含地」に含まれる範囲にあり、増築予定地である校庭の600㎡部分については、このエリアの北直近に隣接する部分にあたり、この場所については工事に先立つ発掘調査が必要と判断された。このため市教委は、同年７月４日より発掘調査を開始、およそ１ヶ月の調査期間を経た８月６日調査を終了した。

図51　調査地位置図（S=1：2,000）

調査組織

松山市教育委員会　教育長　西原多亮男
　文化教育課　課長　藤原　渉
　　課長補佐　坪内　晃幸
　　第二係長　大西　輝昭
　　主任　西尾　幸則
　　調査員　池田　学
　　松村　淳

調査地　愛媛県松山市枝松五丁目4番39号
調査期間　1984（昭和59）年7月4日～1984（昭和59）年8月6日
調査面積　600㎡

2．調査の成果

（1）調査地の区割りと層序（図52・54）

グリッド割は図52に示したように、調査地の形状にあわせて4m四方のグリッドを設定し、それぞれのグリッドに図示したような呼称を与えて調査を行った。

層序は、基本的に第1～3層が造成に関わる土、その下層の第4層が旧水出面、この第4層直下の第5層黒色シルトに遺物が包含され、その下層の第6層茶褐色シルト面で遺構が検出された。検出された遺構は弥生時代のものと中世のものが主であるが、弥生時代の遺構は、第5層に近い灰色系のシルトで埋まっており、中世以降の遺構は暗灰色系の土が埋土となっている。

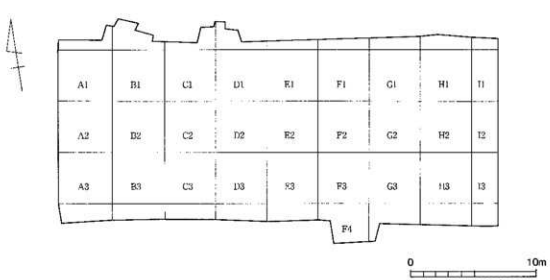


図52　調査地の区割り

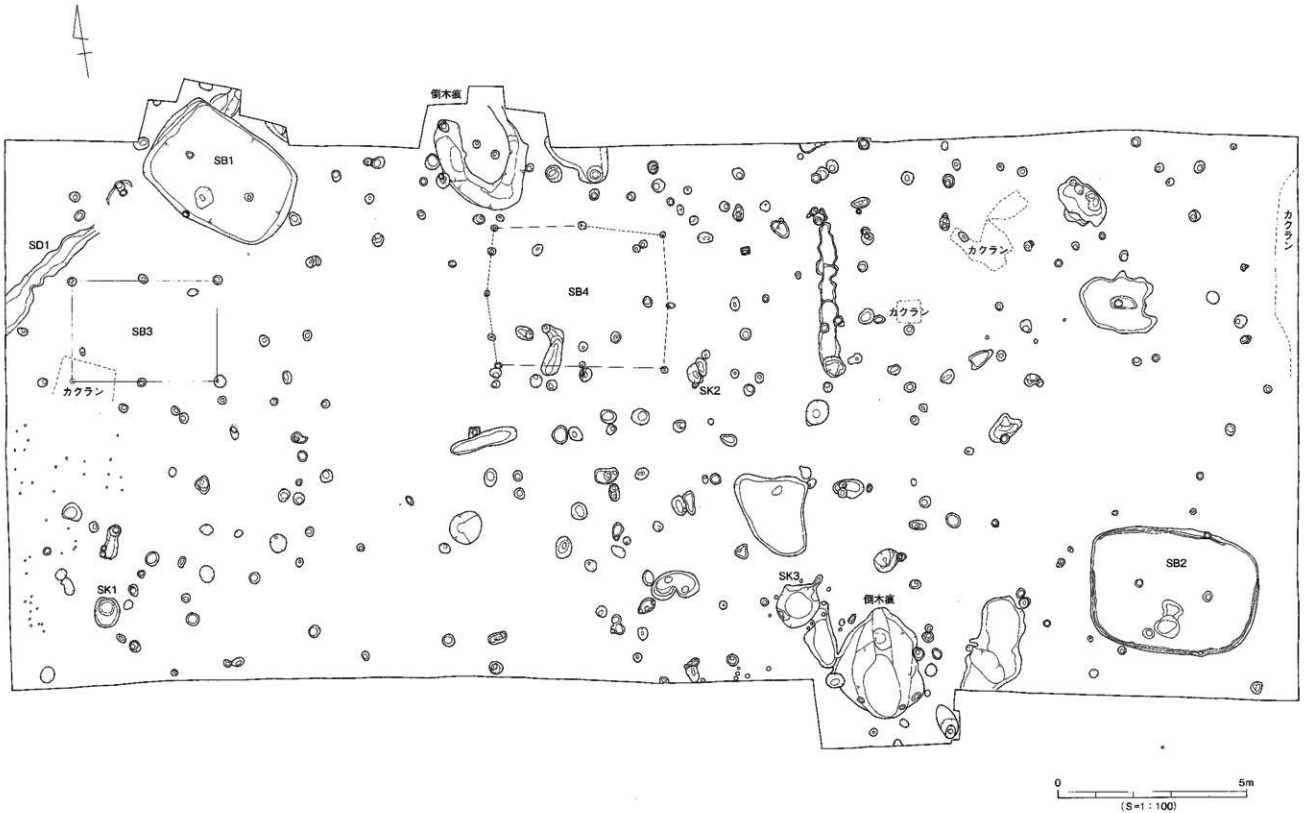

倒木痕
SB1
SD1
SB3
カクラン
SB4
SK2
カクラン
カクラン
カクラン
SK1
SK3
倒木痕
SB2
0
5m
(S=1:100)

図53　遺構配置図

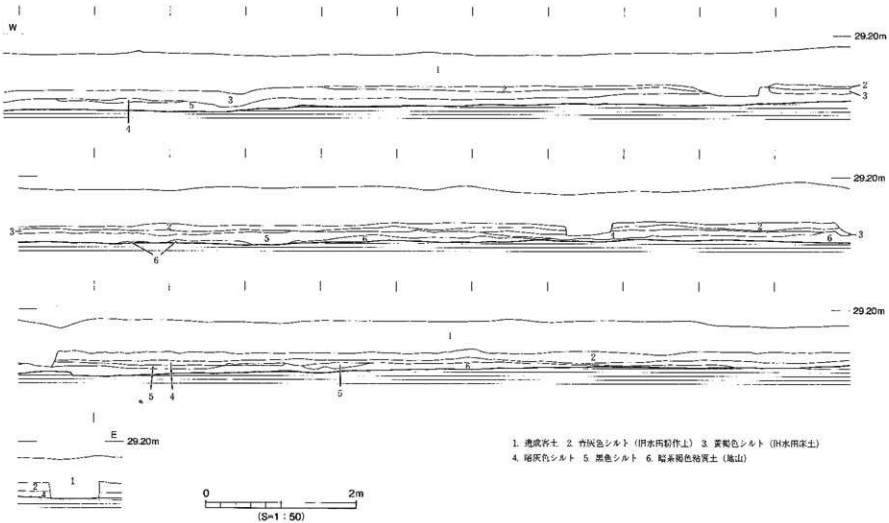


図 54　調査区南壁土層図

（2）弥生時代の遺構と遺物

a. 竪穴住居

SB1（図55）

調査地北東部で検出された、4.0 × 2.8mの隅丸長方形プランをなす住居である。立ち上がりは20cm程度の遺存で、周壁溝は確認されていない。長軸ライン上の2ヶ所に直径20cmあまりの主柱穴を1.9m間隔で持つ。深さは30～40cm程度である。柱穴間の南辺寄りに直径60cm、深さ30cmの断面擂鉢状の、炉址と考えられる穴がある。後期後半の遺構である。

SB1出土遺物（図54）

弥生土器

壺（316～319） 316は、やや短い口縁部が外上方に開くもの。外面の肩部から頸部まで刷毛目調整されている。317は口縁部、底部を欠くもので、球形の胴部としまった頸部を持つ。底部付近の器壁の厚さからすると、丸底にはならないと思われる。底部318・319は、ともに立ち上がりが鈍い稜となる平底である。

台付鉢（320） 口縁部と台脚部を欠くが、ボウル状の体部に低く広がる脚台が付くものである。台には円孔が伴っていることが対向する2ヶ所に確認できる。

須恵器

鉢（321） 混入と思われる小破片。東播系の鉢口縁部、端部が断面三角形状に肥厚して上方に伸びる。13世紀代のもの。

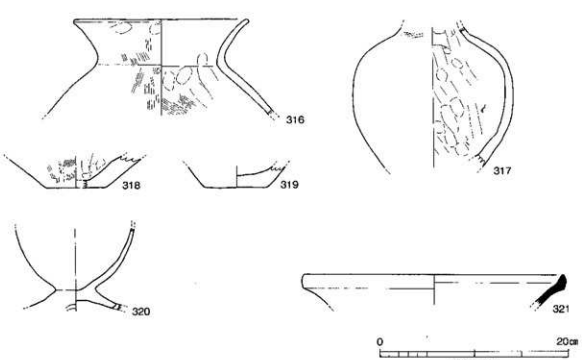


図55 SB1出土遺物

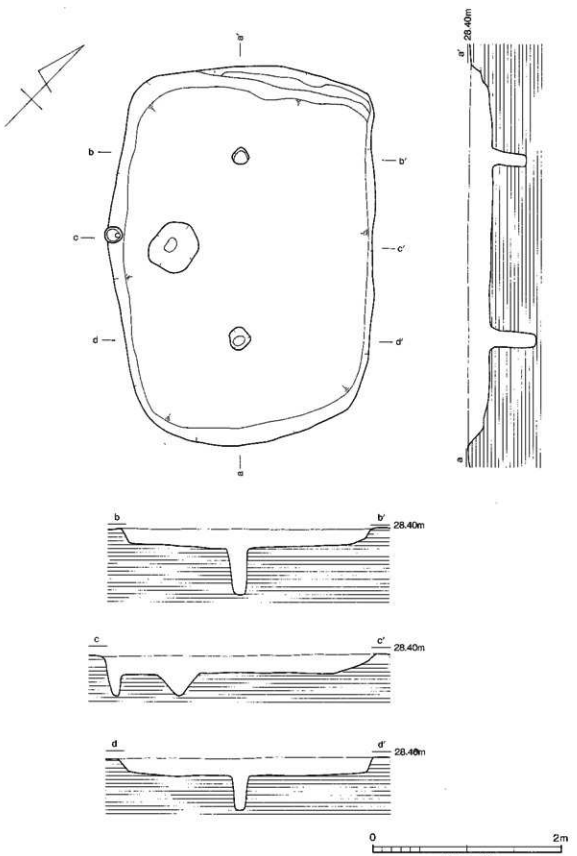


図 56　竪穴住居 SB1

SB2（図56・57）

調査地南西部検出の住居である。SB1同様の隅丸長方形プランをなすが、ひとまわり大きく、4.5×3.3m規模のものである。立ち上がりは10cm程度しかないが、周壁溝と考えられる、深さ5cm程の溝が立ち上がり床下に巡っているが、北東、北西のコーナー部分の2ヶ所で途切れている。この住居も、長軸ライン上の2ヶ所に直径20cmあまりの柱穴を持つが、その間隔も1.9mとなっている。SB1と同じく、柱穴間の南辺寄りに炉を持つが、内側へ向けて浅いテラス状の窪みを備えている。床面上で弥生土器の破片を多く出土しているが、その多くが炉址に詰め込まれたような状況での検出である。建物廃棄の際の行為であろうか。後期後半の遺構である。

SB2出土遺物（図58～61）

弥生土器

壺（322～346） 322は短頸壺、丸みを持ったやや長胴の胴部から締まった頸部を経て、短めの口縁部が直線的に外上方に開くものである。323は、球形に近い胴部にやや小さめの平底を持つもの。頸部以上を欠くが、筒状の頸部が立ち上がるものと思われる。内外面ともに刷毛目調整されているが、外面の底部寄りはその後磨かれている。内面には指頭圧痕が顕著である。324～326は複合口縁壺。324は、同一個体の口頸部であるが、接点がない。無文の口縁部は外面に稜を持って屈曲し、内湾気味に伸びる。頸部にはヘラ描斜格子文を施した薄く細い突帯が貼り付けられている。325～327も口縁部は無文のものである。うち、326の口縁部は324同様の内湾傾向、また325、327は直線的に伸び、頸部突帯を持たないところで似通っている。この327は、接点を持たない同一個体の長胴の胴部と口頸部を想定復元して図化してある。外面の調整は、胴部から口縁部に至るまで刷毛目による調整である。328の口縁部は、比較的長く直線的に伸びるもので、外面に5本単位の粗い櫛歯状工具で施文が行われている。口端部付近が直線文、その下位に波状文となっている。頸部には斜格子文を持った突帯が1条巡っている。外面は胴部を磨かれ、頸部以上を刷毛目調整されている。329は、短頸広口の小型壺で、平底にやや肩の張った胴部形態をなしている。330は、小型の直口壺。胴部は後述の332～334のような形態になるものと思われる。331は、やや太頸になる壺口頸部である。332・333は、器型の大小はあるものの長胴の胴部からやや長めの口頸部が、さほど開かず外反気味に伸びるもので、胴部334も同様の形態の壺になるものと考えられる。332で器高14.6cm、復元口径8.4cm、333は器高21.5cm、復元口径10.0cmとなっている。332の胴部の肩は張りを持っているが、333はラグビーボール状の胴部となっている。334～346は、胴部下半から底部である。底部は、その立ち上がりの稜の鋭い、鈍い、あるいはやや突出気味になるなど形態に差はあるものの、基本的にはすべてやや小さめの平底であることでは共通している。

甕（347～355） 347は、内面に稜を持たせて頸部を折り曲げるもので、同様の折り曲げは353にもみられる。その他の頸部は緩く折り曲げられている。残りのよい数点をみてみると、350・351は、口径と胴部最大径がほぼ同じで、内外面ともに刷毛目調整されるもの。口端部は平坦な面をなして収められている。これら内外面の調整や口端面の特徴はすべての甕に共通するものである。胴部最大径が口径を凌ぐものは347、349、352、逆に口径が胴部最大径を凌ぐものが353となっている。底部形態は、残っている354・355では平底である。

鉢（356～363） 丈の低い甕形を呈するものが、356～360である。356は、接点のない同一個体の上下を想定復元図面にしたもので、復元口径13.6cm、推定器高11.6cmとなっている。口縁部折り曲げ、

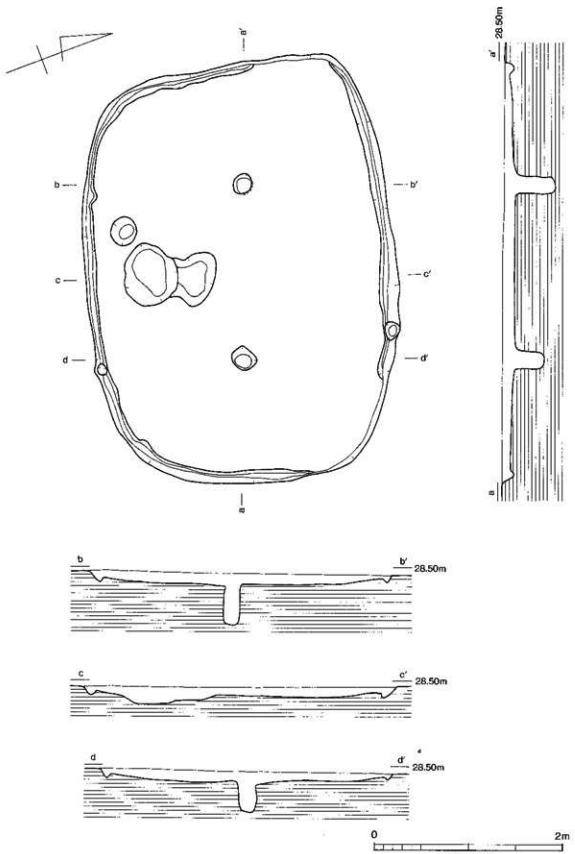


図 57　竪穴住居 SB2

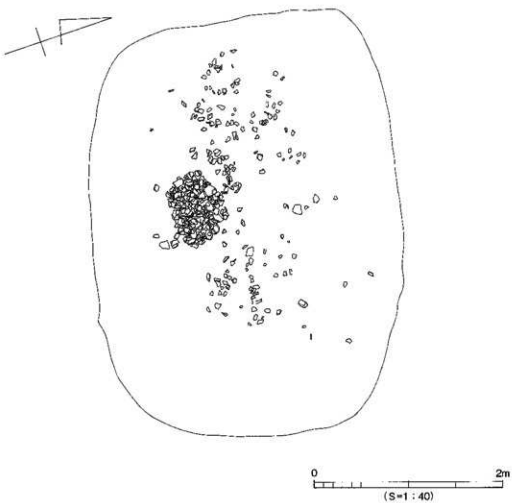


図58　SB2遺物出土状況

底部は若干の窪み底、内外面ともに刷毛目調整されているが、内面はその後撫でられている。357は、小さな平底の底部に、外上方に開く胴部、頸部でくびれないで口縁部が緩く折り曲げられるもの、器高10.0～11.0cm、復元口径16.5cmを測る。胴部外面は刷毛目、内面は刷毛目の後撫で、口縁部は内外面ともに撫でられている。358のプロポーションは356に似ているが、口縁部が相対的にやや長く、大きく外反して折り曲げられるものである。器高11.9cm、復元口径12.6cmを測る。底部はやや窪むが、ほとんど平底といってよい。成形は全体的に粗く、指頭圧痕が随所に残っている。359は、口径のわりに器高が低く寸詰まりの器型のもので、器壁は分厚い。360は、357に似た器型であるが、外面頸部の折り曲げ部位直下に明確な稜を持つのが特徴である。361はボウル状の器型の鉢で、底部は突出した平底、器高8.4cm、口径14.3cmを測る。362は、口縁部、底部を欠く手づくねによる甕形のミニチュア鉢。363の上げ底の底部は、台付鉢のものと思われる。

高坏（364～368）　365は、同一個体の接点のない脚部～坏底部と口縁部とを想定復元して図化したもので、推定器高15.6cm、復元口径30.0cmになるものである。坏底部と口縁部の境に段を持ち、口縁部が大きく外に開く。脚部には直径1.5cmの穿孔が3方向、焼成前に施されている。坏部片364も同様の形態であるが、口縁部の開きが365ほどではない。その他、脚部366～368は中空のもので、367に円孔が1ヶ所確認できる。

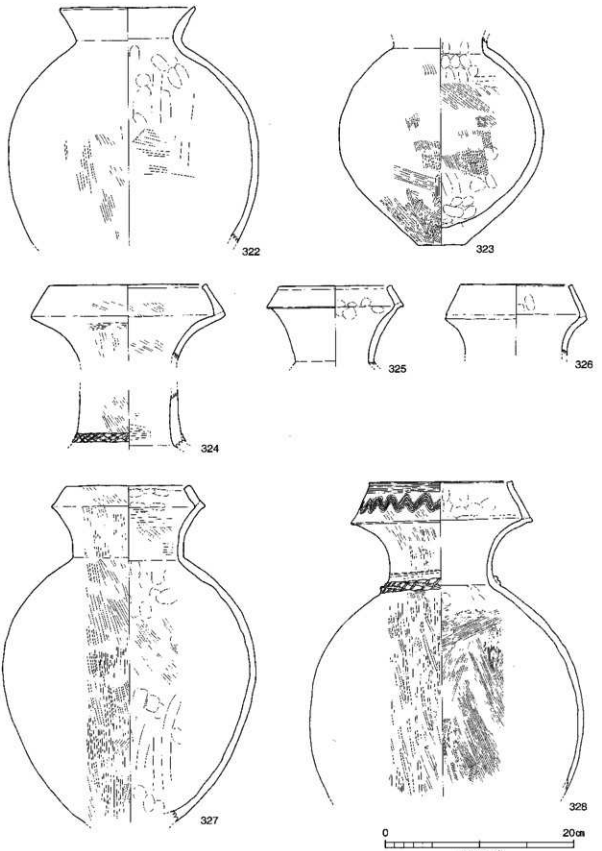


図59　SB2出土遺物（1）

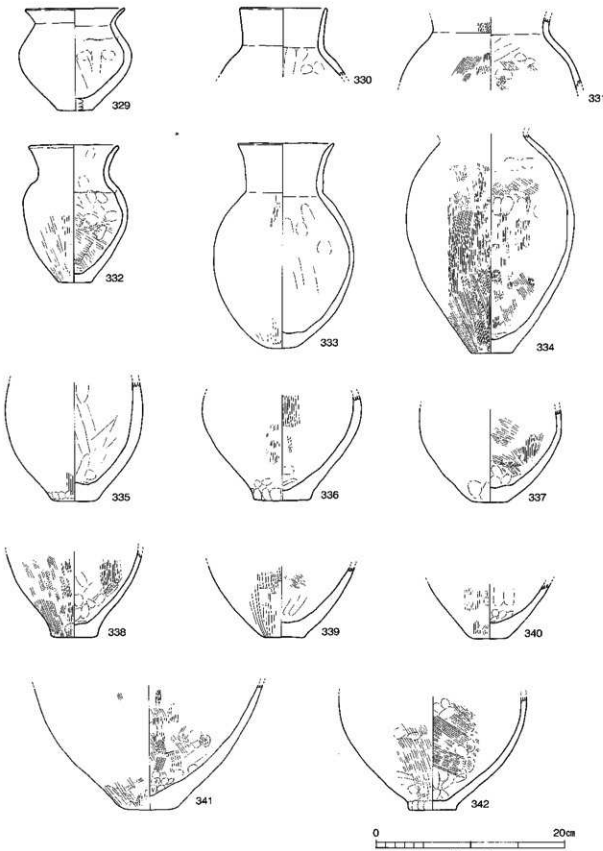


図60　SB2出土遺物（2）

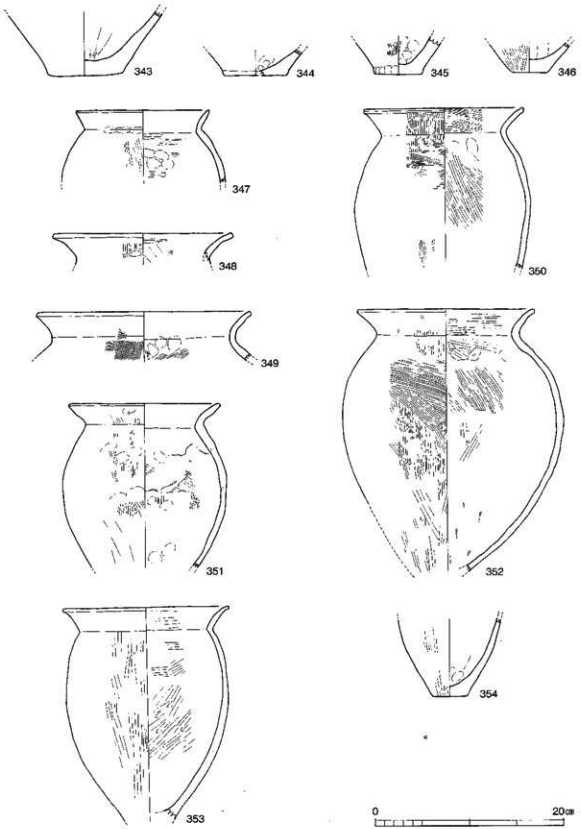


図61　SB2出土遺物（3）

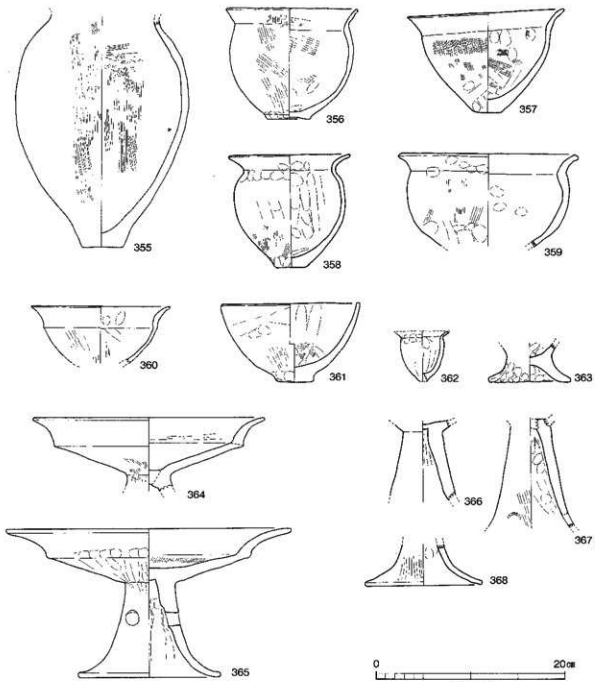


図 62　SB2 出土遺物（4）

b. 土　坑

SK1（図 62）

調査地南西部 A3 区で検出された、0.8 × 0.6m の隅丸長方形に近い形態のものである。深さ 15 cm あまりのテラス状の部分を経て、最深部で深さ 30 cmを測る。後期後半のものである。

SK1 出土遺物（図 62）

弥生土器

甕（369 ～ 373）　上半部片 369 ～ 371 は、いずれも口縁部を折り曲げるもの。うち、口端部にしっ

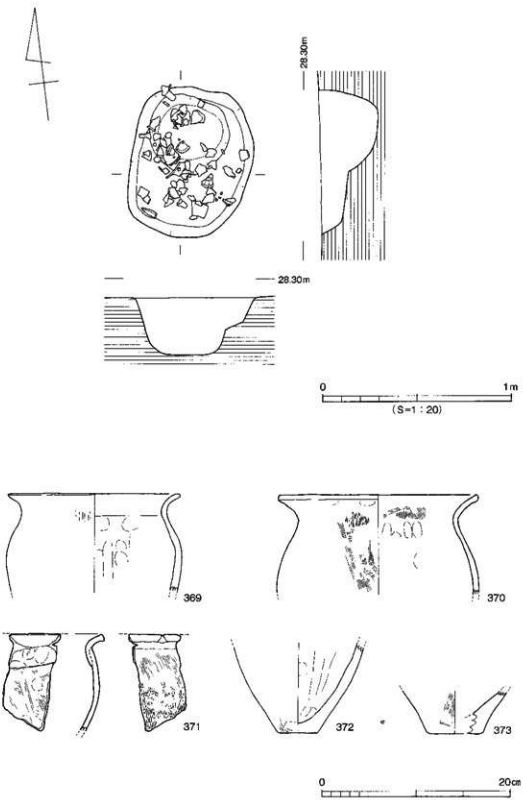


図 63　土坑 SK1・SK1 出土遺物

かりした面を持つのが371、やや丸みを帯びた面をなすもの370、丸く収める369がある。内外面の調整には刷毛目が用いられている。372・373はどちらも平底の底部である。

SK3（図63）

F3区検出のもので、基本的には円形プランの竪坑である。直径1.1～1.2mで、深さ1.3mを測る。断面は若干袋状を呈するが、部分的な壁体の崩壊による結果と考えられる。出土遺物には大型の器台や大型壺、あるいは精製壺、絵画土器など祭祀的な行為を思わせるものがある。竪坑状の掘り方やその深さからみて、井戸であった可能性が高い。後期後半のものである。

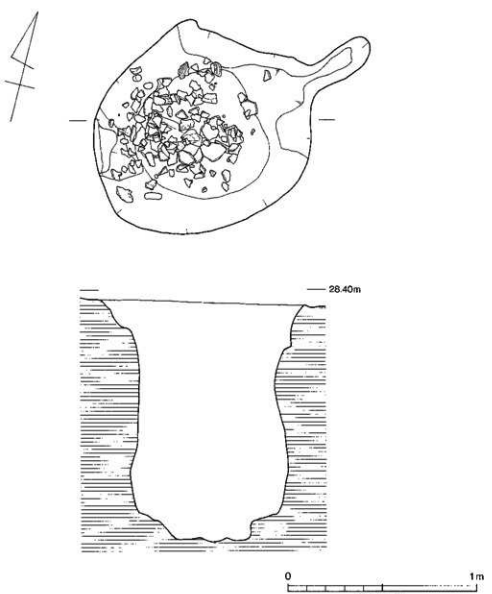


図64　土坑SK3

SK3 出土遺物（図 64・65）

弥生土器

壺（374～383） 374は精製の長頸壺。接合できない3点の破片から想定復元して図化してある。扁球形を呈する胴部から大きくなくびれを持たず、長い口頸部がすぼまっていく形態である。頸胴部境から口縁部直下にかけて5段にわたって櫛描による平行直線文が施されている。施文は、1段11条単位となっている。外面はヘラ磨きによる調整が行われている。375も長頸壺の口頸部片で、筒状の頸部から口縁部がラッパ状に開く。内外面ともに刷毛目調整、口縁部を横撫でされている。376は短頸壺、短く折り曲げられた口縁部と張りのある胴部形態のものである。377は大型複合口縁壺の口頸部、復元口径38.8cmを測る。ほぼ直上に立ち上がった口縁部は、外面と上端面にそれぞれ8条と3条のヘラ描沈線が施文されている。また、外面から上端面を経て内面上端部まで、8方向に2本一対の棒状浮文が貼られ、これらの浮文間に円形浮文が貼られている。棒状浮文には横方向のヘラ刻み、円形浮文には中央部にヘラ先によると思われる刺突がある。頸部にはヘラ描による多段の斜格子文を持った幅広の突帯が貼り付けられ、この突帯下部にも刻みを持った棒状浮文が8方向に貼られている。378は、口頸部を欠く底部～胴部片。平底の底部に張りをやや上位に持つ胴部形態をなす。刷毛目調整された胴部外面の中位より上に、コシの弱い植物の茎のようなものによって描かれた記号、もしくは絵画がある。長く緩いS字状の施文と円とを組み合わせたもので、その意味するところは不明である。また、頸基部にも1条の沈線が確認できる。379は胴部片で胎土、内外面の調整ともに378によく似ており、頸基部の沈線も同様である。この個体にも378同様の素材を束ねたような工具で施文が行われているが、この施文からすると、似ているとはいえ378と同一個体ではないものと思われる。その施文は、頸部沈線のやや下位に3条の横沈線、その下部に5条単位で描いた2組のじ字状文を同心円状に描く。この文様は僅かな間隔をおいて連続して巡っているらしい。これらの施文をやや下った位置に2条の緩く蛇行する線がやや右上がりに描かれている。380は、肩の張りの強い壺の頸部付近の片、381～383は平底をなす底部である。

甕（384～388） すべて折り曲げによるL頸部片。384は、緩く折り曲げられた頸部に布目状圧痕による斜めの刻みを持つ突帯が貼られるもの、端部は平坦な面をなす。385は、短く折り曲げられた口縁部で、端部はやや拡張されている。386は、端部に面を持たずに丸く収められている。387は、385に似た短い口縁部であるが、端部の拡張が大きく、上下方につまみ出すように拡張するものである。388のやや深い底部は、その中央に焼成後の穿孔を外底面から行われている。

鉢（389・390） 389は丈の低い甕形を呈する鉢、復元口径27.0cmを測る口縁部は折り曲げによるもので、端部を丸く収めている。内外面ともに比較的丁寧な調整を施している。390は、ボウル形をなす鉢で、胎土に石英・長石粒を多く含むが、器面の調整は入念に行われている。

高坏（391・392） 391は、浅い皿状の坏体部に外反するL縁部を持つ高坏坏部片。392は、エンタシス状の脚柱部を持つ高坏の柱部で、坏部との接合は充填によっている。柱下端に3条の平行沈線が施されている。

支脚（393） 復元裾部径5.8cmを測る小型の支脚と思われるもの。外面に特に指頭痕が顕著である。

器台（394・395） 394は、復元受部径38.0cmを測る大型の器台。受部端部は、主に上方に拡張され、刻み目を持つ棒状浮文が貼り付けられているが、単位・方向等の詳細は不詳である。柱部はエンタシス状をなし、現状で4段・5方向にわたって円孔が施されていることが確認できる。外面柱部から受部にかけては刷毛目の後磨かれ、内面は刷毛目・撫で調整が行われている。395も大型の器台と思われる破片で、おそらく裾部にあるものと思われる。裾端面には3条の凹線が施されている。

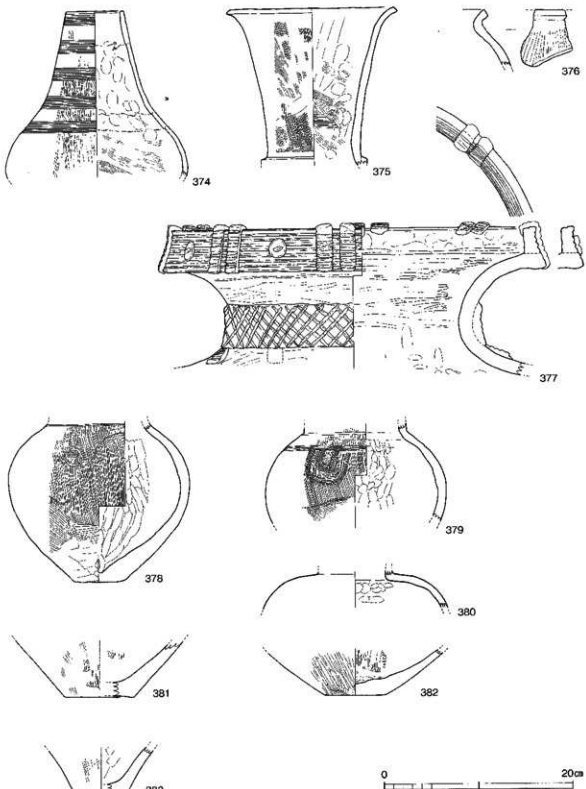


図65　SK3出土遺物（1）

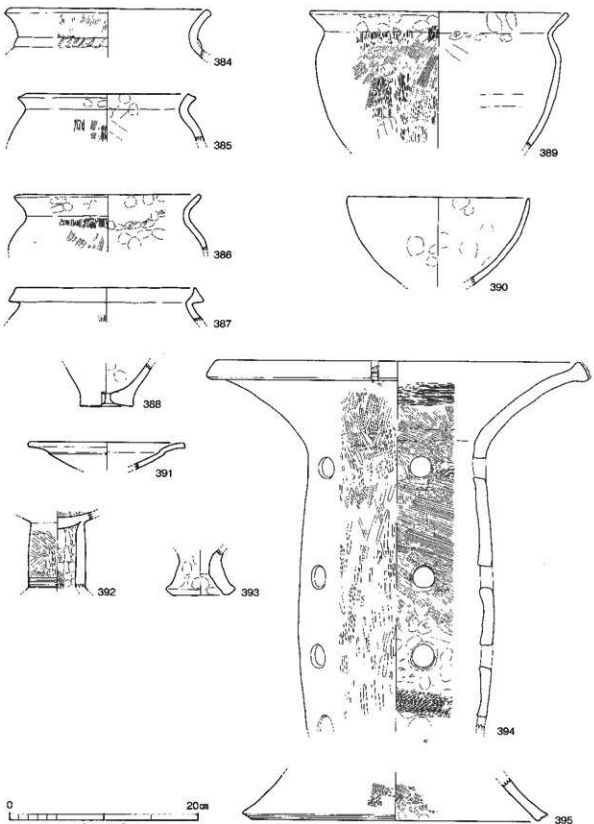


図 66　SK3 出土遺物 (2)

（3）中世の遺構と遺物

a. 掘立柱建物

SB3（図67）

直径20～30㎝の柱穴で構成される1×2間の東西棟の建物である。桁行柱間1.95m、総長3.9m、

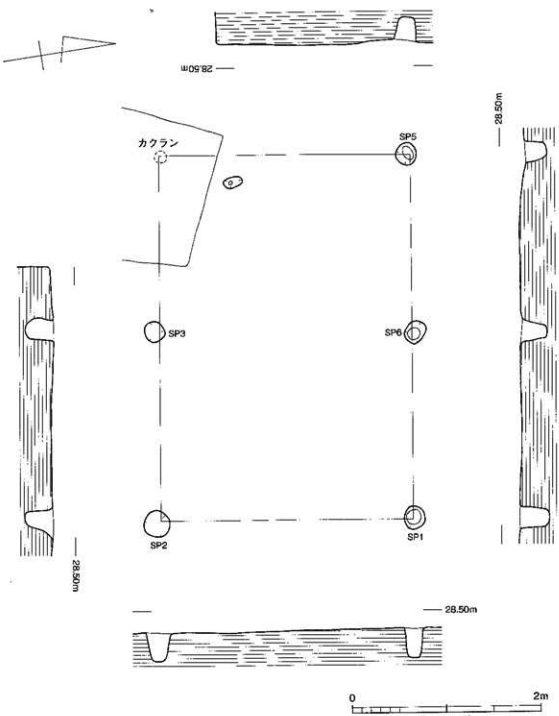


図67　掘立柱建物SB3

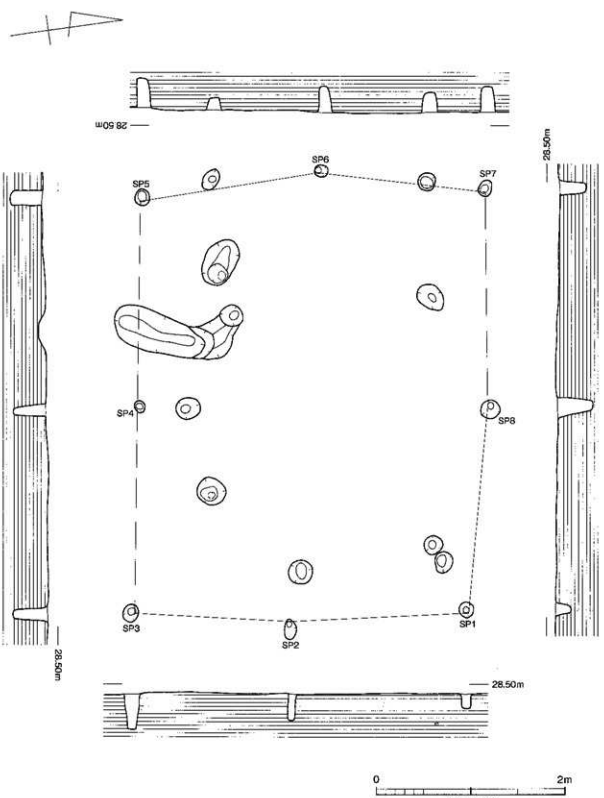


図 68　掘立柱建物 SB4

梁行柱間、総長ともに2.6m程度になるものと思われる。遺物の出土はないが、後述するように14世紀前半代の遺構と考えられる。

SB4（図68）

若干歪んだ柱穴配置になるが、2×2間の東西棟で建物は建つものと判断した。直径20cm前後の柱穴で、桁行柱間2.2m、総長4.4m、梁行柱間1.7～1.9m、総長3.6m程度の建物に復元できる。この建物の南東コーナー直近で、14世紀前半代の土師器坏の集積土坑SK2が検出されている。

b. 土坑

SK2（図69）

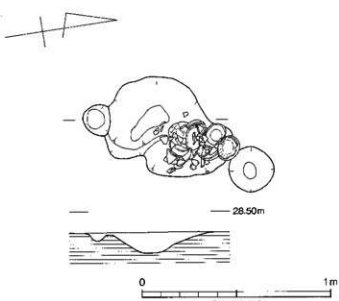


図69　土坑SK2

掘立柱建物SB4の南東コーナー直近で検出された不整形の窪みで、16点の土師器坏がまとまって集積されていた。SB4に関わる地鎮遺構であろう。14世紀前半の遺構である。

SK2出土遺物（図70・71）

土師器

坏（396～411）　いずれも回転台成形、底部回転糸切りのもの。おおよそ、器高2.9～3.6cm、口径10.9～12.0cm、底径7.0cm前後の法量と規格性が高い一群である。糸切り平底の底部からの立ち上がり部分の角をとるように横撫でされて、そのまま内湾気味に口縁部が立ち上がっている。

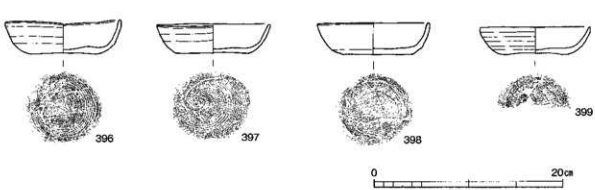


図70　SK2出土遺物（1）

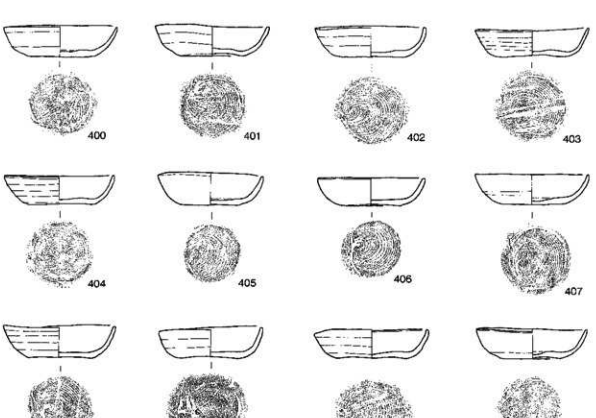


図71　SK2出土遺物（2）

（4）包含層出土の遺物

弥生土器（図72）

甕（412・413）　412は、同一個体の接合しない口頸部と頸部以下を図上復元したものである。器高23.8cm、復元口径14.0cmを測る。平底の底部に張りを上位に持つ胴部から、比較的鋭角的に口縁部が折れ曲がる。口端部はしっかりした平坦面をなす。413は、平底の底部。いずれも後期中頃のもの。

壺（414・415）　414は、頸部で緩く外反して開く短頸壺の口頸部。415は、小さな平底に張りの強い胴部下半、後期後半のもの。

鉢（416）　突出した平底から、内湾しながら開く、やや丈の高い鉢。器高10.0cm、復元口径10.6cmを測る。胎土に大きめの石英・長石粒を含み、外面には縦方向のヒビ割れが多くみられるが、器面調整自体は、内外面ともに丁寧に行われている。後期。

高坏（417）　後期後半の脚柱部片、3方向に穿孔を持つ。

器台（418）　受部の小片のため、径にはやや不安があるが、端部を下垂させて拡張した面に2条の擬凹線を施すもの。後期中頃以降のもの。

土師器

坏（419・420） 419は、器高3.2cm、口径12.1cm、底径7.0cm、底部回転糸切り離しの坏で、SK2出土の一群と同様の器型である。内面は全面煤け、外底面も二次的な被熱で赤変している。外底面には板目状圧痕がある。やはり13世紀代のものであろう。420は、419よりもひとまわり小ぶりの坏小片で、全体的に分厚い成形のものである。切り離し手法は不詳。

皿（421） 器高1.2cm、復元口径7.8cmを測る皿片。外底面に波板状の板目圧痕があるが、切り離しは不詳である。

鍋（422） 復元口径20.2cmの鍋。口端部に接して突帯が巡るものである。

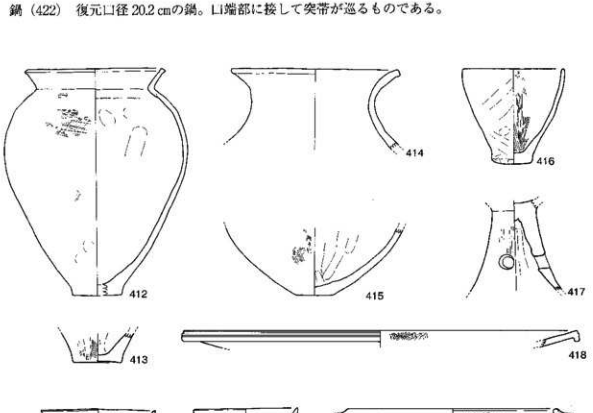


図72 包含層出土遺物

3．小 結

調査で検出された主な遺構は、弥生時代の竪穴住居、土坑と中世の掘立柱建物とこれに伴う地鎮遺構とみられるものであった。弥生時代の遺構はすべて後期後半のもので、竪穴住居は2本柱穴の隅丸長方形、比較的小型のもので、その南辺近くに炉を設けているなどの特徴があった。このような竪穴住居はこの近隣に多くみられるもので、北西500mの中村松田遺跡1・2次調査地の弥生後期集落は、

このような住居群で構成されている。このような住居と同じ時期に、井戸の可能性が高い祭祀的土坑が調査されたのも大きな成果であった。また、中世の地鎮を伴う建物も近年では類例を増しつつあり、そのありかたと年代やエリアとの相関等を詰めていくうえで良好な資料を追加できたといえよう。

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、胴上－胴部上半、胴下－胴部下半、底－底部、天－天井部

胎土・焼成欄　長－長石、石－石英、金－金雲母、（数値）－鉱物粒の大きさ（mm）、◎－焼成良好、○－焼成やや良、△－焼成不良

表37　SB1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
316	壺	口径 (18.0) 残高 10.0	外上方に開くやや短い口縁。	[L1類]ヨコナデ [口]横位ハケ→ヨコナデ[粘]ハケ(5本/cm)→ナデ	[L1類]ヨコナデ [L]横位ハケ→ヨコナデ[粘]ハケ(5本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石(1～3) ◎		23
317	壺	残高 14.6	球形の胴部。	ヘズリ	指頭痕・指ナデ	橙・灰白色 橙色	含雲母粒 ◎		
318	壺	底径 (6.0) 残高 3.3	平底。	ハケ(7本/cm)	指頭痕・指ナデ	褐灰・ にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		
319	壺	底径 (6.6) 残高 2.2	平底。	ヘズリ	ナデ	明赤褐・ 明褐灰色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
320	鉢	残高 8.6	ボウル状の体部。低く凸がる脚台部に対向する2ヶ所に円孔。	ナデ	ナデ	橙・にぶい橙・ 黒褐・明褐灰色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金・赤 ○		23
321	鉢	口径 (27.4) 残高 3.2	断面三角形状に肥厚する口縁。東播系。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		

表38　SB2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
322	壺	口径 14.0 残高 25.0	短頸壺、丸味を持ったやや長めの胴部。口縁は底線外に外上方に開く。	口]ナデ[メズ] [胴]ハケ(8本/cm)	[口]ヨコナデ[L1]胴横位ハケ→ナデ[胴]ハケ(8本/cm)→ナデ	橙・にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	石・長(1～4) 金 ○		23
323	壺	脚径 4.8 残高 21.8	球胴に近い胴部。やや小さめの脚部。	ハケ・ミガキ	[脚]横位ハケ[L]ハケ(8本/cm)横位[底]指頭痕	淡黄橙色 浅黄橙色	石(1～3) ○	黒斑	23
324	壺	口径 (16.6) 残高 8.0	複合口縁壺、外面に稜を持ち、内湾気味に伸びる口縁、頸部に縦の竹付突帯斜格子文。	ハケ(4本/cm)	ハケ(4本/cm)	橙・褐灰色 浅黄橙色	石・長(1～3) 赤 ○		
325	壺	口径 11.6 残高 8.3	複合口縁壺、内湾気味の口縁。	[口]ヨコナデ[L]メズ	指頭痕	橙・浅黄橙色 橙・浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ○		
326	壺	口径 (11.6) 残高 7.4	複合口縁壺、端面は無文。	マメツ	指頭痕	明赤褐色 黒褐色	石・長(1～3) ○		
327	壺	口径 12.8 残高 35.5	複合口縁壺、長胴。	[口]ヨコナデ[L]ハケ(5本/cm)	[口]ナデ・指頭痕[L]ハケ[胴]ハケ(5本/cm)→指ナデ	明褐灰・ にぶい黄橙色 にぶい橙・灰褐色	石・長(1～4) 金・赤 ○	黒斑	23
328	壺	口径 15.0 残高 33.2	複合口縁壺、L1縁頸部に3条の直線文と波状文、頸部に縦の竹付突帯斜格子文。	[L1]横ハケ(5本/cm)[胴]ミガキ	[口]ナデ・指頭痕[L]ナデ[胴]ハケ(8本/cm)→指頭痕	橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ○	黒斑	24
329	壺	口径 (10.4) 底径 (3.8) 器高 10.8	短頸広口壺、小型品。	ナデ	指頭痕→ナデ	灰白・褐灰色 灰白色	含雲母粒 ◎		24

330	壺	口径 (9.0) 残高 7.1	底口並、小型品。	マメツ	【口】マメツ 【胴】指頭痕	淡黄橙色 【淡黄橙色	含細砂粒 ○	黒斑	
331	壺	残高 7.6	頸部片。	【口胴】ハケ(7本/cm) 【胴】ハケ	【胴】ナデ 【胴】ハケ→指頭痕・指ナデ	にぶい橙色 にぶい橙・灰黄褐色	石・長(1) ○		
332	壺	口径 (8.4) 底径 (3.4) 器高 14.6	やや長めの口頸部、肩に頸を持つ胴気。	【口頸】ハケ 【胴下】ハケ→ナデ 【底面】ナデ	【口頸】指頭痕→ナデ 【胴】指頭痕・ハケ(7本/cm) 【底面】ナデ	灰白・褐灰色 浅黄橙・ 褐灰色	含細砂粒 ○	黒斑	24
333	壺	口径 (10.0) 底径 3.2 器高 21.5	あまり開かず外反気味に伸びる口頸部。ラグビーボール状の胴部。	マメツ(ハケ)	指頭痕・指ナデ	橙・にぶい橙・ 褐灰色 橙・褐灰色	石・長(1～4) ○	黒斑	24
334	壺	底径 4.4 残高 23.0	長胴、平底。	【胴】ハケ(7本/cm) 【底面】ナデ	指頭痕・ハケ	にぶい橙・ 褐灰色 にぶい橙・橙色	石・長(1～4) 赤 ○	黒斑	24
335	壺	底径 4.8 残高 12.4	平底。	【底】ナデ 【底面】指頭痕	指頭痕・ナデ	灰白・ にぶい橙色 にぶい橙色	石(1～3) 金 ○	黒斑	
336	壺	底径 5.9 残高 11.1	平底。	【胴】ハケ→ナデ 【底面】指頭痕	【底】ハケ(6本/cm)→ナデ 【底面】指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ○	黒斑	
337	壺	底径 3.7 残高 9.8	平底。	ナデ	【底】ハケ 【底面】指頭痕	浅黄橙色 褐灰色	石(1) ○	黒斑	
338	壺	底径 4.3 残高 9.1	平底。	【底】ハケ(7本/cm) 【底面】ナデ	【底】ハケ 【底面】指頭痕	橙・暗褐灰色 黒褐色	含細砂粒 金 ○	黒斑	
339	壺	底径 4.2 残高 7.5	平底。	【底】ハケ(4本/cm) 【底面】ハケ→ナデ	【底】ハケ 【底面】ナデ	にぶい橙・ 灰黄褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		
340	壺	底径 3.8 残高 5.8	平底。	【底】ハケ 【底面】ナデ	指頭痕→ナデ	灰白色 にぶい黄橙色	石(1) ○	黒斑	
341	壺	底径 6.0 残高 13.1	突出気味の底部。平底。	【底】ハケ 【底面】ミガキ	【胴】ハケ→ナデ 【底面】指頭痕	橙色 黒褐色	石(1～2) 金 ○	黒斑	
342	壺	底径 5.0 残高 12.0	突出気味の底部。平底。	【胴】ハケ 【底】指頭痕 【底面】ナデ	ハケ(7本/cm)→指頭痕	橙・褐灰色 黒褐色	石(1～3) ○	黒斑	
343	壺	底径 7.7 残高 6.7	平底。	ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1～3) ○	黒斑	
344	壺	底径 6.6 残高 2.8	平底。	マメツ	マメツ(指頭痕)	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石(1) ○		
345	壺	底径 5.0 残高 4.0	平底。	【胴】ハケ(10本/cm) 【底】ナデ	指ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○	黒斑	
346	壺	底径 3.6 残高 3.2	平底。	【底】ハケ(7本/cm) 【底面】ナデ	指頭痕・指ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石(1) ○	黒斑	
347	甕	口径 (14.0) 残高 7.7	頸部は内面に稜を持たして折り曲げられる。口縁端部は丸味を持つ。	【上】ナデ 【胴】ハケ(5本/cm)→ナデ	【上】ナデ 【胴】ハケ→ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 赤 ○	黒斑	
348	甕	口径 (18.8) 残高 3.3	外反する口縁。端部は面をなす。	ハケ・ナデ・指頭痕	【上端】ナデ 【口】ハケ	にぶい褐色 褐灰色	石・長(1) 金 ○		
349	甕	口径 (22.2) 残高 5.2	ゆるやかに外反する口縁。	【口】ナデ 【胴】ハケ(6本/cm)・指頭痕	【上】ナデ 【胴】ハケ(6本/cm)・指頭痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 金 ○		
350	甕	口径 16.6 残高 17.0	口径と胴部最大径がほぼ同じ。	ハケ(6本/cm)	【口・肩上】ハケ(5本/cm) 【胴下】ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(1～7) ○	煤付着	25
351	甕	口径 15.6 残高 17.3	口径と胴部最大径がほぼ同じ。	【口・肩上】指頭痕・ハケ→ナデ 【胴下】ナデ	【口】ナデ 【胴】指頭痕・ハケ→ナデ	淡黄橙色 灰白・褐灰色	長(1～3) 金 ○		
352	甕	口径 18.4 残高 27.6	胴部最大径が口径を凌ぐ。	【口】ハケ→ナデ 【肩上】ハケ(8本/cm) 【胴下】ハケ	【口・肩上】ハケ(6本/cm) 【胴下】ケズリ	にぶい橙色 橙・灰黄褐色	石・長(1～3) 金 ○	黒斑	25
353	甕	口径 (17.4) 残高 22.4	口径が胴部最大径を凌ぐ。頸部は内面に稜を持って折り曲げられている。	【口】ヨコナデ 【胴下】ハケ(6本/cm)	ハケ・ミガキ	にぶい赤褐・ 灰白色 橙色	石・長(1～3) ○	黒斑	25

354	甕	底径 3.6 残高 8.3	平底。	ハケ(5本/cm)	ナデ・指頭痕	にぶい褐・褐灰色 褐灰色	石(1~3) ◎		
355	甕	底径 4.2 残高 24.2	ラグビーボール状の胴部。平底。	[胴]ハケ(7本/cm) [底面]ナデ	ハケ	明褐灰・ にぶい橙色 灰白色	石・長(1~3) ◎	黒斑	25
356	鉢	口径 14.2 底径 4.4 器高 11.4	折り曲げ口縁。若干の窪み底。	[口・胴]ハケ(6本/cm) [底]指頭痕 [底面]ハケ・ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~4) 金 ◎	黒斑	
357	鉢	口径 16.3 底径 2.8 器高 10~11.0	緩く折り曲げられた口縁。外上方に開く胴部。平底。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(8本/cm)→ナデ	ハケ→ナデ・指頭痕	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎	黒斑	26
358	鉢	口径 (12.6) 底径 3.0 器高 11.9	大きく外反して折り曲げられるやや長めの口縁。平底。	[口・胴上]指ナデ [胴下]ハケ→ナデ [底]指頭痕	[口]指頭痕 [胴・底]指頭痕→指ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ◎		26
359	鉢	口径 (18.2) 残高 9.7	外反する口縁。丈の低い甕形。	[口]指頭痕・ナデ [胴]ハケ→ナデ・指頭痕	[口]ナデ [胴]指頭痕・ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ◎	黒斑	
360	鉢	口径 (14.6) 残高 6.0	外面頸部の折り曲げ部位直下に明瞭な稜を持つ。	[口]ナデ [胴]ハケ(4本/cm)	[口]ナデ・指頭痕 [胴]ハケ→ナデ	橙・ にぶい橙色 橙色	石(1~2) ◎		
361	鉢	口径 14.3 底径 3.9 器高 8.1	ボウル状の器型。突出した平底。	[口]指頭痕・ナデ [胴下]ハケ→ナデ [底]指頭痕・ナデ	[口]指ナデ [胴・底]ハケ→ナデ・指頭痕	浅黄橙・ 灰黄褐色 灰白色	石・長(1) ◎	黒斑	26
362	鉢	底径 (0.8) 残高 5.3	手づくねによる甕形のミニチュア。	指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	褐灰色 褐灰色	長(1) 金 ◎	黒斑	26
363	鉢	底径 8.4 残高 4.1	台付鉢の底部。	指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎	黒斑・煤?	
364	高坏	口径 (24.2) 残高 7.7	坏底部と口縁部の境に段を持つ。	[口]ヨコナデ [坏]ハケ→ナデ(ミガキ?)	ミガキ(ナデか?)	にぶい橙色 浅黄橙・ 褐灰色	石・長(1~4) 金 ◎		
365	高坏	口径 30.0 底径 14.6 器高 15.6	大きく外反する口縁。坏底部と口縁部の境に段を持つ。脚部に1.5cmの円孔3方向。	[口]ナデ [坏]指頭痕→指ナデ [脚・底]ナデ	[口]ナデ [坏]ハケ(6本/cm) [脚]ナデ	浅黄橙・ 褐灰色 灰白・褐白色	含細砂粒 ◎	黒斑	26
366	高坏	残高 8.4	柱部。中空。	マメツ	シボリ痕・指ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ◎		
367	高坏	残高 11.4	柱部。中空。円孔。	ハケ	[脚上]シボリ痕 [脚下]ナデ	橙・にぶい 黄橙色 橙・淡赤橙色	石・長(1~2) ◎		
368	高坏	底径 (12.0) 残高 4.3	脚底部。	ハケ(5本/cm)→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~3) 赤 ◎		

表39 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
369	甕	口径 (17.6) 残高 10.4	折り曲げ口縁。端部は丸く収める。	ハケ	[口]ナデ [胴]指頭痕・指ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~4) ◎		
370	甕	口径 (20.6) 残高 10.5	折り曲げ口縁。端部はやや丸味を帯びた面をなす。	[口縁]マメツ [胴]ハケ(10本/cm)→ナデ	[口]ナデ [胴]指頭痕・指ナデ	明褐灰色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		
371	甕	残高 10.2	折り曲げ口縁。端部は面をなす。	[口縁]ヨコナデ [口]ハケ(10本/cm)→ナデ	[口]ナデ [胴]指頭痕・ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1~2) 金・赤 ◎		
372	甕	底径 4.2 残高 9.5	平底。	[底]指頭痕・ハケ→ナデ [底面]ナデ	指頭痕・指ナデ	にぶい橙・ 橙色 橙・明褐灰色	石・長(1~5) 赤 ○	黒斑	
373	甕	底径 (5.4) 残高 4.5	平底。	[底]ハケ→ナデ [底面]ナデ	ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石(1~3) ◎		

表40 SK3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
374	壺	口径 (6.0) 残高 17.5	長頸壺。頸胴部境から口縁部直下にかけて1単位11条の平行直線文5段。胴部から口頸にかけてすぼまる形態。	ヘラミガキ	[口]ヨコナデ [胴上]指頭痕・ナデ [胴下]ハケ	橙・にぶい 黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金・赤 ◎	黒斑	26
375	壺	口径 17.0 残高 16.5	長頸壺。ラッパ状に開く口縁。筒状の頸部。	[口]ヨコナデ [頸]ハケ(10本/cm)・指頭痕 [基部]ヨコナデ	[口]ヨコナデ [頸]ハケ・指ナデ・指頭痕	にぶい橙色 橙色	石(1~2) 金 ◎		

376	壺	残高 6.0	知頸壺。短く折り曲げられた口縁。張りのある胴部。	[上]ヨコナデ [胴]ハケ(5本/cm)	[口]ナデ [胴]ハケ	浅黄橙色 灰白・褐灰色	含細砂粒 ○			
377	壺	口径 (38.8) 残高 16.1	複合口縁壺。大型品。	[上]ヨコナデ [胴]ミガキ	[口頸]指頭痕→ヨコナデ [肩上]ミガキ [胴下]指頭痕・ナデ	にぶい橙色 褐灰・にぶい橙色	石・長(1~4) 金・赤 ○			26
378	壺	底径 5.3 残高 16.7	胴部に記号もしくは絵画、平底。	[胴]ハケ(5~6本/cm) [底]指ナデ [底面]ナデ	ナデ	明黄褐色 明褐色	石・長(1~3) ○	黒斑		27
379	壺	残高 10.3	胴部に記号もしくは絵画。	ハケ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ○			27
380	壺	残高 3.9	強く張る肩部。	マメツ	指頭痕・ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長(1) ○	黒斑		
381	壺	底径 (7.2) 残高 5.9	平底。	[底]ケケ→ナデ [胴]ハケ	ハケ→ナデ	浅黄橙・にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○			
382	壺	底径 (6.6) 残高 4.9	平底。	[底]ハケ→ミガキ [胴]ハケ	[底]ハケ→ナデ [胴]指頭痕	橙色 橙色	石・長(1~3) ○	黒斑		
383	壺	底径 (5.4) 残高 5.0	平底。	[胴]ケケ→ナデ [底]ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 黒褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑		
384	甕	口径 (20.8) 残高 5.2	折り曲げ口縁。頸部に刻みを持った貼付け突帯。	ハケ→ナデ	マメツ	淡橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ○			
385	甕	口径 (17.0) 残高 5.0	短く折り曲げられた口縁。端部はやや拡張される。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ(10本/cm)	工具によるナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(1) 金 ○			27
386	甕	口径 (19.0) 残高 5.8	折り曲げ口縁。丸くおさめられた端部。	[口]指頭痕→ヨコナデ [胴]ハケ→ナデ	ハケ→指頭痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 金 ○			27
387	甕	口径 (18.8) 残高 3.6	口縁端部よ上下方につまみ出すように拡張する。	[口]マメツ [胴]ハケ	マメツ	橙・灰黄褐色 橙色	含細砂粒 ○	黒斑？		
388	甕	底径 6.7 残高 4.5	やや窪む底部中央に外底面からの焼成後穿孔。	[底]ナデ [底面]ハケ	ナデ	灰黄褐・褐色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1~2) 金 ○			27
389	鉢	口径 (27.0) 残高 14.4	丸の低い平底形。折り曲げ口縁。	[口]指頭痕・ナデ [胴]指頭痕・ハケ(8本/cm)	ハケ→ナデ・指頭痕	橙色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1) 金 ○			27
390	鉢	口径 (19.0) 残高 9.2	ボウル状の形態。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) 金 ○			
391	高坏	口径 (16.2) 残高 2.9	外反する口縁。浅い皿状の坏体部。	ナデ	ミガキ(ナデか)	灰白色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑		
392	高坏	残高 8.4	エンタシス状の脚柱部。	ミガキ	[柱]ミガキ [脚]指頭痕・指ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○			27
393	支脚	底径 5.8 残高 4.8	小型品。	[底]指頭痕 [脚裾]未調整	脚上ナデ [脚下]指頭痕	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑		
394	器台	受部径 (38.0) 残高 39.2	大型品。エンタシス状の柱部に明瞭な稜の明けた受部端部に刻みを持った裾状平文。	ハケ(8本/cm)→ミガキ	指頭痕・ハケ・ナデ	橙・灰白色 にぶい橙・灰白色	石・長(1~3) ○			27
395	器台	脚径 (30.0) 残高 4.6	大型品。裾端面に3条の回線。	[脚裾]ヨコナデ [脚]ハケ(6本/cm)	[脚裾]ヨコナデ [脚]ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○	黒斑		

表41　SK2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
396	坏	口径 12.0 底径 7.5 器高 3.6	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 灰白色	含細砂粒 ○	内外に煤付着	28
397	坏	口径 12.0 底径 7.0 器高 3.1	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○		28
398	坏	口径 11.8 底径 7.2 器高 3.3	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙・橙色 浅黄橙色	石・長(1) ○	内外に煤付着	28

399	坏	口径 11.6 底径 6.8 器高 2.9	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○	28
400	坏	口径 12.0 底径 6.3 器高 3.3	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○	28
401	坏	口径 11.9 底径 6.8 器高 3.2	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○	28
402	坏	口径 11.5 底径 6.8 器高 3.3	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○	28
403	坏	口径 12.0 底径 7.2 器高 3.0	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○	28
404	坏	口径 11.5 底径 6.7 器高 3.1	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙・橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	内外に煤付着 28
405	坏	口径 10.9 底径 6.1 器高 3.4	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	28
406	坏	口径 11.3 底径 6.3 器高 2.9	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	28
407	坏	口径 11.8 底径 7.0 器高 3.2	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	内外に煤付着 28
408	坏	口径 11.7 底径 6.8 器高 3.4	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○	28
409	坏	口径 10.8 底径 6.4 器高 3.3	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	内外に煤付着 28
410	坏	口径 11.8 底径 7.6 器高 3.1	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) 赤 ○	内外に煤付着 28
411	坏	口径 11.5 底径 6.4 器高 3.2	回転糸切り。	[口]回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○	内外に煤付着 28

表42　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・文様	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
412	甕	口径 (14.0) 底径 (5.2) 器高 23.8	口縁部は面をなす。上位に張りを持つ胴部。	[口]ヨコナデ [胴]ハケ→ナデ [底]ナデ	[口]ヨコナデ [胴]指頭痕・ナデ [底]ナデ	橙・にぶい赤褐色 にぶい橙色	石・長(1~2) 赤 ○	黒斑	
413	甕	底径 5.0 残高 3.1	平底。	[底]ハケ [胴]ナデ	ナデ	橙・にぶい橙色 褐灰色	石・長(1~2) ○	黒斑	
414	壺	口径 17.5 残高 8.4	短頸壺。緩く外反して開く口縁。	マメツ	マメツ	橙色 黄橙色	石・長(1~5) 赤 ○		28
415	壺	底径 3.8 残高 7.1	平底。	[底]ハケ→ナデ [胴]ナデ	指ナデ	橙色 にぶい黄橙・褐灰色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
416	鉢	口径 10.6 底径 4.2 器高 10.0	内湾しながら開く口縁。突出した底部。	[口]ヨコナデ [胴・底]胴部横・指ナデ	ハケ→ナデ	橙・にぶい橙色 橙・にぶい橙色	石(1~3) ○		28
417	高坏	残高 9.5	脚柱部。円孔3方向。	ハケ→ナデ	指ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石(1~3) ○	黒斑	
418	器台	受部径 (41.4) 残高 1.7	脚部を下垂させて接続した面に2条の擬凹線。	[口縁]ヨコナデ ヨコナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○		
419	坏	口径 12.1 底径 7.0 器高 3.2	回転糸切り。	[口・胴]回転ナデ [底]回転糸切り→ナデ後灯芯痕	ナデ	明赤褐・にぶい橙色 灰褐色	石・長(1~2) 赤 ○	内外に煤付着	28
420	坏	口径 (10.8) 底径 (7.0) 器高 3.2	やや厚めの器壁。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) 赤 ○		
421	皿	口径 (7.8) 底径 (6.0) 器高 1.2	平底。	口・胴]ナデ [底]回転ヘラ切	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
422	鍋	口径 (20.2) 残高 4.5	脚部。	脚部横→ナデ	脚部縦→ナデ	にぶい橙色 橙色	長(1~3) ○	煤付着	

第4章

中村長正寺遺跡

第4章　中村長正寺遺跡

1．調査の経過と組織

1985（昭和60）年2月8日、兼久治彦氏より松山市中村一丁目における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財確認申請が、松山市教育委員会（以下、市教委）文化教育課に提出された。予定地は、松山市の指定する文化財包蔵地、「108　中村町遺跡」のエリアに含まれる。申請を受けた文化教育課は、同年2月12日、当該地内において試掘調査を実施した。その結果、主に弥生時代の遺物を含む包含層や、柱穴等の遺構の存在が確認されたため、この場所については工事に先立つ発掘調査が必要と判断された。遺跡の取り扱いについて兼久氏と市教委との間の協議の結果、兼久氏の協力のもと発掘調査を実施することとなった。調査は、同年2月22日より開始、およそ1ヶ月の調査期間を経た3月23日全日程を終了した。

図73　調査地位置図（S=1：2,000）

調査組織

松山市教育委員会　教育長　西原多喜男
文化教育課　課長　秀野　静章
課長補佐　坪内　晃幸
第二係長　大西　輝昭
主任　西尾　幸則
調査員　池田　学
松村　淳

調査地　愛媛県松山市中村一丁目67、68－1、68－2、68－3、68－4
調査期間　1985（昭和60）年2月22日～1985（昭和60）年3月23日
調査面積　1,961.76㎡

2．調査の成果

（1）調査地の区割りと層序（図74～76）

グリッド割は図74に示したように、調査地の形状にあわせて3m四方のグリッドを設定し、それぞれのグリッドに図示したような呼称を与えて調査を行った。検出された主な遺構には、弥生時代の竪穴住居1棟、土坑4基、溝1条、性格不明遺構2基、古代の掘立柱建物1棟、土坑2基、その他に、時期不明の倒木痕3ヶ所がある。120基あまりの大小の柱穴は、その埋土からおおむね弥生時代のものと思われる。調査地は旧水田をある程度削って造成し、駐車場として利用しており、第1・2層がその造成にかかわる砕石や造成土、その下位に第3層として水田耕土、基本的にはその下位に包含層

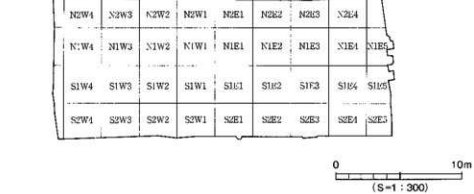


図74　調査地の区割り

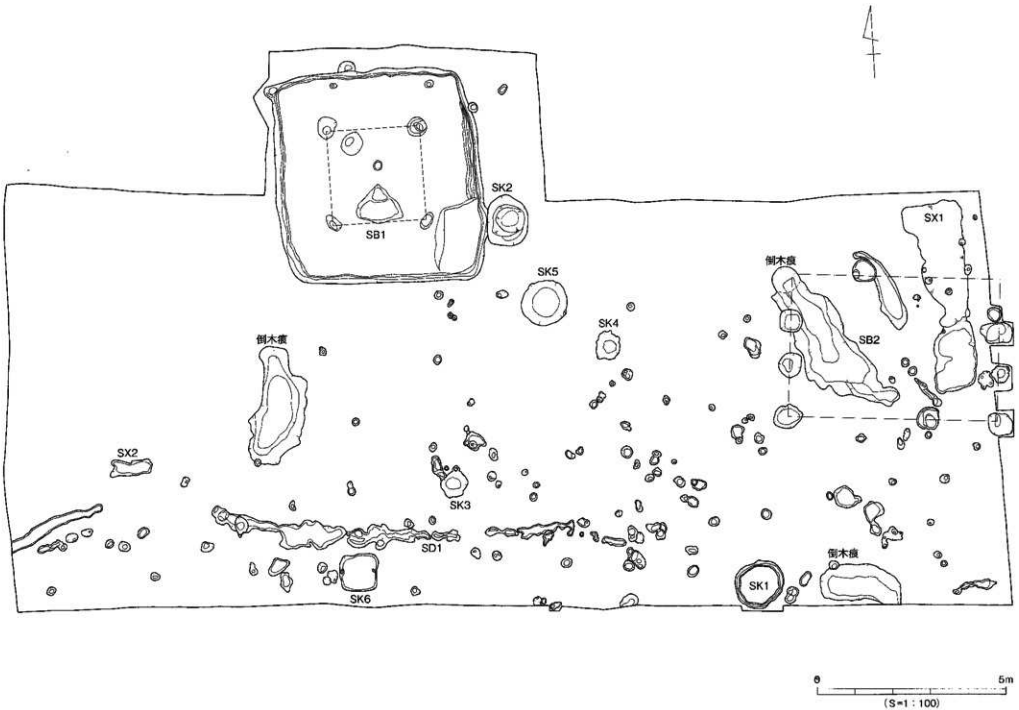

SB1
SK2
SK5
SK4
SX1
倒木痕
SB2
倒木痕
SX2
SK3
SD1
SK6
SK1
倒木痕
0
5m
(S=1:100)

図75　遺構配置図

である第4層暗褐色シルトが20～30cm存在し、その下面の地山、第5層橙褐色シルト面で遺構が検出される。遺構の埋土は、この第4層に似た褐色系のシルトである。また、調査地には倒木痕がいくつか存在し、この地山が倒木とともに持ち上がっている部分がある。

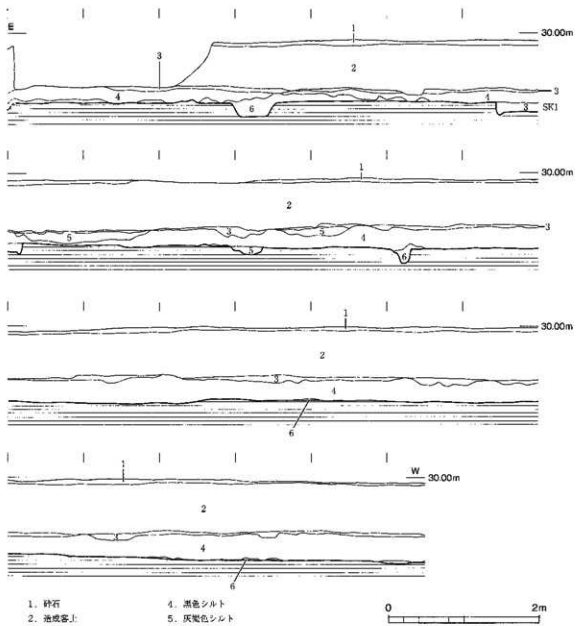


図76　調査区南壁土層図

（2）弥生時代の遺構と遺物

a. 竪穴住居

SB1（図77）

差し渡し5.5×5.5mの方形に近いプランで、若干各辺が膨らむ形状である。壁体の立ち上がり20cm程度の遺存で、貼り床は持たず、深さ5cm程の周壁溝が立ち上がり直近に巡っている。南東コーナー床面に貼り付けによる部分的なベッドを持ち、このベッドからも東辺に沿って図示したような溝が伴う。主柱穴は2.5m等間の4本、深さは30～50cmを測る。南側2本の柱穴間に、底辺1.2m、高さ1mのおむすび状平面プランの炭化物を伴う浅い掘り込みがある。この掘り込みの北側となる頂点側はやや深く、その深さ7cm程度、南側が浅く3cm程の深さのテラス状となっており、炉の本体と掻き出し部分と考えられる。出土遺物には混入と思われるものもありやや ばらつきがあるが、総体的にみると弥生後期後葉の遺構と考えられる。

SB1出土遺物（図78～81）

弥生土器

壺（423～442） 423・424は長頸壺口縁部片、425は頸部で強く外反し、外上方に開く口頸部。胎土に比較的粒の大きい長石粒を多く含んでいる。426～434は、複合口縁壺の口縁部あるいは頸部である。426～428は口縁部立ち上がりの部分で、426・427には粗い櫛歯状工具による施文がある。前者は4本単位の鋸歯文、後者には6本単位の斜格子文が描かれている。428の施文具は半裁竹管で、口端近くの部位に波状文、その下位に2段の刺突が方向を違えてS字状に施されている。429・430は口縁部無文のもの。このうち429は頸部下端に突帯を貼り付けられている。突帯は斜め方向に深く刻まれている。頸部外面には縦方向の粗い刷毛目調整がおこなわれている。431は口端部を欠くものである。口縁部外面の施文はほとんど摩滅しているが、部分的に櫛描の波状文が観察できる。頸部付近の片432にも429と同様の突帯が貼られている。頸部433・434の突帯は、ヘラ描の斜格子文を施されるものである。胴部435は下膨れの器型で、外面は入念なヘラ磨き、内面は非常に細かい刷毛目で調整されている。

甕（443～465） 口頸部443は、口端面に凹線上の窪みが巡るもの。444は、端部をやや拡張して端面に擬凹線を2条施すものである。445～447は、くの字状に屈曲する単純な口縁部で、端部を平坦な面に仕上げているものである。大型品448の頸部には断面三角形の無刻み甘突帯が貼り付けられている。449は、器高38.2cm、口径19.8cmを測るもので、445～447のような単純な口頸部に、胴部のやや上位に大きめの張りを持つ器型、底部は平底となっている。外面の底部からの立ち上がりを削るほかは、口縁部にいたるまで刷毛目調整がなされる。内面も胴張り部以上、口縁部まで刷毛目、以下を撫でられている。底部には若干の窪み底になるもの450～455とこれら以外の平底がある。窪み底のうち455のようなものは鉢であるかもしれない。

鉢（466～473） 小型鉢の口縁部～胴上半部には全体的に内湾する466・468や、やや外反する口縁を持つ甕形の467、筒形の469がある。470は、安定の悪い小さな平底から外上方に胴部が広がるもの。外面には板押さえのような圧痕、内面は横方向の刷毛目で調整されている。471は輪高台状の上げ底、472は、指でひねり出したような窪み底である。473は、台付鉢の台の部分と思われる。上端部にヘラ描による平行沈線が7条まで確認できる。外面はよく磨かれている。

高坏（474～486） 474は坏部の片、復元口径29.8cmを測る。坏底部との間の稜を介して口縁部が大きく開く。内外面ともに刷毛目の後縦方向に磨かれている。475も同様の形態のものであるが、や

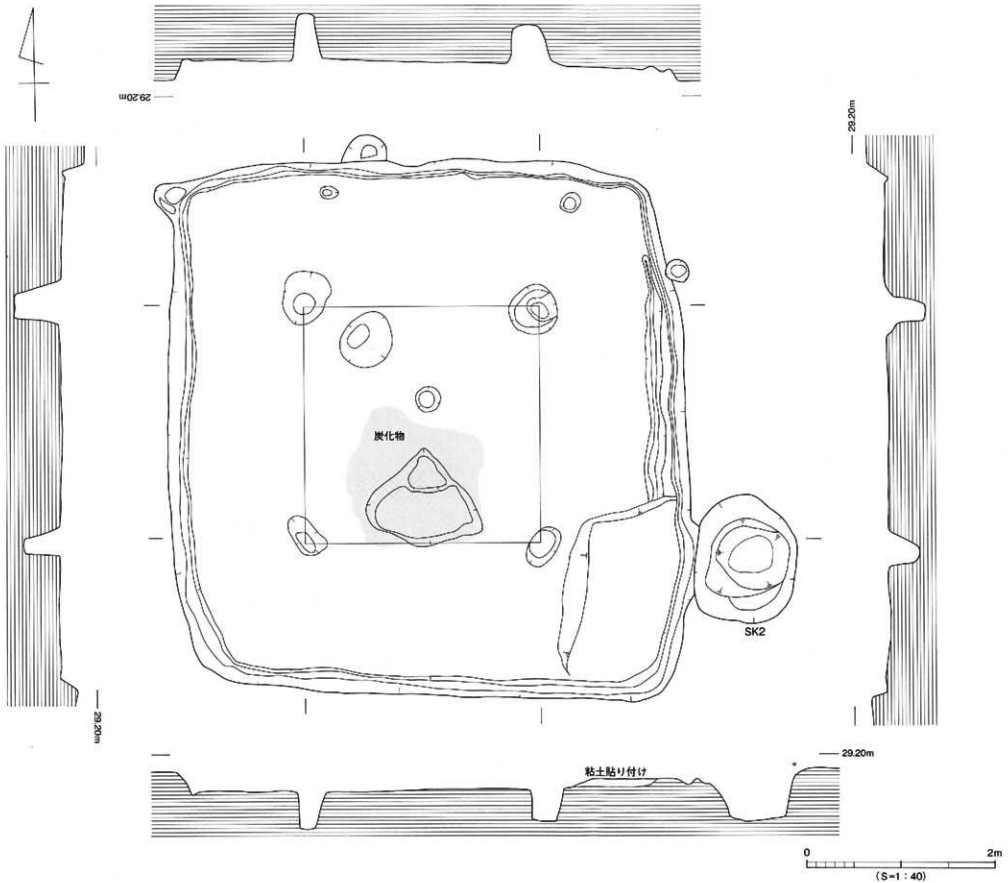


図 77　竪穴住居 SB1

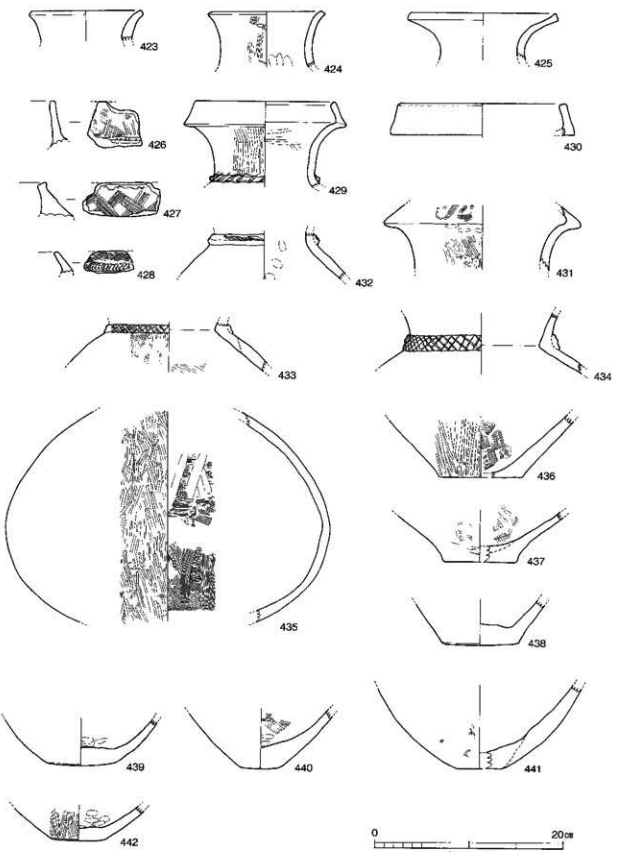


図78 SB1出土遺物 (1)

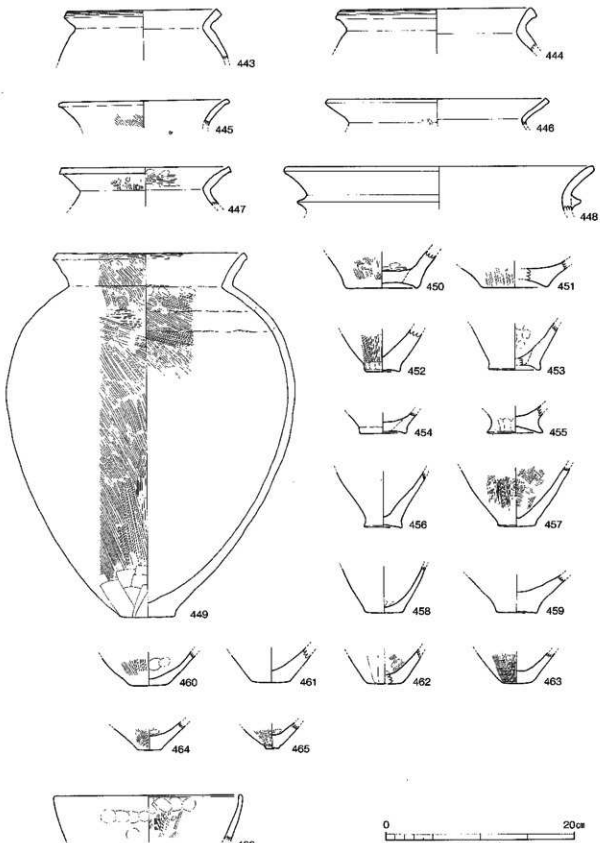


図79　SB1 出土遺物 (2)

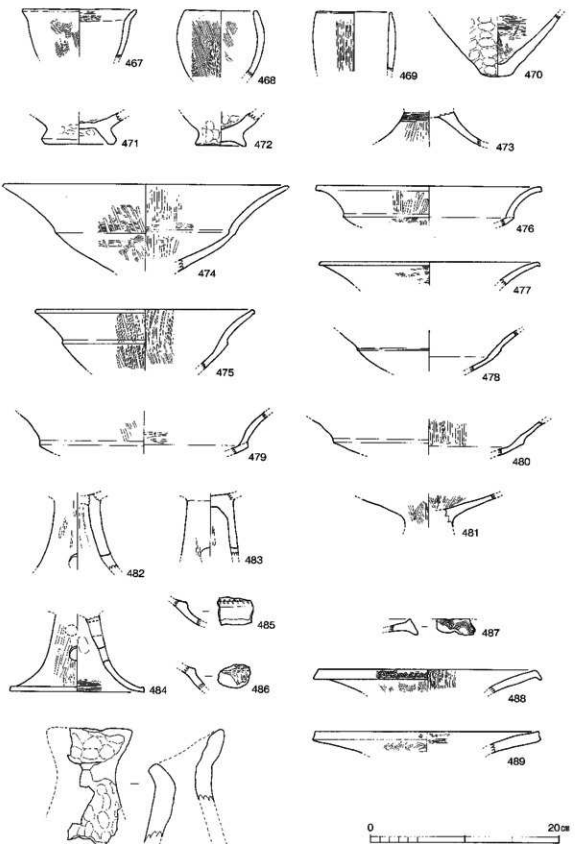


図 80　SB1 出土遺物 (3)

や口縁部が短い。476は、短い口縁部が強く外反しながら開くものである。その他の坏部あるいは口縁部片のうちには、474・475の形態に近いもの477、478、480や、476に近い479といったものがある。481は、480と同一個体かと思われる坏底部の破片である。これらの坏部と組み合う脚部は482～484といったもので、柱部の対向する2ヶ所に円孔を持つ。485・486は、エンタシス状の柱部を持つものの脚部と思われる破片。485では屈曲部外面の稜とその直上の部分の2段にわたって半裁竹管による刺突を加えている。また486でも稜の上下位に刺突を施すが、この刺突は2㎜程度間隔のあいた2本単位の刺突具によっている。

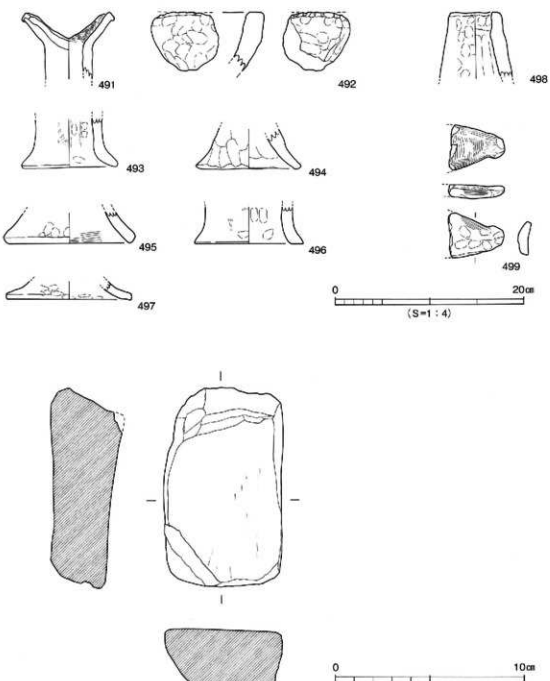


図81　SB1出土遺物（4）

器台（487～489） 3点ともに受部の片である。487・488は下垂して拡張した端面に櫛描波状文が描かれている。489は端部の拡張はなく、横撫でによる浅い窪みが巡っている。

支脚（490～497） 490は中空筒状で、上下に開き、受部の前面を斜めに削ぎとるようにU字状に刳り込む形態のものである。492の受部片も同様の形態のものと思われる。491は、開いた筒の上端を斜めに削ぐのではなく、前面、後面ともに均一にU字状に切り取った形態のものである。493～497は裾部の破片である。

不明土製品（498・499） 498は、縦半裁の破片であるが、端部にむけて細くなる筒状を呈し、端部近くの内面を段をもって薄く仕上げるもので、胎土や成形は支脚に似る。特異な形態の支脚であるかもしれない。499は内面が皿状に窪む不整形の破片。外向には指頭痕、内面は刷毛目調整されている。

石製品

砥石（500） 陶石を素材とした砥石。3面を使用されているが、特に図示した面が最もよく使われている。

b. 土 坑

SK1（図82）

調査区南端の東寄りで検出された1.2×1.35mの円形に近いプランをなす土坑で、最深部での深さ10cmの遺存である。坑底は若干の凹面をなし、周縁には幅10cm、深さ5cmの溝が巡っている。板材の枠のような構造物が存在していたものであろうか。後期後葉の遺構である。

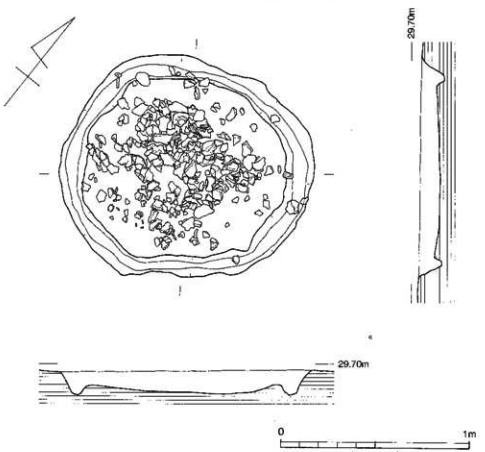


図82 土坑 SK1

SK1 出土遺物（図 83）

弥生土器

甕（501 ～ 507） 口頸部片 501 ～ 504 は、いずれも折り曲げによるもの。端部を丸く収める 501、502、504 と、面をなす 503 とがある。505・506 は、底部～胴部下半で、底部形態はいずれも小さな平底である。505 は、内外面ともに刷毛目調整、506 の外面底部寄りには叩き目が残るが、これより上位の部位は刷毛目調整されている。内面の調整は撫でである。507 は、やや突出した平底の底部で、外面に叩き目、内面に刷毛目がある。

鉢（508） 僅かな窪み底の底部である。

鉢（509） ボウル形の器型をなす鉢の口縁部片。

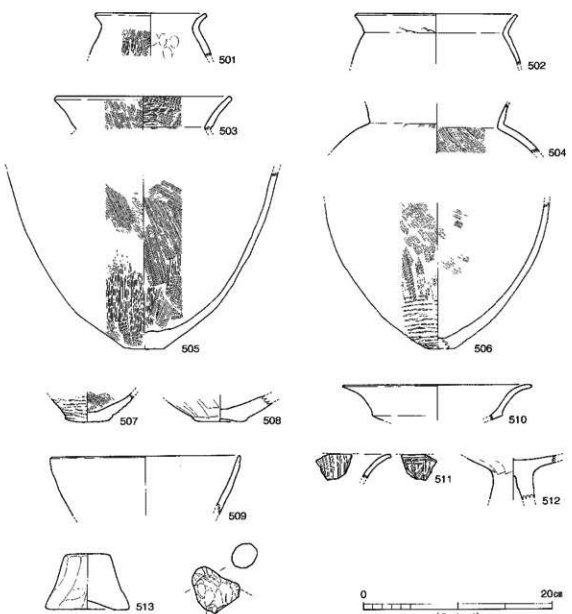


図 83　SK1 出土遺物

高坏（510～512） 510は、稜を介して口縁部が強く外反するもので、511も同様の器型になるものと思われる。512は坏底部と脚接合部の片。

支脚（513・514） 513は、器高5.9cm、中実の截頭円錐形をなす。底面はやや窪んでいる。514は角状突起を持つ支脚の突起の破片である。

SK2（図84）

SB1南東に接するようにして検出された1.35×1.10mの不整円形の土坑で、SB1を切る。深さ0.6m、断面形は擂鉢形を呈する。後期後葉の遺構である。

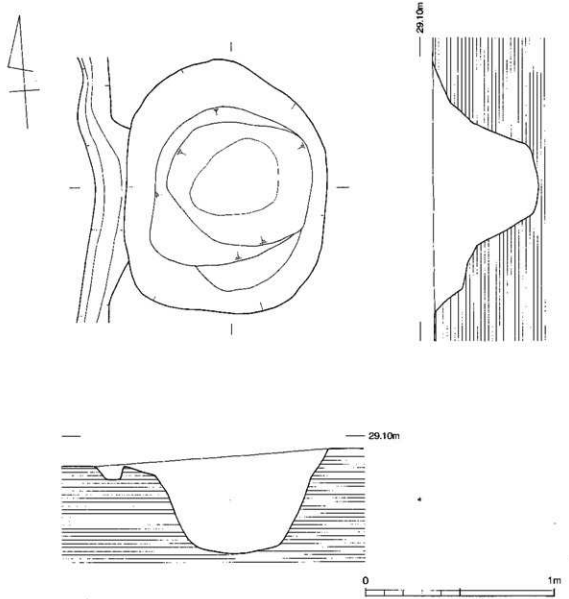


図84 土坑SK2

SK2 出土遺物（図 85）

弥生土器

壺（515～520） 515 は、復元口径 26.2 cmを測る複合口縁大型壺の口頸部で、口縁部に波状文が施されている。頸部にはヘラによる斜格子文を持った、薄く幅広の突帯が貼り付けられている。口端部はやや強めに外反している。516 も同様の無文の口縁部である。517 は端部を欠くが、やはり複合口縁壺の口縁部で、外面に櫛描波状文が 2 段にわたって施されているのが確認できる。518 は、緩く外

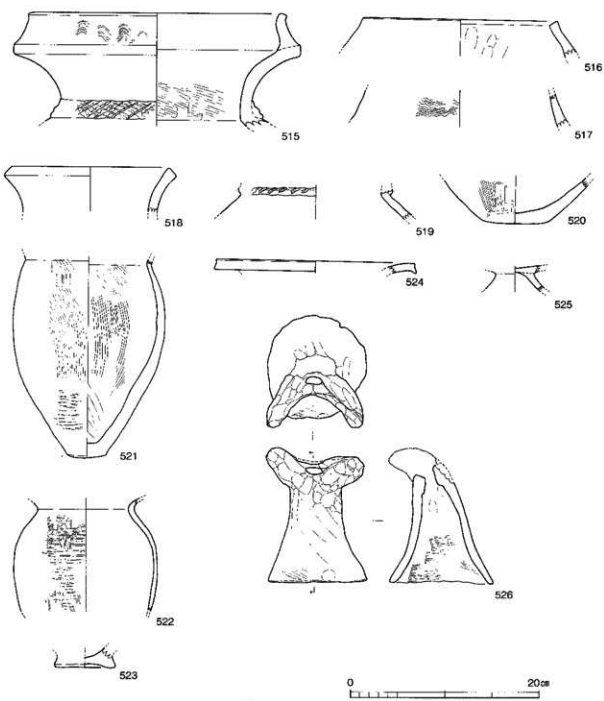


図 85　SK2 出土遺物

反しながら外上方に開く口縁部で、端部に平坦な面を持つ。519は、頸部突帯の部分、断面方形の突帯はヘラにより斜めに深く刻まれている。520は平底の底部。立ち上がり外面は刷毛目調整されている。

甕（521～523） 口縁部を欠く個体521は、若干丸みを帯びた安定の悪い平底で、外面の調整は全面叩いた後刷毛目で撫で消しているが、底部寄りには叩き目が明瞭に残っている。522は、口縁部折り曲げの甕で、口端部を欠く上半部である。胴部外面は叩き目の後、軽く刷毛目調整されているが、叩き目は全面に残っている。523は、若干の窪み底になる底部、鉢のものかもしれない。

器台（524） 受部の小破片。端部を下方にやや拡張している。非常に丁寧なつくりである。

鉢（525） 台付鉢と思われる、大きくひろがる低い台の破片。

支脚（526） 器高14.3cm、裾径10.4cmを測る中空の支脚で、受部に2本の角状突起を持つもので、背面の摘みは欠損している。受部中央の突起間に円孔を持つ。内面の嵌部付近に横方向の刷毛目調整が行われている。

SK3（図86）

調査地中央南寄りで検出された0.7×0.65mの不整形土坑、深さ0.5mを測る。

SK3出土遺物（図86）

弥生土器

壺（527） 複合口縁壺の口縁部小片。外面は無文、胎土に中粒の長石粒を多く含む。

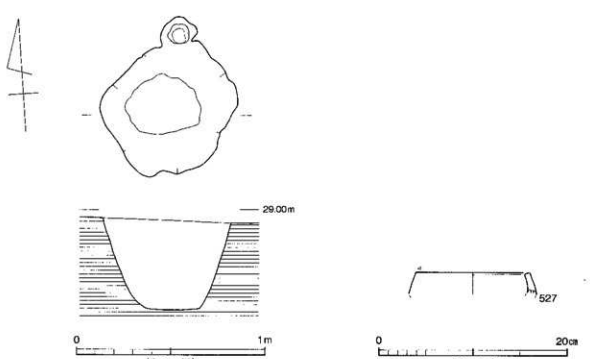


図86 土坑SK3・SK3出土遺物

SK4（図87）

調査区のほぼ中央で検出された0.7×0.6mの不整形土坑、深さ0.4mを測る。拳大からそれよりもやや大きめの河原石数個とともに弥生土器片が出土した。後期後葉の遺構である。

SK4出土遺物（図87）

弥生土器

甕（528） 折り曲げによる口縁小片で、端部は面をなす。外面に刷毛目がみられる。

鉢（529） 僅かに外方に折り曲げられた口縁を持つ小型の鉢。

壺（530・531） 底部2点、530はやや凸面をなす平底で、外面に叩き目がある。内面は、刷毛目の後撫でられている。531は、僅かに窪む平底、胎土に中～大粒の長石粒を多く含んでいる。

高坏（532） 脚部上位片。直径0.8cm程度の円孔が4方向2段に施される。坏底部との接合剥離面

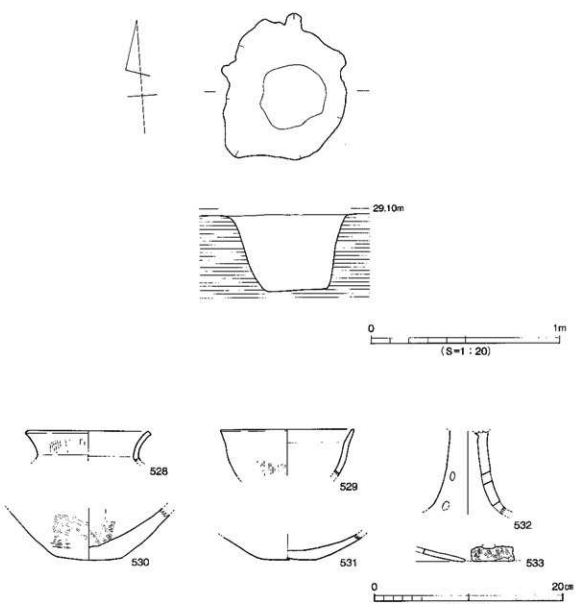


図87 土坑SK4・SK4出土遺物

には放射状に溝が設けられている。

台付鉢（533） スカート状に大きくひろがる台を持つ椀状の鉢の台裾部分と考えられる。裾端からやや上位の位置に直径1.2cmの円孔を持つ。

c. 溝

SD1（図75）

調査区南西部から東に15m程度にわたって、途切れ気味に続く浅い溝。およそその中ほどで弥生土器片がややまとまって出土している。後期後半のもの。

SD1出土遺物（図88）

弥生土器

器台(534) 受部の片。端部を欠くが、現況で直径28cmあるので、これを越える径になるものである。

甕（535） 平底の底部片。外面を縦刷毛目調整されている。

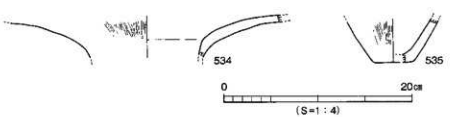


図88 SD1出土遺物

d. 不明遺構

SX2（図89）

調査地南西寄りで検出された、深さ5cm程度の長方形に近い溝状の窪みで、溝SD1とは異なる遺構と判断している。後期の遺構である。

SX2出土遺物（図90）

弥生土器

鉢（536） 緩く外反する口縁部を持つ、器高の低い楕形を呈する鉢。胴部外面は粗い刷毛目、内面

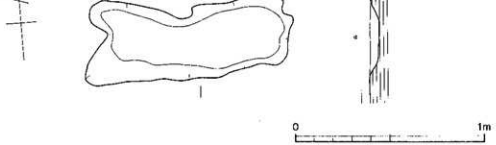


図89 性格不明遺構SX2

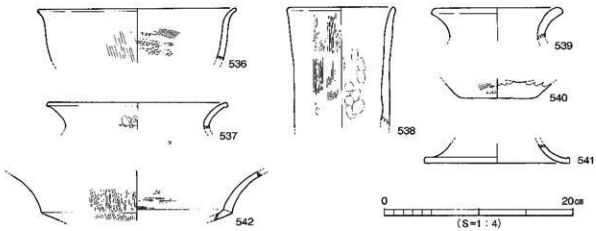


図90　SX2出土遺物

はこれより細かい横刷毛目で調整されている。

甕（537）　折り曲げによる口縁部で、強く外反し、端部に面を持つ。

壺（538～540）　538は、復元口径11.0cmを測る長頸壺の口頸部片。外面を縦刷毛目調整されている。539は短く開く口縁部片である。540は平底の底部で、平底からの立ち上がりは鋭い稜を持たず鈍い。

高坏（541・542）　541は、脚裾部と思われる片。542は、口端部を欠く坏部の片である。

（3）古代の遺構と遺物

a. 掘立柱建物

SB2（図92）

部分的に欠けている柱穴があるが、削平やSX1との切り合い等の要因によるものと考えられる。柱痕跡が確認できていないため定かではないが、桁行1.85m等間の3間、総長5.55m、梁行1.25mの等間3間、総長3.75m規模と考えられる南北棟の建物である。SP1、SP6の2基の柱穴から図化可能な弥生土器片を、また図化には至らなかったが、SP5から須恵器坏口縁部小片を出土している。

SB2出土遺物（図91）

弥生土器

高坏（543）　脚柱部の破片、4方向に復元できる円孔が2段にわたって確認できる。

甕（544）　口縁部の小破片、端部の内外面に指頭圧痕があるのが特徴的である。

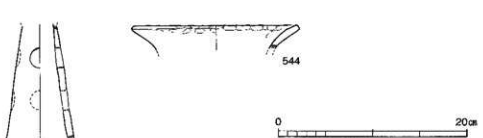


図91　SB2出土遺物

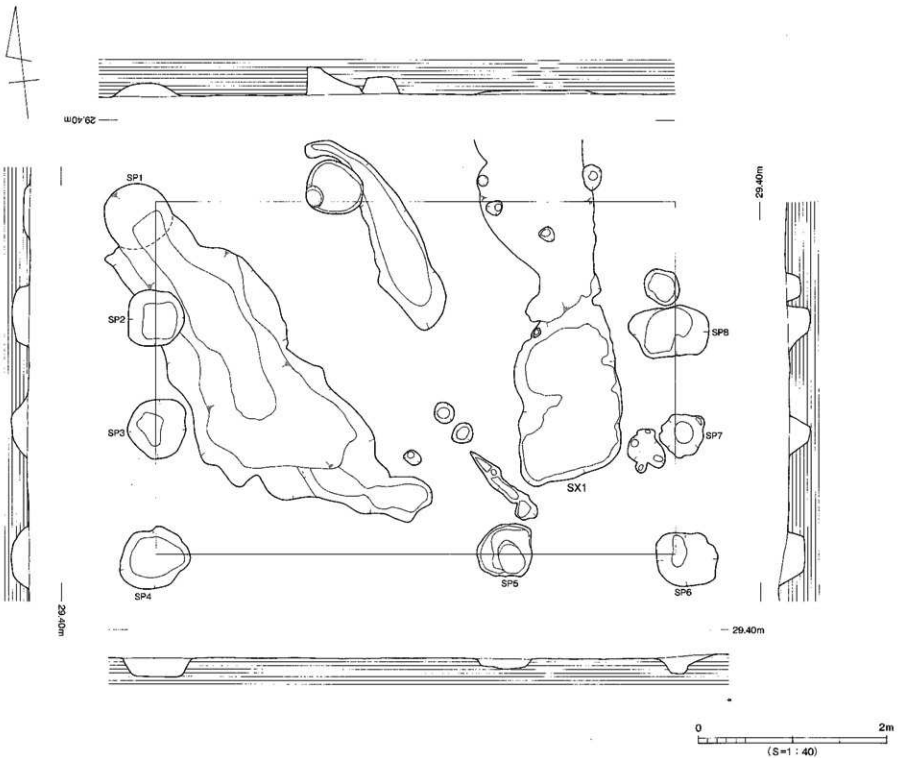


図 92　掘立柱建物 SB2

b. 土坑

SK5（図93）

調査地中央北寄りで検出された円形土坑で、直径1.2m、深さ0.8mを測る。拳大から人頭大の河原石が断面図に現れたように落ち込んだような状態で、密集して出土している。図示したような土師器皿や坏、埦等が出土するとともに、調査後散逸してしまっているが、坑底からは獣骨の出土がみられている。これらのことからすると、表面に集石を伴う役畜等の埋葬坑の埋土が緩んで落ち込んだ状況と考えられる。10世紀代の遺構である。

SK5出土遺物（図94）

土師器

皿(545～552) いずれも回転台成形、底部ヘラ切りのもの。ほぼ完形品の545で、器高1.35～2.15cm、口径9.3cmを測る。外底面はヘラ切り未調整。サイズのわりに器壁が厚く、ボテっとしたつくりである。551を除いた他のものは、これよりもやや薄い。551は若干法量が大きくなるものである。

坏（553） 外反気味に開く坏の口縁部である。

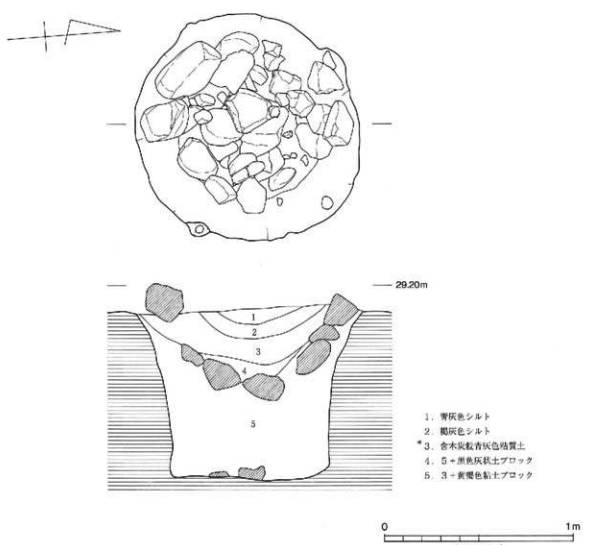


図93 土坑 SK5

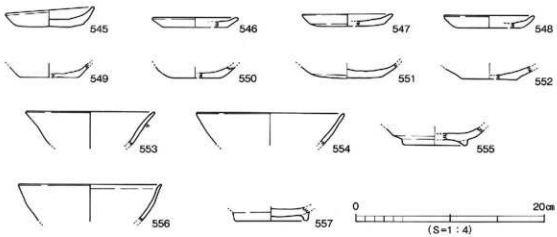


図 94　SK5 出土遺物

埦（554・555）　554 は、復元口径 15.4 cmを測る口縁部片、555 は、断面三角形の輪高台を貼り付けられた底部である。

黒色土器

埦（556・557）　どちらも A 類の破片。556 の口縁部は比較的薄手のつくりで、口端部内面に鈍い稜を持って、端部を尖り気味に丸く収めている。557 は、貼り付け輪高台の底部である。

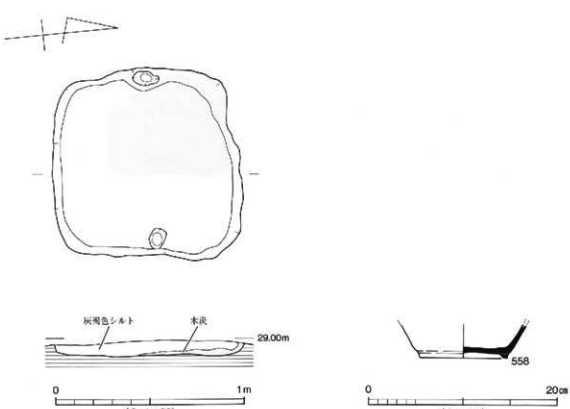


図 95　土坑 SK6・SK6 出土遺物

SK6（図 95）

調査地南端、中央より西寄りで検出された 1.0 × 1.0m 規模の隅丸方形土坑。深さ 10 ㎝程度の遺存、北西四半の床面に炭化物の分布がみられた。8 世紀代の遺構である。

SK6 出土遺物（図 95）

須恵器

坏（558） 断面台形状の低い貼り付け高台を持つ坏。復元径 9.2 ㎝を測る高台端面は、やや外に傾いた面をなし、外端部で接地する。外底面にはヘラ切り離し痕、板状圧痕が残っている。

（4）時期不明の遺構

不明遺構

SX1（図 75・92）

調査地東部で掘立 SB2 と切り合って検出された不整形の溝状を呈する窪みで、SB2 を切っている。図化可能な弥生土器の出土が 1 点あるが、時期は不明の遺構である。

SX1 出土遺物（図 96）

弥生土器

壺（559） やや小さめの平底の底部である。

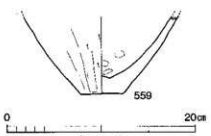


図 96 SX1 出土遺物

（5）包含層出土の遺物（図 97 ～ 100）

弥生土器

壺（560 ～ 605） 560 ～ 562 は、後期初頭の口縁部片で、やや拡張した口端面に 2 ～ 3 条の擬凹線を施すものである。563・564 は後期後葉のもので、563 では上方に低い立ち上がりを設けて拡張した口端面に櫛描波状文を施している。564 も、上下にやや拡張した口端面に櫛描波状文が描かれている。また口縁上面に細い工具で直弧文を描いたかと思われる施文がある。565 ～ 580 は後期の複合口縁壺の口頸部である。口縁部の多くは、屈曲部外面に稜を持って折れ曲がるもので、575 のみが、ヘラ描による斜格子文を持つ面をなす屈曲部となっている。565 ～ 570 には口縁部施文はなく、571 ～ 574 に施文がある。571 はヘラ描の平行直線文、口端部は外側につまみ出すように拡張されて、丸みを持った面をなしている。572 ～ 574 は、櫛描による施文で、いずれにも波状文が描かれている。このうち 574 は、波状文と直線文の組み合わせとなっている。573 の口端部は、内面に稜を持って強く外反し、端部を尖り気味に収めている。576 ～ 580 は頸部で、いずれも貼り付け突帯を持つものである。576 は、口縁の屈曲部まで遺存しており、頸部突帯は断面蒲鉾状の厚みのあるもので、斜め方向の深い刻みが施されている。577・578 の突帯にはヘラ描斜格子文が、また 579 には右方向から施された D 字形の刻み目がある。581 は頸部が比較的長く開く壺の頸部で、圧痕による斜め方向の刻みを持った突帯が貼り付けられている。582 は、直線的に外上方に開く壺口縁部。583 は、外反気味に短く開く壺口縁部である。584 は後期の小型精製長頸壺の頸部片、外面に櫛描による鋸歯文を挟んで上下に直線文が施されている。同一個体ではないが、この種の壺には 604 のような底部が伴う。585 も後期の長頸壺

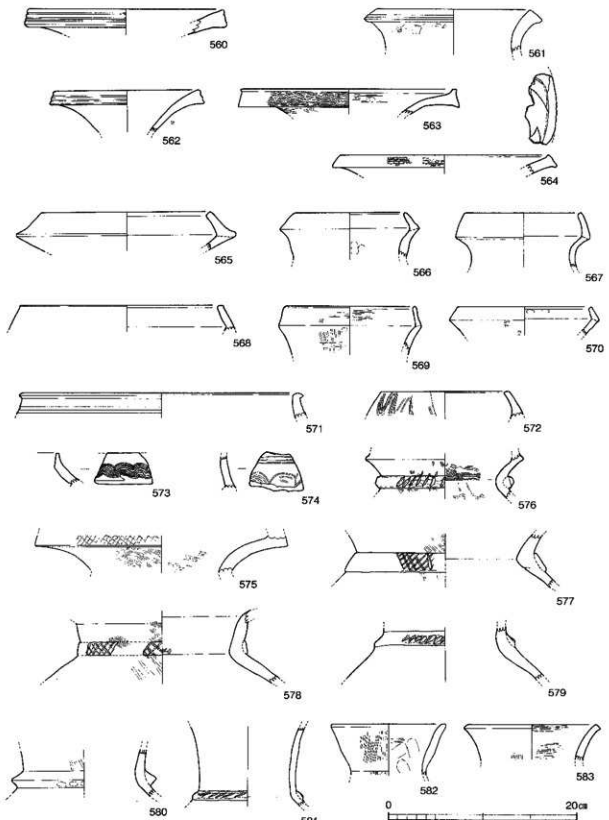


図 97　包含層出土遺物（1）

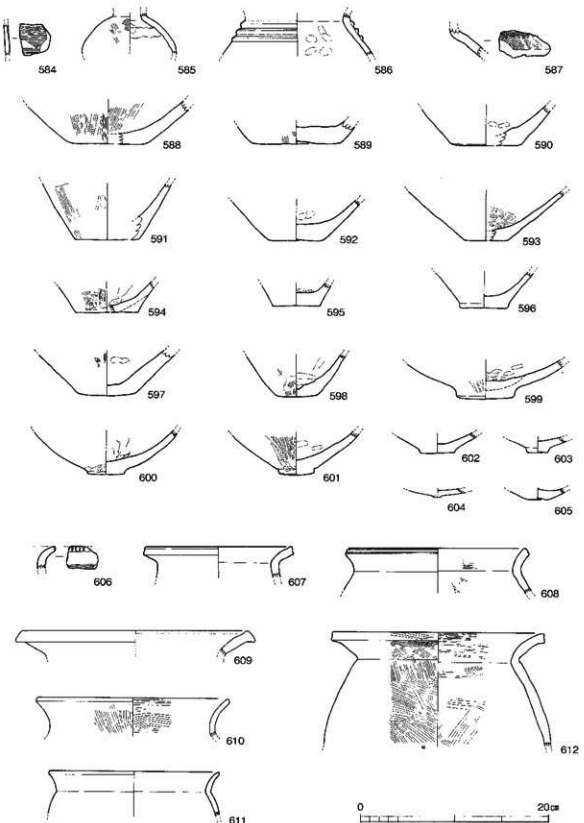


図98　包含層出土遺物（2）

と思われるものの胴部上位の片であるが、584のように精製されたものではない。586は、頸部下位の破片で、断面三角形の突帯が3条まで確認できる。中期中葉のものか。587は、中期前半のものと思われる屑部片で、櫛描波状文とその下位に刺突列点文が施されている。底部はおおむね後期のもので、大き目の平底から鈍い稜を経て胴部が立ち上がる588～592、これらより小さめの平底もしくは窪み底の593～596、凸面を呈する597・598、突出した平底の599～603、小さなボタン状に突出する604、ごく小さな窪み底605などがある。

甕（606～622）　606は前期の口縁部片、如意形に折り曲げられた口縁部は端部に面を持ち、端面全面を刻まれている。頸部にはヘラ描の平行沈線が2条まで確認できる。607～609は後期初頭～前半期の口縁部。607・608は折り曲げによるもので、口端面に凹線状の浅い窪みが1条巡っている。609は口端部を上下に若干拡張するが、端面は無文のものである。610～612は、後期後半のもので、いずれも折り曲げによる口頸部である。底部613～622は、いずれも後期のもので、613～616は、若干の窪み底になるもの、617以降は平底もしくは僅かな凸面を呈するものとなっている。

鉢（623～625）　623は、器高6.6cm、復元口径9.2cmを測るもので、底部は平底、内面を入念に仕上げられている。624は器高6.5cm、復元口径9.0cm、椀形の体部にくびれの上げ底の底部が伴うものである。625は、やや窪み底になる底部である。

高坏（626～634）　いずれも後期のものである。坏部626～628は、外面に稜を持って屈曲するものであるが、626のように口縁部が短く外上方に開くものと、628のような外反しながら大きく開くものがある。629は、エンタシス状の柱部を持つものの口縁部と思われ、上下方に拡張した口端面に2条の沈線を施している。630は、エンタシス高坏の脚裾屈曲部と考えられる破片で、屈曲部外面を斜線文で刻んでいる。坏底部片631の底部中央には直径2mm程度の貫通する焼成前穿孔が行われている。632～634は、脚柱部上位の片、このうち、632には柱部円孔が1ヶ所確認できる。

器台（635～641）　すべて受部と思われる破片である。635～637、639は、端面に沈線をもつもので、うち、639にはさらに刺突を施された楕円形の浮文が貼り付けられている。638、640の端面施文は櫛描波状文、641は半裁竹管による刺突となっている。

支脚（642・643）　642は、受部の片面をU字状に切り取り、受部が斜めになるもの。643は裾部で、横断面形が楕円形を呈するものである。

須恵器

坏（644）　扁平なつまみを持った蓋の片である。

土師器

坏（645～649）　5点ともに、底部ヘラ切りの回転台成形による坏である。うち、完形品の645は、器高5.1cm、口径14.2cm、底径6.6cmになるもので、底部が円板高台風に突出している。

石製品

砥石（650）　破損品であるが、不定形な砂岩の2面を砥面として使用している。

敲石（651）　これも破損品、砂岩の転石を敲石として使用したもので、周縁に敲打痕があるが、特に集中して使用されている部分がある。

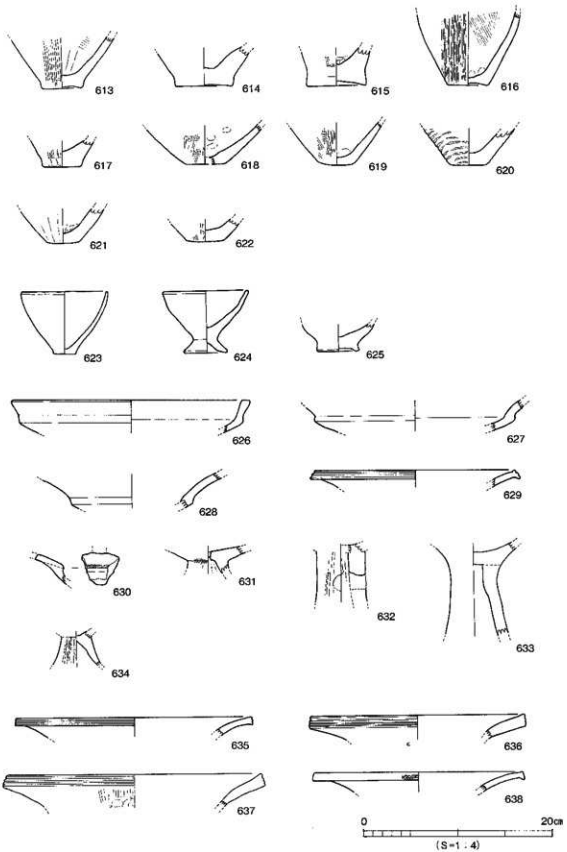
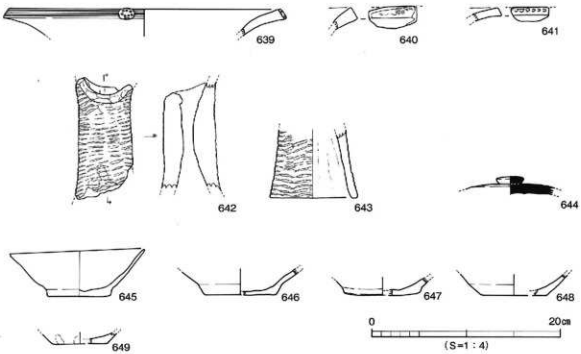


図 99　包含層出土遺物 (3)



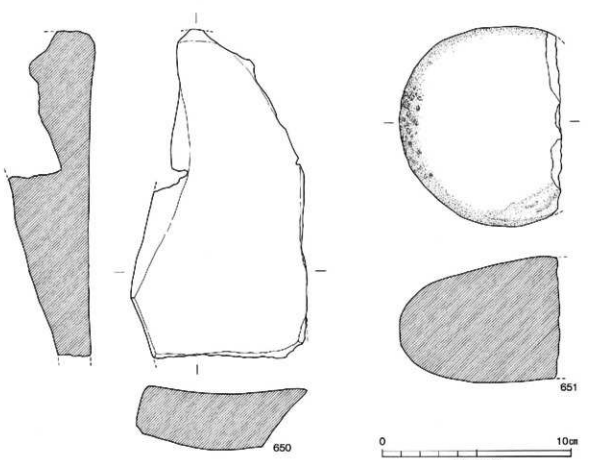


図 100　包含層出土遺物 (4)

3．小　結

調査で検出された主な遺構は、弥生時代後期を中心としたもので、おおよそ後葉のものである。調査地周辺では、南西から南200mのエリアに展開する中村遺跡、中村松田遺跡1～3次調査地や七ノ坪遺跡2次調査地においてやはり後期後葉を中心とした住居群をはじめとする遺構群の分布がみられている。その遺構の濃淡からすると3段階にわたり、7棟の竪穴住居の検出をみている中村松田遺跡1次調査地に分布の中心がある。本調査での遺構群は、この中村松田遺跡を中心とした集落の一部を構成するものであり、石手川流路との位置関係からすると、その北限に近い部分にあたっているものと考えられる。また、掘立柱建物SB2は、その方位を磁北からやや東に振る建物で、古代タイプの坏身口縁部小片の出土があった。北東およそ100mの素鷲小学校構内での建物群の例からいえば、8～10世紀代の建物と考えられる。

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、胴上－胴部上半、胴下－胴部下半、底－底部、天－天井部

胎土・焼成欄　長－長石、石－石英、金－金雲母、（数値）－鉱物粒の大きさ（㎜）、◎－焼成良好、○－焼成やや良、△－焼成不良

表43　SB1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
423	壺	口径 (11.6) 残高 3.2	長頸壺の口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ○		
424	壺	口径 (11.6) 残高 5.9	長頸壺の口縁部片。	ハケ(5本/cm)→ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		38
425	壺	口径 (15.2) 残高 5.0	頸部で強く外反し、外上方に開く口縁。	ヨコナデ	[上端]ナデ [上]ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ○		
426	壺	残高 4.9	複合口縁壺口縁部片。櫛描状工具による施文。下位に半裁竹管文。	[口]ナデ [胴]ハケ(5本/cm)→ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○		
427	壺	残高 3.6	複合口縁壺の口縁部片。櫛描状工具による施文。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) 金 ○		
428	壺	残高 2.3	複合口縁壺。口端面上位に6本単位の波状文、下位にS字状に施された2段の半裁竹管による刺突文。	ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		38
429	壺	口径 (14.6) 残高 9.0	複合口縁壺の口頸部、胴部に施みを持った貼り付け突帯。	[口]ナデ [胴]ハケ(4本/cm)	[上]ヨコナデ [胴上]ハケ→ナデ [胴下]ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) 金 ◎	黒斑	38
430	壺	口径 (17.4) 残高 3.3	複合口縁壺の口縁部。無文。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(2) 金 ◎		
431	壺	残高 6.8	複合口縁壺。口端面に波状文。	[口端]ヨコナデ [頸上]櫛描状→ナデ [頸下]ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	長(1~3) ○		38
432	壺	残高 5.1	頸部片。刻みが施された貼り付け突帯。	ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) ○		
433	壺	残高 5.1	頸部片。貼り付け突帯に斜格子文が施されている。	ハケ(6本/cm)	[頸上]ナデ [頸下]ハケ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ○		
434	壺	残高 6.5	頸部片。貼り付け突帯に斜格子文が施されている。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○		38
435	壺	残高 22.2	下に大きく張る胴部。	[胴上]ハケ(5本/cm) [胴下]ハケ→ミガキ	ハケ(10本/cm)	橙色 橙色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	
436	壺	底径 8.6 残高 6.7	平底。	ヘラミガキ	ハケ→ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ○	黒斑	
437	壺	底径 (7.6) 残高 5.4	平底。	ハケ→ナデ [底]指頭痕→ナデ	ハケ(6本/cm)	橙色 褐灰色	石・長(1) 金 ○		
438	壺	底径 8.1 残高 4.9	平底。	ナデ	マメツ(ナデ?)	褐灰色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○	黒斑	38

439	壺	底径 7.0 残高 5.0	平底。	マメツ(ハケ)	マメツ(断面板)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) 少 ○	
440	壺	底径 4.0 残高 6.4	平底。	マメツ	断面底→ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ○	
441	壺	底径 4.6 残高 8.8	平底。	マメツ(ハケ)	マメツ	明黄褐色 灰黄褐色	石(1~3) △	黒斑
442	壺	底径 5.8 残高 3.8	平底。	ハケ(4本/cm) [底]ナデ	断面底	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) 多 ○	黒斑
443	壺	口径 (15.6) 残高 5.3	口頸部。端面に凹線状の窪みが巡る。	マメツ	マメツ	明褐色 明黄褐色	石・長(1~2) △	
444	壺	口径 (20.0) 残高 4.7	口頸部。端部をやや拡張して、端面に凹線を2条施す。	マメツ(ヨコナデ)	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(1) ○	
445	壺	口径 (17.6) 残高 2.8	くの字に屈曲する口縁。端面は平坦。	[口縁]ナデ 口[口]ハケ→ナデ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○	
446	壺	口径 (22.8) 残高 2.9	くの字に屈曲する口縁。端面は平坦。	[口縁]ヨコナデ マメツ(ハケ)	マメツ	にぶい黄橙色 橙色	長(1) 金 △	
447	壺	口径 (17.6) 残高 4.1	くの字に屈曲する口縁。端面は平坦。	[口縁]ヨコナデ タテハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) ○	
448	壺	口径 (32.4) 残高 4.7	大型品。頸部に断面三角形の貼付け突帯。	マメツ	マメツ	橙色 褐灰・にぶい黄橙色	石・長(1~3) △	
449	壺	口径 19.8 底径 5.6 器高 38.2	くの字に屈曲する口縁。胴部やや上位に大きめの張りを持つ。平底。	[口縁]指頭痕→ハ [底]ケズリ [底部]ナデ	[口縁]マメツ(ハケ) 胴上[胴部]→ハケ 胴下ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長(1~5) 金 ○	黒斑 39
450	壺	底径 (7.4) 残高 3.9	若干の歪み底。	[底 胴]ハケ(7本/cm)→ナデ [底部]指頭痕→ナ	胴底→ナデ	褐灰色 にぶい橙色	石(1~3) 金 ○	黒斑
451	壺	底径 3.8 残高 6.0	若干の歪み底。	ハケ(4本/cm)→ナ [底]ナデ	ケズリ→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~3) ○	
452	壺	底径 (3.6) 残高 4.5	若干の歪み底。	ハケ(5本/cm)→ナ [底]ナデ	マメツ	橙色 灰褐色	石・長(1~3) ○	
453	壺	底径 (5.2) 残高 4.9	若干の歪み底。	マメツ	マメツ(指頭痕)	にぶい褐色 にぶい黄橙色	長(1~3) ○	
454	壺	底径 4.8 残高 2.2	若干の歪み底。	ナデ [底]指頭痕→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石(1~2) 多 ○	
455	壺	底径 5.8 残高 2.9	若干の歪み底。	ナデ [底]指頭痕→ナデ	ハケ	褐灰色 褐灰色	石(1~2) 金 ○	
456	壺	底径 6.8 残高 2.9	平底。	マメツ(ナデ)	マメツ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1~3) ○	38
457	壺	底径 4.0 残高 6.2	平底。	[胴]ハケ(9本/cm) [底]ナデ	ハケ(11本/cm)→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 多 ○	黒斑 38
458	壺	底径 4.0 残高 4.9	平底。	[胴]工具によるナデ [底]ナデ	工具によるナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○	黒斑
459	壺	底径 4.2 残高 4.1	平底。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○	
460	壺	底径 3.6 残高 3.5	平底。	[底]ハケ(5本/cm) [底面]ナデ	胴底→ナデ	暗灰黄色 橙・灰黄褐色	石・長(1~3) 多 ○	黒斑
461	壺	底径 4.0 残高 3.7	平底。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○	
462	壺	底径 3.6 残高 3.7	平底。	工具によるナデ	胴底→ハケ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石(1~2) ○	
463	壺	底径 3.3 残高 3.3	平底。	タタキ→ハケ(5本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑
464	壺	底径 2.5 残高 2.9	平底。	[底]ハケ(7本/cm) [底面]ナデ	マメツ(断面板)	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石(1~2) ○	

465	壺	底径 1.2 残高 2.7	小さく突出した底部。	[底]ハケ [胴]ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) 金 ○			
466	鉢	口径 (19.6) 残高 4.9	ゆるやかに外反し、口端部はやや内傾する。	[口]ヨコナデ [胴]指頭痕→ヨコナデ	[口]指頭痕 [胴]ハケ→ミガキ?	橙色 にぶい橙色	石(1) 金 ○	黒斑		
467	鉢	口径 (12.0) 残高 5.0	やや上げ底の底部。外反する口縁。胴部、膨脹。	[底]ナデ [胴]ハケ(8本/cm)	[口]ハケ(8本/cm) [胴]ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) ○			
468	鉢	口径 (7.6) 残高 7.0	全体的に内湾する。	[底上]ナデ [胴下]ハケ(6本/cm)	ハケ(8本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○			
469	鉢	口径 (7.8) 残高 6.2	筒形。	下→ナデ [胴]ミガキ?	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○			
470	鉢	底径 3.3 残高 6.3	小さな平底。板押さえのような圧痕。	指頭痕	ハケ(8本/cm)	にぶい橙色 橙色	石・長(1~5) ○	黒斑		38
471	鉢	底径 (7.2) 残高 3.4	輪高台状の上げ底。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	橙色 橙色	石・長(1~3) ○	黒斑		
472	鉢	底径 5.0 残高 3.6	指でひねり出したような僅み底。	指頭痕	指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) 金 ○			
473	鉢	残高 3.6	台付鉢の台。上端部にヘラ描による7条の平行沈線。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) 金 ○			
474	高坏	口径 (29.8) 残高 9.1	坏部。大きく開く口縁。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) 金 ○			
475	高坏	口径 (22.6) 残高 6.3	坏部。やや浅めの口縁。	[口端]ナデ [口]ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○	黒斑		
476	高坏	口径 (23.6) 残高 4.1	強く外反する短い口縁。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ→ミガキ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) 金 ○			
477	高坏	口径 (22.8) 残高 2.5	大きく開く口縁。	[口端]ナデ [口]ハケ	マメツ	明黄褐色 褐灰・橙色	石・長(1~4) 金 ○	黒斑		
478	高坏	残高 4.4	口縁端部を欠く坏部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1) ○			
479	高坏	残高 4.5	口縁端部を欠く坏部片。	マメツ(ミガキ)	ミガキ	にぶい橙色 灰黄褐色	石(1~3) ○			
480	高坏	残高 3.7	口縁端部を欠く坏部片。	マメツ	ミガキ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○			
481	高坏	残高 3.5	口縁端部を欠く坏部片。	ハケ→ミガキ	ミガキ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○			
482	高坏	残高 8.0	坏底部片。	ミガキ	[底]ナデ [胴]ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○			
483	高坏	残高 6.6	柱部。対向する2ヶ所に円孔。	ミガキ	[脚]ミガキ [脚]シボリ痕→ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ○			
484	高坏	底径 (14.0) 残高 8.1	柱部。対向する2ヶ所に円孔。	[脚]ハケ→ミガキ [脚端]ヨコナデ	指頭痕→ナデ [脚下]ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○			
485	高坏	残高 2.9	エンタシス状の脚部片。下段竹管による刺突文。	マメツ(ハケ)	マメツ(ナデ?)	橙色 橙色	長(1) ○			39
486	高坏	残高 2.5	エンタシス状の脚部片。残の上下位に3本単位の刺突。	ハケ→ミガキ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	長(1) ○			39
487	器台	残高 1.7	受部片。下垂して拡張した端部に櫛描波状文。	ヨコナデ	[口端]ヨコナデ [口]ハケ	橙色 橙色	石(1) ○			39
488	器台	受部径 (22.8) 残高 2.5	下垂して拡張した端面に櫛描波状文。	[口端]ナデ [口]ハケ(6本/cm) →ナデ	[口端]ハケ [口]ミガキ	橙色 橙色	石・長(1~2) ○			39
489	器台	受部径 (23.6) 残高 2.3	口縁端面にヨコナデによる浅い窪み。	[口端]ナデ ミガキ	ミガキ→ナデ・ハケ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ○			
490	支脚	残高 12.0	U字状に抉り込む受部。中空筒状。	指頭痕	指頭痕・ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○	黒斑		

491	支脚	残高 7.0	脚部を均一にU字状に切り取った形態の受部。	[受部]ナデ [脚]ハケ→ナデ	[受部]ハケ [脚]ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
492	支脚	残高 6.2	受部片。	指頭痕	指頭痕	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1～3) 金 ○		
493	支脚	裾径 (7.8) 残高 5.1	脚部片。	ハケ→ナデ	指頭痕・シボリ痕	にぶい橙色 にぶい褐色	長(1) ○		
494	支脚	裾径 (10.4) 残高 4.2	脚部片。	指頭痕	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		
495	支脚	裾径 (12.8) 残高 3.2	脚部片。	指頭痕→ナデ	ハケ(7本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1～2) ○		
496	支脚	裾径 (11.4) 残高 3.9	脚部片。	[脚]指頭痕・ハケ [脚端]ナデ	指頭痕	橙色 にぶい黄橙色	石(1～2) 金 ○		
497	支脚	裾径 13.0 残高 1.9	脚部片。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石(1) 金 ○		
498	支脚	口径 (3.8) 残高 6.8	端部にむけて細くなる筒状。端部内面は段を持つ。	指頭痕	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	
499	不明	残高 5.9	内面が縦状に深む小整形の片。	指頭痕・ハケ	ハケ(6本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1～3) ○		39

表44　SB1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
500	砥石		陶石	10.5	6.3	3.7	330.62		39

表45　SK1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	(外面)色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
501	甕	口径 (11.4) 残高 4.6	折り曲げ口縁。丸く収めた端部。	[口]ナデ [胴]ハケ(5本/cm)	[口]ハケ→ナデ [胴]指頭痕	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
502	甕	口径 (16.6) 残高 5.3	折り曲げ口縁。丸く収めた端部。	[口]マメツ [胴]ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○		
503	甕	口径 (16.2) 残高 3.6	折り曲げ口縁。端部は面をなす。	[口]指ナデ [口]ハケ(10本/cm)	ハケ(10本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	石・長(1～2) ○		
504	甕	残高 5.2	頸部片。	[口]ヨコナデ [胴]マメツ	[口]ナデ [胴]ハケ(8本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	石・長(1～2) ○		
505	甕	底径 4.0 残高 18.5	底～胴部片。平底。	[底]ハケ(10本/cm) [底]ナデ	ハケ(10本/cm)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(1～2) ○		40
506	甕	底径 (2.5) 残高 15.4	底～胴部片。平底。	[胴]ハケ(6本/cm) [底]マメツ [底底]ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1～3) ○		40
507	甕	底径 4.7 残高 3.1	やや突出した平底。	[胴]ミガキ [底面]ナデ	ハケ(11本/cm)	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ○		
508	壺	底径 5.0 残高 2.8	わずかな隆み底。	[胴下端]ヨコナデ [底面]ナデ	ナデ	黄褐・橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○	黒斑？	
509	鉢	口径 (19.6) 残高 6.2	ボウル形の器型。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) 金 △		
510	高坏	口径 (19.6) 残高 3.7	穂を介して強く外反する口縁部。	ナデ	ナデ	橙～にぶい橙色 橙～にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
511	高坏	残高 2.5	穂を介して強く外反する口縁部。	[口端]ナデ ハケ→ミガキ	ミガキ	黒褐色 にぶい黄褐色	石・長(1) ○		
512	高坏	残高 4.7	坏底部と脚の接合部片。	ナデ	[坏]マメツ [脚]シボリ痕	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		

513	支脚	現存 8.2 器高 5.9	中実の底部円錐形。	ナデ	ナデ	暗灰黄色 暗灰黄色	石・長(1~2) ○		
514	支脚	残高 6.0	角状の突起部分。	斜位横・ナデ		にぶい黄橙色	石・長(1~3) 多 ○		

表46　SK2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
515	壺	口径 (26.2) 残高 11.9	大型の複合口縁壺。口縁端面に波状文。頸部に貼付け突帯斜格子文。	ナデ	工具ナデ、指頭圧(3本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙・灰白色	長(1) ○		40
516	壺	口径 (20.2) 残高 3.8	複合口縁壺。やや歪めに外反する口縁部。無文。	マメツ(ヨコナデ)	ヨコナデ・指頭圧	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石(1) 多 ○		
517	壺	残高 3.6	複合口縁壺。端面に櫛描波状文。	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄橙色 にぶい橙色	長(1) ○		
518	壺	口径 (16.4) 残高 4.8	緩やかに外反しながら外上方に開く口縁。端面は面をなす。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1~2) △		
519	壺	残高 3.3	頸部片。断面方形の貼付け突帯に刻み目。	ハケ	ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	長(1) ○		
520	壺	底径 (6.4) 残高 5.0	平底。	ハケ(6本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) 多 ○		
521	甕	底径 4.1 残高 20.9	底~胴部片。平底。	タタキ→ハケ	ハケ(4本/cm)	浅黄橙色 にぶい浅黄橙色	石・長(1) ○		40
522	甕	残高 11.9	胴上半部片。	タタキ→ハケ(12本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	長(1) ○		40
523	甕	底径 6.0 残高 2.1	若干の膨み底。	ナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	長(1) 多 ○		
524	器台	受部径 (20.8) 残高 1.2	受部片。端部を下方にやや拡張。	ハケ	ナデ	橙色 橙・褐灰色	長(1) 金 ○		
525	鉢	残高 2.8	台付鉢。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
526	支脚	現存 10.4 器高 14.3	2本の角状突起を持つ中空の支脚。受部中央突起脚に円孔。	斜位横→ナデ	ハケ(8本/cm)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	40

表47　SK3出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
527	壺	口径 (12.0) 残高 2.3	複合口縁壺。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		

表48　SK4出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
528	甕	口径 (12.6) 残高 5.2	折り曲げ口縁。端部は面をなす。	マメツ(ハケ)	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
529	鉢	口径 (14.0) 残高 4.8	小型品。わずかに外方に折り曲げられた口縁。	[口]ナデ ハケ(7本/cm)	ナデ	灰褐色 橙色	石・長(1) ○		
530	壺	底径 (7.0) 残高 5.6	平底。	ハケ・タタキ・ナデ	ハケ(8本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
531	壺	底径 5.8 残高 2.8	わずかに窪む底。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~3) ○		
532	高坏	残高 8.8	脚部。4方向2段の円孔。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい褐色	長(1~2) ○		
533	鉢	残高 1.3	台付鉢。大きく広がる台。円孔。	ミガキ	ナデ・ミガキ	橙・にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 金 ○	黒斑	

表49　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
534	器台	残高 4.4	受部片。	ハケ→ミガキ	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) 普 ○		
535	甕	底径 (2.2) 残高 4.5	平底。	[底]ハケ [底面]ナデ	ヨコナデ	黒褐色 にぶい黄橙色	石(1~2) 普 ○		

表50　SX2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
536	鉢	口径 (20.8) 残高 5.5	緩やかに外反する口縁。	[口]ナデ [胴]ミガキ	[口]ナデ [胴]ハケ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○		
537	壺	口径 (18.8) 残高 2.9	強く外反する折り曲げ口縁。端部は面をなす。	[口縁]ナデ [頸]胴部ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) 普 ○		
538	壺	口径 (11.0) 残高 12.7	長頸壺の口縁部片。	[口縁]マメツ [口]ハケ(6本/cm)	マメツ(指頭痕)	浅黄橙色 橙色	石・長(1~4) △		
539	壺	口径 (12.8) 残高 3.5	短く外反する口縁。	マメツ	マメツ	明褐色 橙色	石(1) △		
540	壺	底径 7.8 残高 1.6	平底。	[底]ハケ(5本/cm) [底面]ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 黒色	石(1~4) 含 ◎		
541	高坏	底径 (15.2) 残高 2.1	脚裾部。	マメツ(ハケ?)	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1~3) ○		
542	高坏	残高 5.3	坏部片。口縁を欠く。	[外]ハケ→ミガキ [底]ミガキ	[内]ハケ [底]ミガキ	暗にぶい黄橙色 暗にぶい黄橙色	石・長(1~3) ○		

表51　SB2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
543	高坏	残高 12.3	脚柱部。4方向2段の円孔。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~2) △		
544	甕	口径 (17.0) 残高 2.3	口縁部片。	[口縁]指頭痕 [口]ナデ	[口縁]指頭痕 [口]ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ○		

表52　SK5出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
545	Ⅲ	口径 9.1 底径 6.9 器高 1.4	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	長(1) ◎		41
546	Ⅲ	口径 (9.0) 底径 (6.6) 器高 1.1	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) △		
547	Ⅲ	口径 (9.9) 底径 (7.8) 器高 1.3	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石(1) ◎		41
548	Ⅲ	口径 (9.2) 底径 (6.8) 器高 1.3	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
549	Ⅲ	底径 (6.2) 残高 1.5	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	淡橙色 にぶい橙色	長(1) ○		
550	Ⅲ	底径 (5.8) 残高 1.2	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1) ◎		
551	Ⅲ	底径 (7.4) 残高 1.6	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		41
552	Ⅲ	底径 (5.8) 残高 1.4	底部ヘラ切り。	回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰褐色 灰褐色	長(1) ◎		

553	坏	口径 (12.6) 残高 3.6	外反気味に開く口縁。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 灰白色	含細砂粒 良 ○		
554	坏	口径 (15.4) 残高 3.4	口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	良(1) ○		
555	坏	底径 (6.6) 残高 2.0	断面三角形の貼り付け輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 全 ○		
556	坏	口径 (15.0) 残高 3.9	黒色土器。口縁内面に鈍い稜。端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙・黒褐色 黒色	良(1) ○		
557	坏	底径 (7.6) 残高 1.4	黒色土器。貼り付け輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色 灰褐色	良(1) ○		

表53　SK6出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
558	坏	底径 (9.2) 残高 3.7	貼り付け輪高台。	回転ナデ [底]ヘラ切り→板状痕	回転ナデ	淡黄・灰白色 灰白色	良(1) ○			

表54　SX1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
559	壺	底径 (4.4) 残高 8.2	平底。	ケズリ→ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~4) 全 ○		縄原	

表55　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
560	壺	口径 (20.6) 残高 2.6	やや拡張した端面に2~3条の擬凹線。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 明黄褐色	石・長(1~3) 全 ○			41
561	壺	口径 (16.0) 残高 4.7	やや拡張した端面に2~3条の擬凹線。	ナデ(工具による)	ナデ	にぶい橙・浅黄橙色 にぶい黄橙色	長(1) ○			41
562	壺	口径 (15.0) 残高 4.4	大きく外反する口縁。端面に2~3条の擬凹線。	ナデ	ナデ	にぶい橙・にぶい黄橙色 にぶい橙色	長(1~2) 全 ○			41
563	壺	口径 (22.0) 残高 2.7	上方に拡張した口端面に櫛描波状文。	ハケ(8本/cm)	ハケ	橙・浅黄橙色 にぶい橙色	長(1) ○			41
564	壺	口径 (21.8) 残高 2.0	上下にやや拡張した口端面に櫛描波状文。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石・長(1~2) ○			41
565	壺	口径 (17.8) 残高 4.1	複合口縁壺。口縁端部は面をなす。無文。	ナデ	ナデ	橙・灰黄褐色 にぶい黄橙・橙色	長(1) ○			
566	壺	口径 (11.6) 残高 4.9	複合口縁壺。無文。	ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1~2) 全 ○			
567	壺	口径 (12.0) 残高 5.7	複合口縁壺。無文。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~3) △			
568	壺	口径 (20.4) 残高 2.7	複合口縁壺。口縁端部は面をなす。無文。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○			
569	壺	口径 13.4 残高 5.1	複合口縁壺。端面は丸みをおびている。無文。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) 全 ○			
570	壺	口径 (14.2) 残高 3.0	複合口縁壺。口縁端部は面をなす。無文。	[口端]ヨコナデ [口]ハケ→ナデ	[口端]指頭痕→ナデ [上]ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		黒斑	
571	壺	口径 (29.0) 残高 2.7	複合口縁壺。外側につまみ出すように拡張された口端面。端面に平行沈線文。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) 全 ○			
572	壺	口径 (13.4) 残高 2.9	複合口縁壺。端面に櫛描波状文。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○			
573	壺	残高 3.3	複合口縁壺。内面に稜をもって強く外反する口縁。端部は尖り気味。端部に櫛描波状文。	ヨコナデ	[上端]ヨコナデ [口]指頭痕→ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) 良 ○			

574	壺	残高 3.5	複合口縁壺。端面に波状文・直線文。	マメツ	指頭痕→ナデ	橙色 橙色	長(1) ○		
575	壺	残高 3.9	複合口縁壺。端面に斜格子文。	ハケ(6本/cm)	ハケ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
576	壺	残高 4.8	複合口縁壺。刻みを持った断面薄舞状の貼り付け突帯。	[口]櫛:エコナデ [口]:ハケ→ナデ	[口]ハケ(5本/cm) [肩]ハケ→ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	石(1～3) ○		
577	壺	残高 5.6	複合口縁壺。頸部片。貼り付け突帯斜格子文。	[口]ナデ [肩]マメツ(ハケ)	ナデ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
578	壺	残高 7.6	複合口縁壺。頸部片。貼り付け突帯斜格子文。	[頸]ハケ [肩]ミガキ	ハケ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) 金 ○		
579	壺	残高 5.8	複合口縁壺。頸部片。貼り付け突帯に刻み目。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	長(1～2) ○		
580	壺	残高 5.0	複合口縁壺。頸部片。貼り付け突帯。	[口]ミガキ [肩]ナデ・指頭痕	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
581	壺	残高 8.4	疎めに開く頸部。刻みをもった貼り付け突帯。	マメツ(ナデ)	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
582	壺	口径 (12.0) 残高 5.4	直線的に外上方に開く口縁。	[上端]ナデ [上]:ハケ→ナデ	ハケ→ナデ・指頭痕	橙色 にぶい橙色	石(1) ○		
583	壺	口径 (13.4) 残高 3.8	外反気味に短く開く口縁。	ナデ	ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○		
584	壺	残高 3.3	長頸壺の頸部片。縦位文を挟んで上下に直線文。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	合細砂粒 ○		
585	壺	残高 4.4	長頸壺の胴部片。	ハケ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
586	壺	残高 4.5	断面三角形状の突帯が3本まで確認できる。	マメツ	指頭痕→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○		
587	壺	残高 2.9	肩部片。櫛描波状文とその下位に刺突文列点文。	ハケ(15本/cm)	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
588	壺	底径 (8.0) 残高 4.7	平底。	ハケ(5本/cm)	ハケ	にぶい褐色 灰褐色	石・長(1～3) ○	底面	
589	壺	底径 (9.4) 残高 2.4	平底。	[底]ハケ [底周]指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) 金 ○		
590	壺	底径 (7.4) 残高 4.3	平底。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ○	底面	
591	壺	底径 (6.6) 残高 4.3	平底。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 明黄褐色	石・長(1～2) ○		
592	壺	底径 5.4 残高 4.4	平底。	マメツ	ナデ・指頭痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(1～2) 金 ○		
593	壺	底径 4.4 残高 3.3	平底。	工具によるナデ	ハケ(8本/cm)	にぶい橙色 橙・にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○	黒斑	
594	壺	底径 (6.6) 残高 3.3	平底。	ハケ・ナデ	ナデ・指頭痕	橙色 にぶい黄橙色	石(1～3) ○		
595	壺	底径 5.0 残高 2.4	平底。	ナデ	指頭痕	にぶい黄褐色 橙色	石・長(1～3) ○		
596	壺	底径 4.8 残高 3.9	平底。	ナデ	工具によるナデ	褐灰色 褐灰色	長(1) ○		
597	壺	底径 6.2 残高 4.8	凸面を呈する底部。	[底]ハケ→ナデ [底]:ナデ	指頭痕→ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ○		

598	壺	底径 4.2 残高 4.3	凸面を呈する底部。	ハケ	ナデ	橙色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑		
599	壺	底径 6.2 残高 4.1	突出した平底。	ミガキ	指頭圧→下段による ナデ	赤い黄橙色 灰黄褐色	石・長(1~4) ○			
600	壺	底径 3.8 残高 4.7	突出した平底。	[表]指頭痕 [底面]ナデ	ハケ→ナデ	橙・灰色 オリーブ黒・ 橙色	石・長(1~2) ○			
601	壺	底径 3.6 残高 4.5	突出した平底。	[底]ハケ→ミガキ [体]指頭痕 [底面]ナデ	指頭圧→ナデ	赤い橙色 褐灰色	石・長(1) 金 ○			
602	壺	底径 (3.6) 残高 2.1	突出した平底。	ナデ	マメツ	赤い橙色 赤い黄橙色	石・長(1~2) ○			
603	壺	底径 (2.0) 残高 1.7	突出した平底。	マメツ	マメツ	暗褐色 橙・赤い褐色	含細砂粒 ○			
604	壺	底径 0.8 残高 1.0	ボタン状の底部。	ナデ	ナデ	褐灰・赤い 黄褐色 赤い黄褐色	長(1) ○	赤色 顔料		
605	壺	底径 (2.0) 残高 1.2	小さな窪み底。	ミガキ	マメツ	橙色 赤い橙色	石(1~2) ○			
606	甕	残高 2.5	口縁部片。如意形に折り曲げられた口縁。端面に刻み。	マメツ	マメツ	赤い黄橙色 赤い黄橙色	石・長(1) 金 ○			
607	甕	口径 (15.4) 残高 3.3	端面に凹線状の浅い窪み。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○			
608	甕	口径 (18.2) 残高 4.8	端面に凹線状の浅い窪み。	マメツ	[口]ハケ→ナデ [胴]ハケ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1) ○			
609	甕	口径 (23.6) 残高 2.7	上下に若干拡張する口縁端部片。	ナデ	ナデ	橙・赤い褐色 橙・赤い褐色	長(1~5) 金 ○			
610	甕	口径 (20.2) 残高 4.0	折り曲げ口縁。	ハケ(5本/cm)	ハケ(5本/cm)	赤い黄橙色 赤い黄橙色	長(1) ○	黒斑		
611	甕	口径 (17.8) 残高 4.8	折り曲げ口縁。	ナデ	ナデ	赤い黄橙色 赤い黄橙色	石・長(1) 金 ○			
612	甕	口径 (22.2) 残高 11.9	折り曲げ口縁。端面はやや窪む。	ハケ(4本/cm)	ハケ	赤い黄橙色 赤い黄橙色	石・長(1~2) 金 ○			
613	甕	底径 4.1 残高 5.3	若干の窪み底。	[表]ハケ(5本/cm) [底]ナデ	工具によるナデ	赤い黄褐・ 黒褐色 赤い黄橙色	長(1~2) 金 ○			
614	甕	底径 5.8 残高 4.1	若干の窪み底。	マメツ	ナデ	赤い黄橙色 赤い黄橙色	石・長(1~6) ○			
615	甕	底径 6.0 残高 4.0	若干の窪み底。	[表]ハケ→ナデ [内面]指頭痕→ナ	指頭痕	赤い橙色 黒色	石・長(1~3) ○			
616	甕	底径 (4.2) 残高 7.8	若干の窪み底。	[表]ハケ(5本/cm) [底]ナデ	[表]ハケ→ナデ [底面]指頭痕	赤い橙色 赤い黄橙色	石・長(1~2) 金 ○			
617	甕	底径 3.8 残高 2.8	平底。	[表]ハケ [底面]無調整	ナデ	赤い橙色 灰黄褐色	石・長(1~3) 金 ○			
618	甕	底径 (3.8) 残高 4.1	平底。	[表]ハケ [底面]ナデ	指頭痕→ナデ	赤い橙色 橙色	石・長(1~2) 金 ○			
619	甕	底径 3.7 残高 4.6	平底。	[底]ハケ(5本/cm) [底面]ナデ	ナデ	赤い黄橙・ 褐灰色 赤い黄橙色	長(1) ○			
620	甕	底径 (13.4) 残高 3.9	平底。	[底]タタキ [底面]ナデ	ナデ	赤い黄橙色 赤い黄橙色	石・長(1~2) ○			
621	甕	底径 3.4 残高 3.7	平底。	工具によるナデ	ナデ	橙色 赤い黄褐色	石(1) ○			

622	甕	底径 4.0 残高 2.4	平底。	[底]ハケ [底面]ナデ	ナデ	にぶい橙・ 褐灰色 褐灰色	石・長(1～2) ○		
623	鉢	口径 (9.2) 底径 2.2 器高 6.6	内湾気味に立ち上る口縁。平底。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	長(1) ○		41
624	鉢	口径 (9.0) 底径 (4.6) 器高 6.5	椀形の体部にくびれの上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	長(1) ○		41
625	鉢	底径 4.4 残高 2.9	やや強み底。	ナデ	工具によるナデ	にぶい橙・ 褐灰色 灰黄褐色	長(1) ○		
626	高坏	口径 (24.6) 残高 3.5	短く外上方に開く口縁。端部は面をなす。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長(1) ○		
627	高坏	残高 3.3	外面に稜をもって沿山する坏部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
628	高坏	残高 3.7	外反しながら大きく開く口縁部。	ミガキ	マメツ(ミガキ)	浅黄橙色 にぶい橙色	石(1) ○		
629	高坏	口径 (21.0) 残高 1.8	上下方に拡張した口端面に2条の沈線。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
630	高坏	残高 3.2	エンタシス状の柱部の脚裾屈曲部。沿山外面に斜格子の線み。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ○		
631	高坏	残高 2.9	底部中央に2mの貫通する焼成前穿孔。	ハケ→ナデ	[底]ナデ [脚上]シボリ痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		41
632	高坏	残高 6.2	柱部。円孔。	ミガキ	[底]ナデ [脚上]シボリ痕	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		
633	高坏	残高 9.9	柱部。	ナデ	ナデ	橙・褐灰色 橙・褐灰色	長(1～2) ○		
634	高坏	残高 3.5	柱部。	ミガキ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
635	器台	受部径 (24.8) 残高 2.0	端面に沈線を持つ受部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		
636	器台	受部径 (22.4) 残高 2.6	端面に沈線を持つ受部。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	長(1～2) ○		
637	器台	口径 (26.8) 残高 3.4	端面に沈線を持つ受部。	[口唇]ヨコナデ [下]ハケ→ナデ・斜位横位	ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
638	器台	受部径 (21.8) 残高 2.1	やや下方に拡張された口縁端面に櫛描波状文。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄橙色	長(1～3) △		
639	器台	受部径 (28.2) 残高 2.8	口縁端面に3条の沈線、格円形浮文に刺突が施されている。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙・ 褐灰色 にぶい橙色	石・長(1) ○		
640	器台	残高 2.3	端面に櫛描波状文。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
641	器台	残高 1.5	端面に半裁竹管による突刺。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石(1～2) ○		
642	支脚	残高 12.8	片面を「U」字状に切り取った受部。	タタキ	シボリ痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○		42
643	支脚	基径 (9.1) 残高 9.2	横断面が楕円形を呈する脚部。	タタキ	シボリ痕→ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～4) ○	黒斑	42
644	坏	残高 1.9	蓋。扁平なつまみ。	[つまみ]ナデ [天]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○		
645	坏	口径 14.2 底径 6.6 器高 5.1	底部ヘラ切り。	[口・体]ナデ [底]回転ヘラ切り→ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1) △		42

646	坏	底径 (7.4) 残高 2.8	底部ヘラ切り。	[山-沼]ナデ [底]同心円状ヘラ切り→ナデ	ヘメツ	橙色 橙色	含細砂粒 ○		
647	坏	底径 (8.0) 残高 1.9	底部ヘラ切り。	ヘメツ	ヘメツ	橙色 浅黄橙色	含細砂粒 △		
648	坏	底径 (7.0) 残高 2.3	底部ヘラ切り。	ナデ	ヘメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○		
649	坏	底径 (5.8) 残高 1.2	底部ヘラ切り。	[口-体部]横位→ナデ [底]ナデ	ヘメツ	にぶい赤褐色 灰褐色	含細砂粒 ○		

表56　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
650	砥石		砂岩	17.4	9.4	4.7	681.28		42
651	敲石		砂岩	10.5	8.6	7.7	842.83		42

第5章

小坂七ノ坪遺跡

第５章　小坂七ノ坪遺跡

１．調査の経過と組織

1989（昭和 64）年１月５日、南宇和宅建株式会社吉田篤氏（以下、南宇和宅建）より松山市小坂二丁目における共同住宅建築に伴う埋蔵文化財確認申請が、松山市教育委員会（以下、市教委）文化教育課に提出された。予定地は、松山市の指定する文化財包蔵地、「110　釜ノ口遺跡」のエリアに含まれる。申請を受けた文化教育課は、同平成元年３月３日～７日までの間、当該地内において試掘調査を実施した。その結果、須恵器や土師器の出土とともに溝状遺構の検出をみた。このため、この場所については工事に先立つ発掘調査が必要と判断された。遺跡の取り扱いについて南宇和宅建と市教委との間の協議の結果、南宇和宅建の協力のもと発掘調査を実施することとなった。調査は、同年６月 27 日より開始、およそ 1.5 ヶ月の調査期間を経た８月５日、全日程を終了した。

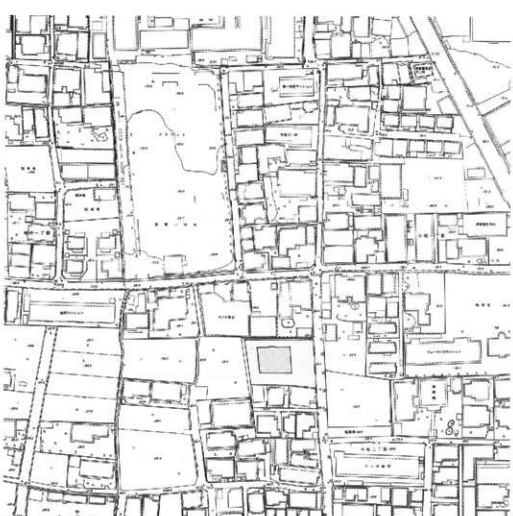


図 101　調査地位置図（S=1：2,000）

調査組織

松山市教育委員会　教育長　平井　亀雄
　文化教育課　課　長　渡辺　忠平
　　課長補佐　大野　衛治
　　第二係長　青野　浩之
　　主　任　西尾　幸則
　　調査員　栗田　茂敏

調査地　愛媛県松山市小坂二丁目471－1、471－2、471－5、471－6
調査期間　1989（平成元）年6月27日～1989（平成元）年8月5日
調査面積　847.49㎡

2．調査の成果

（1）調査の概要と層序（図102～104）

調査地の区割りは図102に示したように、調査地の形状にあわせて3mグリッドで設定した。調査では、溝3条、柱穴37基、土坑3基の検出があった。土坑とされているもののうち、SK1・2と略号をふられているものは倒木痕で、人為的な遺構ではない。
層序は、基本的に第1層遺成土の下面に旧水田面が2枚（第2～5層）あり、その下位に包含層であ

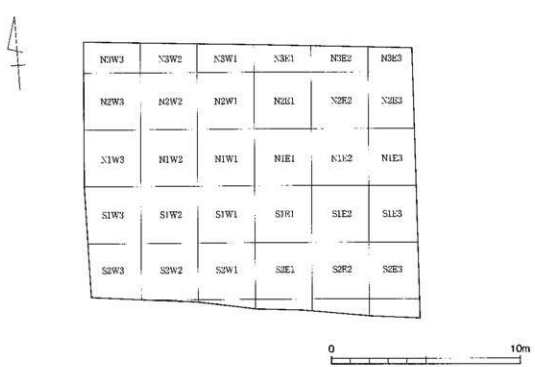


図102　調査地の区割り

図103 遺構配置図

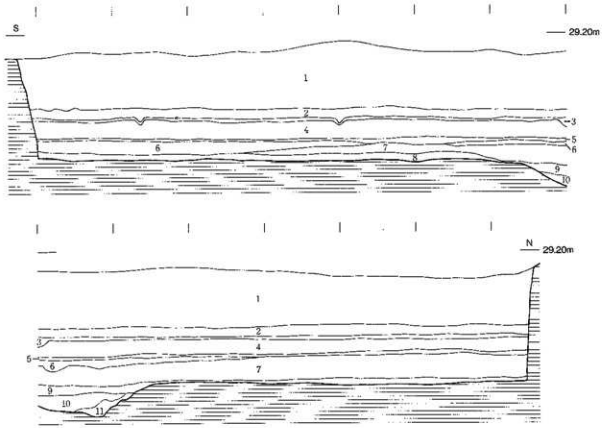


図104　調査区西壁土層図

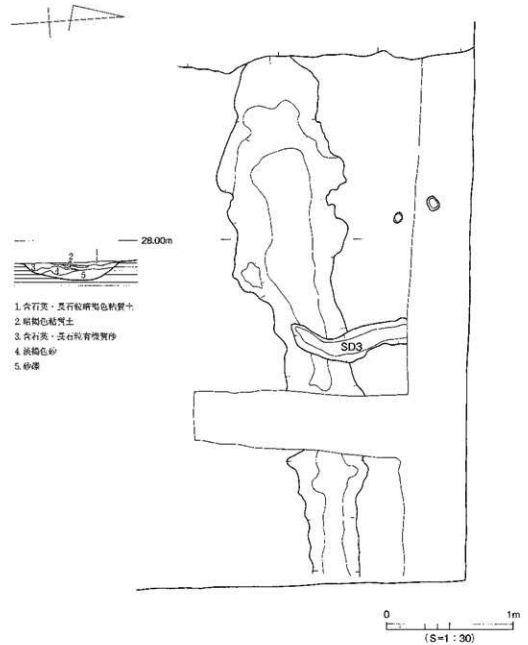
る褐色～黒色系のシルト（第6～8層）、これらの層の下面に部分的に黄色ブロックを含んだ暗褐色シルト（第9層）が薄く存在している。この第9層や8層下面の基盤層である黄色シルト面で遺構が検出される。検出された遺構のうち、主な遺構である溝SD1やSD2は、これらの褐色系のシルトや第9層同様の黄色シルト、黒色シルトのブロックが入った暗褐色シルトで埋まっている。また、その他の柱穴等は褐色系のシルトが埋土となっている。

（2）古墳時代の遺構と遺物

溝

SD2（図105）

調査地北東部で検出された東西溝で、検出長8m、最大幅1.9m、深さは最深部で0.3mを測る。最下層に礫が堆積していることからすると、通水していたものであろう。SD1との切り合いは微妙で



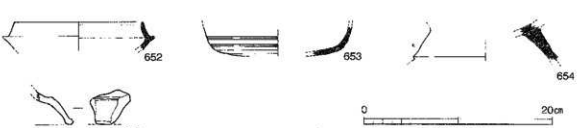


図105　溝 SD2・SD2 出土遺物

あるが、小規模な南北溝 SD3 に切られている。古墳時代後期以外の遺物は入っていないので、該期の遺構としておく。

SD2 出土遺物（図 105）

須恵器

坏（652） 身の破片。内傾するやや短めの口縁部を持つ。

高坏（653） 坏部の片。外面に段が2段巡っている。長脚二段透かしの脚を持つものと思われる。

壺（654・655） 両者ともに台付壺の台の破片と思われる。654 の下側の破損部分は、ちょうど段が巡る部分となっている。半周程度の遺存であるが、透かしはみられない。655 は土師質の焼成となっているが、本来やはり台付壺の台の部分であったものと考えられる。裾やや上位の屈曲部には稜が巡っている。

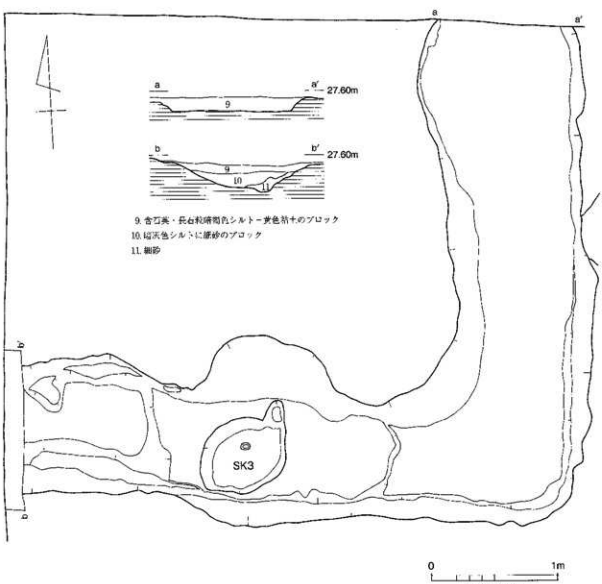


図 106 溝 SD1

（3）古代の遺構と遺物

a. 溝

SD1（図106）

調査地北西部、東西9.4m、南北8m規模で、コーナーを南東に持つL字状に検出された溝で、およそその幅2～2.5m、深さ0.2～0.3mになるものである。東辺の溝底はおおむねフラットであるが、南辺の底には大きな凹凸がある。埋土は黒色シルトをベースに黄色シルトや、細砂がブロック状に入る土である。また、溝底から楕円形状の窪みを検出したが、プランが明瞭に検出されているので、別遺構SK3として扱っている。ただし、出土遺物に時期差はない。また、混入と思われる弥生土器片、剥片をそれぞれ1点出土している。

SD1出土遺物（図107）

弥生土器

器台（656） 受部口縁の小片。外端面に、竹管文を施された2個の円形浮文がある。

須恵器

坏（657～660） 657・658は蓋である。657では端部を欠き、658ではつまみを欠くが、両者ともに同種の器型である。657は、扁平な摘みを持ち、内面に井桁状のヘラ記号がある。658の口縁部は、下方に短く突出して外面に面を設けるものである。659は、貼り付け高台を持つ坏底部片、660は壺形をなす身の口縁部片である。

石製品

剥片（661）赤色チャートの剥片である。

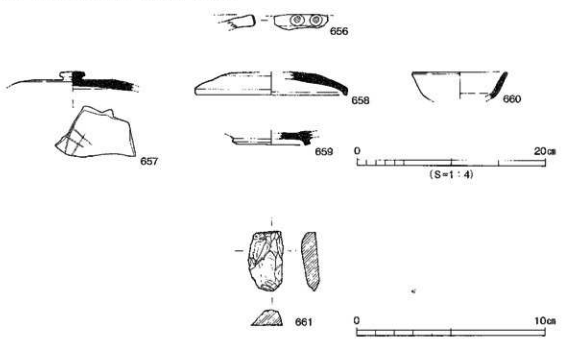


図107 SD1出土遺物

SD3（図105）

SD1の東4mの位置で、SD2を切った状況で1.5m分が検出された。幅0.4m、深さは5cm程度のもので、

褐色系のシルトを埋土とする。遺物の出土はないが、包含層との関係、SD1 との切りあいからして古代の遺構とみてよい。

b. 土　坑

SK3（図 108）

先述のように溝 SD1 の溝底において、溝に切られた状況で検出された土坑で、1.5 × 1.2m 程度の楕円形に近いプランで、現況での深さ 0.15m 程度のものである。

SK3 出土遺物

須恵器

坏（662）　扁平なつまみを付される蓋である。

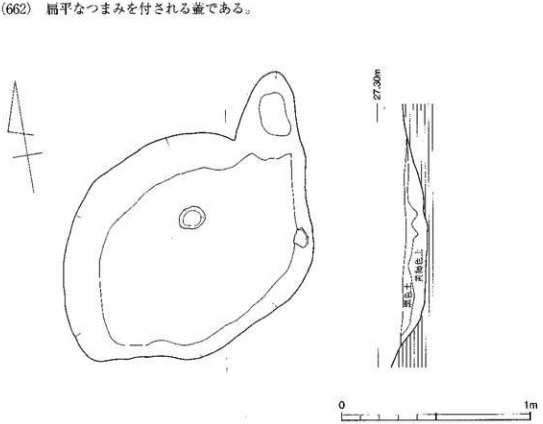


図 108　土坑 SK3・SK3 出土遺物

c. 柱　穴

小規模な柱穴が 37 基検出されているが、建物等を想定できる配置での検出はなかった。いくつかの柱穴から弥生土器、土師器、須恵器の小破片を数点出土しているが、図化までには至らなかった。

溝と同じ黄色シルト面上での検出で、包含層である褐色系のシルトで埋まっていることから、古代の遺構としてよいものと考える。

（4）包含層出土の遺物（図107・108）

弥生土器

壺（663） 立ち上がりの稜がやや鈍い平底の底部。

須恵器

坏（664～680） 664は古墳時代タイプの蓋口縁部片である。天井部境に沈線が1条、口端部は段を持った斜めの面をなしている。蓋665～673は、かえりがなく端部を下方に引き出す形態で、671～673のような扁平なつまみを付されるものである。このうちには端部を長めに引き出した665のようなもの、また、短い口縁部と天井部境に稜を持って天井部を平坦に削られる666のようなものがある。その他は、天井がやや高めで、口端部の引き出しが小さいものが多い。674～680は、身の底部片。うち、674～678が貼り付けの輪高台を持つものであるが、678は、その高台の貼り付け位置、外にふんばる形態からすると壺の底部かもしれない。その他の679・680が、回転ヘラ切りによる平底の底部となっている。

皿（681・682） 両者ともに、やや軟質の灰白色に焼成されたもので、丸みを帯びて口縁部が立ち上がる682に対して、681は平底の底部から、鋭角的に立ち上がっている。

鉢（683） 法量のわりに高めの輪高台を持ち、体部は塊形を呈するものである。

塊（684） 底部をやや丸みを帯びた小さめの平底に、内湾する体部を持つ。

硯（685） 復元硯面径16.6cmを測る円面硯。縁の直下に、断面三角形の突帯を持つ。脚台に2条平行のヘラ記号かと思われる沈線が一部確認できる。陸部は使用による平滑な面となっている。

土師器

坏（686～692） 686～691は、いずれも底部回転ヘラ切り離しによる回転台土師器坏の底部、692は扁平な蓋の摘み部分である。

皿（693） 口縁部を外反させ、端部を玉縁状に仕上げるもの、「て」の字状口縁の皿に近い形態であるが、口縁の外反度が弱い。内外面を赤色塗彩されている。

壺（694） 外側にふんばる輪高台を持った壺底部片。須恵器の焼成不良のものかもしれない。

高坏（695） 円柱状の脚上端部。坏底部との接合部位ではずれている。外面には赤色塗彩がされている。

土製品

窯道具（696） 円板の片面に、低い円錐形の突起を5ヶ所に配したハマである。

土錘（697） 側面紡錘形の管状土錘、部分的に欠損しており、現況で重量11.9gを量る。

石製品

石核（698） 緑色チャートの石核。

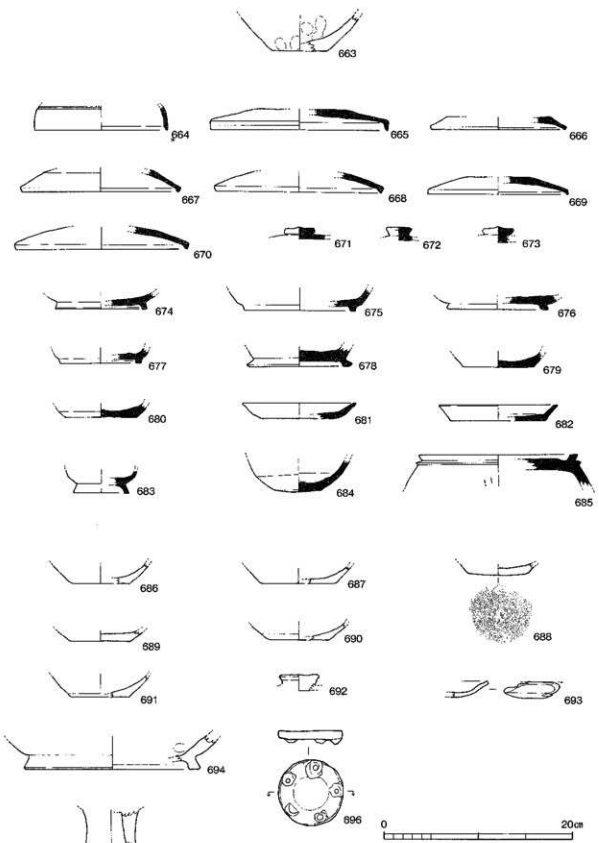


図 109　包含層出土遺物（1）

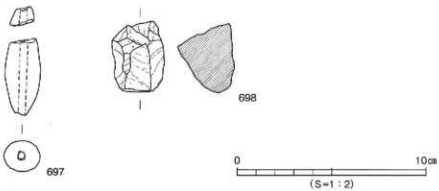


図 110　包含層出土遺物 (2)

3. 小 結

本調査で検出された遺構のうち、古墳時代および古代の溝が目立った主な遺構である。古墳時代の溝 SD2 は 6 世紀後半のもので、通水していた可能性が高い。古代の溝 SD1 は、ごく座標に近い方位

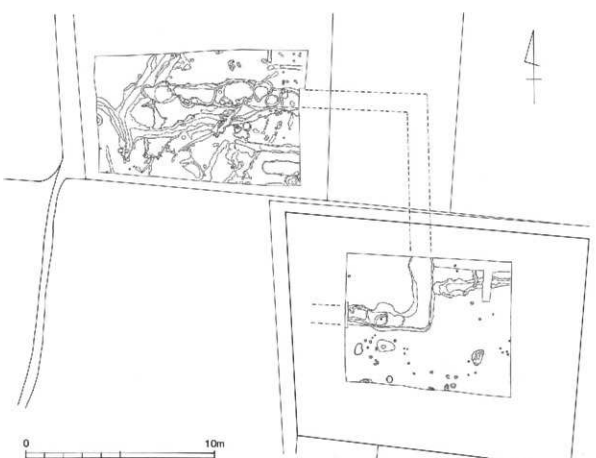


図 111　溝 SD1 の想定ライン

で東西方向から北方へ直角に屈曲しており、地割に関係するものか、もしくは地割を反映したなんらかの施設に伴う区画溝であったものと考えられる。その埋土にブロック状に黒色シルトや地山の黄色シルトが多く入り、なお同質の土が周辺を薄く覆っていることからすると、8世紀中頃～後半の段階で調査地一帯はこの土により整地され、その段階で埋まったものであろう。さて、この調査地の北西に隣接するエリアで1998（平成10）年、「小坂七ノ坪遺跡2次調査」として調査が行われ、やはり溝や土坑の検出をみている。このうち、SD1としている東西溝が、その規模・方向・形状等、本調査のSD1と同一遺構の可能性が高いとされ、およそ東西31m、南北25.7mの西に開いた「コ」の字形の長方形区画を想定されている。その可能性は高いが、ただ、2次調査SD1には整地による埋没の痕跡がない。ややレベルの低い本調査地にのみ整地が施されたものであろうか。

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄　（　）：推定復元値

調整欄　口－口縁部、頸－頸部、胴－胴部、胴上－胴部上半、胴下－胴部下半、底－底部、天－天井部

胎土・焼成欄　長－長石、石－石英、金－金雲母、（数値）－鉱物粒の大きさ（mm）、◎－焼成良好、○－焼成やや良、△－焼成不良

表57　SD2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
652	坏	口径 (13.5) 残高 2.9	内傾するやや短めの口縁。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
653	高坏	残高 3.0	坏部片。段が2段巡る。	[口]回転ナデ [底]ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		47
654	壺	残高 3.3	台付壺の台。	回転ナデ	[底]回転ナデ [底面]タタキ→ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		47
655	壺	残高 3.6	台付壺の台。	回転ナデ	指頭痕→ナデ	浅黄色 浅黄色	長(1) ◎		

表58　SD1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
656	器台	残高 1.4	口縁部片。端面に竹管文を施した2個の円形浮文。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) ◎		47
657	坏	残高 2.0	器壁薄くなつまみ。内面に井桁状のヘラ記号。	[つまみ]回転ナデ [天井]ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ◎		47
658	坏	口径 (15.6) 残高 2.4	下方に短く突出し外面に面を持つ口縁部。	[口]回転ナデ [天井]ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含雲母粒 ◎		
659	坏	底径 (7.4) 残高 1.4	貼り付け高台。	[底]回転ナデ [底面]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○		48
660	坏	口径 (9.8) 残高 2.8	塊形。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含雲母粒 ◎		

表59　SD1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
661	剥片		赤色チャート	3.2	1.8	0.8	6.49		47

表60　SK3出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
662	坏	残高 1.7	器、偏平なつまみ。	[つまみ・口]回転ナデ [天井]指頭ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		47

表61　包含層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
663	壺	底径 (5.8) 残高 3.8	平底。	ナデ	指頭痕・ナデ	淡黄橙色 灰白色	石(1) ○	焼成？	48
664	坏	口径 (13.8) 残高 2.5	器。天井部境に1条の沈線。口縁部に段を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		48
665	坏	口径 (18.8) 残高 2.2	蓋。受け部に引き出した端部。	[1]回転ナデ [2]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		48
666	坏	口径 (14.0) 残高 1.4	蓋。口縁部と天井部の境に稜を持つ。平坦に削られた天井部。	[1]回転ナデ [2]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
667	坏	口径 (16.0) 残高 2.3	蓋。下方に引き出された口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1～4) ○		48
668	坏	口径 (17.4) 残高 2.1	蓋。下方に引き出された口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
669	坏	口径 (14.8) 残高 1.8	蓋。下方に引き出された口縁部。	[1]回転ナデ [2]回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1～3) ○		
670	坏	口径 (18.0) 残高 2.4	蓋。下方に引き出された口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
671	坏	残高 1.3	蓋。扁平なつまみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ○		48
672	坏	残高 1.4	蓋。扁平なつまみ。	マメツ	ナデ？	灰白色 灰白色	含細砂粒 △		48
673	坏	残高 1.6	蓋。扁平なつまみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		48
674	坏	底径 9.4 残高 1.7	底部片。貼り付け高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		48
675	坏	底径 (11.6) 残高 2.4	底部片。貼り付け高台。	[底]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		48
676	坏	底径 (10.6) 残高 1.4	底部片。貼り付け高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		48
677	坏	底径 (8.4) 残高 1.6	底部片。貼り付け高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○		
678	坏	底径 (10.6) 残高 2.0	壺の底部か。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1) ○		48
679	坏	底径 (7.6) 残高 1.6	底部片。回転ヘラ切による平底。	[底]回転ナデ [底]ケズリ	回転ナデ	明オリーブ灰色 灰白色	含細砂粒 ◎		
680	坏	底径 (7.6) 残高 1.5	底部片。回転ヘラ切による平底。	[底]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰白色	含細砂粒 ◎		
681	皿	口径 (11.8) 底径 7.0 器高 1.6	丸味を帯びて立ち上る口縁。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
682	皿	口径 (12.0) 底径 (10.0) 器高 1.7	鋭角的に立ち上る口縁。	[口]回転ナデ [底]マメツ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
683	鉢	底径 (5.8) 残高 2.4	球形。輪高台。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	含細砂粒 ◎		
684	壺	口径 (5.0) 残高 3.4	内湾する体部。平底。	[口]回転ナデ [ロクロ目転ヘラケズリ] [底]ケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		48
685	硯	現幅 (16.6) 残高 3.3	円面硯。縁直下に断面三角形の突帯。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
686	坏	底径 (6.0) 残高 2.2	回転ヘラ切り離し。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○		
687	坏	底径 (7.6) 残高 1.8	回転ヘラ切り離し。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	含細砂粒 ○		48
688	坏	底径 6.6 残高 1.2	回転ヘラ切り離し。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙色 灰白色	含細砂粒 ○		48
689	坏	底径 (6.2) 残高 1.1	回転ヘラ切り離し。	[口]回転ナデ [底]回転ヘラ切り	回転ナデ	浅黄色 灰白色	含細砂粒 ○		
690	坏	底径 (6.3) 残高 1.8	回転ヘラ切り離し。	[口]マメツ [底]回転ヘラ切り	マメツ	灰白色 淡黄色	含細砂粒 ○		48
691	坏	底径 (6.2) 残高 2.3	回転ヘラ切り離し。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	含細砂粒 ○		48
692	坏	残高 1.7	蓋。扁平なつまみ。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 橙色	含細砂粒 ○		48
693	皿	残高 1.7	外反する口縁。端部は玉縁状。内外面に赤色塗彩。	回転ナデ	ロクロナデ	にぶい橙色 灰白色	含細砂粒 ○		48
694	壺	底径 (18.4) 残高 3.6	底部片。輪高台。	[口]マメツ [底]ナデ	マメツ(指頭痕)	浅黄色 浅黄橙色	石・長(1) ○		48
695	高坏	残高 4.0	杯部。外面に赤色塗彩。	ナデ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) ○		48
696	窯道具	底径 6.9 残高 1.5	ハマ。円錐形の低い脚3ヶ所。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1~4) ○		48
697	上錘	長さ 5.0 幅 1.9 重さ 11.86g	側面紡錘形の角状上錘。	ナデ		淡橙褐色 淡橙褐色	長(1) ○		48

表62　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
698	石核		緑色チャート	3.8	2.8	2.9	36.23		

第6章　まとめ

本書で報告された各遺跡の成果を総合して、時代ごとにまとめておく。

弥生時代の遺構は、小坂七ノ坪遺跡を除く3遺跡において検出された。前期の遺構は、素鷲小学校構内の土坑SK1が唯一のもので、前期前半のものであった。周辺地域を通観しても、前期の遺構の分布はなく、東方1,000mの欅味地区において溝や土坑が僅かに認められるのみである。本文中でも指摘したとおり、今後、未調査の小学校構内を含む調査地東から北東部に注目しておく必要がある。さて、報告したエリアやその近辺での弥生時代の遺構としては、後期後半の住居址を主体としたものが目立って多い。この時期になると、中村松田遺跡をその分布の中心とした集落域としてひとくくりできそうである。その集落域であるが、中村松田遺跡を基点としてみてみると、東方300mの枝松遺跡7次調査地以東で弥生後期の遺構が希薄になることがわかっているので、その近辺を東限に想定することができる。また、北方200mには石手川の存在があるので、これにより近い中村長正寺遺跡の北方近辺がその北限として考えられよう。さて、南方700～1000mの一帯には、やはり後期後半を主体とした集落釜ノ口遺跡がひろがっている。この集落は円形の大型住居を含む円形住居群および、中・小型の方形住居群で構成されるが、破鏡を持つ住居があったりすることから、比較的有力な集団と考えられている。過去の国道11号線新設に伴う調査や、積み重ねられてきた試掘調査の結果から、報告された中村松田遺跡を中心とするエリアと釜ノ口遺跡との間には幅広い谷地形が存在することがわかっている。このことからすると、集落としての中村松田遺跡を中心としたまとまりは、南方500m以北にあるものと考えられる。報告された拓南中学校構内遺跡の2棟の住居をはじめとする遺構群の所属はいずれの偶になるのか微妙ではあるが、隅丸長方形プランに2本柱穴、また南辺近辺の炉を持つ比較的小型の住居といった形態には中村松田遺跡の住居群に共通するものがあるということは本文中でも述べたとおりである。一方、西側エリアへの波期の遺構群のひろがりについては、調査が不十分で不明といわざるを得ないのが現状である。

古墳時代の遺構は、素鷲小学校構内においてまとまって検出されているが、その他では小学校南東直近の小坂七ノ坪遺跡の溝1条があるのみである。やはり、弥生時代前期同様、小学校構内を中心に、東部から北東部に今後注目する必要がある。この素鷲小学校の竪穴住居からは、非陶邑系須恵器鍋の出土があった。これに伴う須恵器壺肩部の片もその可能性があり、共伴遺物から5世紀末のものと考えられる。その他、包含層資料中にも壺口縁部片2点の出土があった。この遺跡の調査後、この種の須恵器の出土例が増加、また過去の調査出土遺物の掘り起こし等により、集成が試みられたり、論考が提示されたりした。その後、これらの須恵器の一部を焼成したと考えられる、伊予市市場所在の窯址、「市場南組窯址」の資料の公開によってその実態の一部が明らかとなるにつれて、在地の非陶邑系須恵器に「市場南組窯系須恵器」なる呼称が与えられることとなった。さて、松山平野での非陶邑系須恵器の出土例をあたってみると、高坏や壺の例が多く、本調査出土の須恵器鍋の類例は、松山市北井門遺跡や船ケ谷遺跡4次調査に数例あるのみで、船ケ谷4次調査で実施した胎土分析によれば、産地は讃半島との結果が得られている。しかし、市場南組窯址にも把手のみではあるが存在が確認されており、今回は実施し得なかったが、今後分析等により比較検討する必要がある。

古代の遺構は、素鷲小学校構内の掘立柱建物群・溝、中村長正寺の掘立柱建物、小坂七ノ坪の溝が主なものであった。掘立柱建物は年代を一点に絞ることが難しいが、8～10世紀代のもので、その多くが座標北を意識した建物となっている。小坂七ノ坪の古代の溝SD1は、ごく座標に近い方位で東西方向から北方へ直角に屈曲しており、地割に関係するものか、もしくは地割を反映したなんらかの施設に伴う区画溝であったものと想定され、8世紀後半代に整地によって埋まったものと考えられる。これら古代の遺構のひろがりについては、近隣の調査も加味しながら一定のひろがりを確認し、なおかつ分布の中心は素鷲小学校構内にあると考えた。この素鷲小学校の南西500mには、奈良時代以前に建立されたとされる伊予の8ケ寺のうちの中村廃寺比定地となっている素鷲神社があり、周辺地域は古代より開発が行われていたものと考えられる。もとより年代的にも寺との直接的な関係を示すことはできないが、このような基盤のもとにこれら集落関連の遺構が営まれていたのであろう。
中世の遺構は、拓南中学校構内で検出され、建物として拾わなかった小柱穴群も大方その年代のものである。なかでも建物に伴うと考えた地鎮遺構は、近年増えつつあるこの種の遺構の一例として良好な資料となろう。

【文献】

長井和秋ほか 『釜ノ口遺跡調査報告書Ⅰ 釜ノ口遺跡発掘調査団・松山市教育委員会 1973

長井和秋 「伊予市市場南組1号窯跡出土の須恵器 『ソーシアル・リサーチ 第20号』ソーシアル・リサーチ研究会 1993

西尾幸則ほか 『来住廃寺』松山市教育委員会 1979

梅木謙一ほか 『桑原地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992

『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994

『中村地区の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007

梅木謙一 『中村松田遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1992

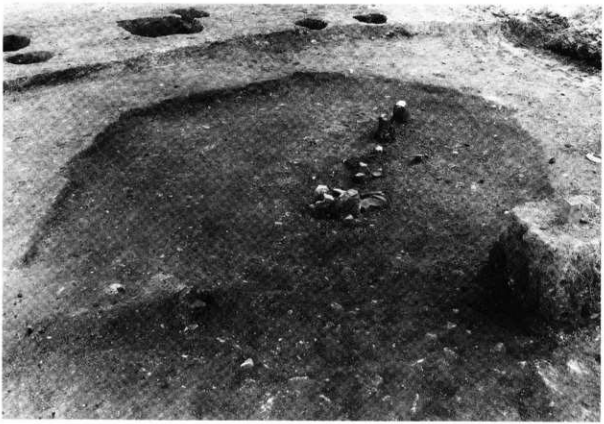
高尾和長ほか 『釜ノ口遺跡Ⅱ－6・7・8次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997

高尾和長・山之内志郎 『船ケ谷遺跡－4次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002

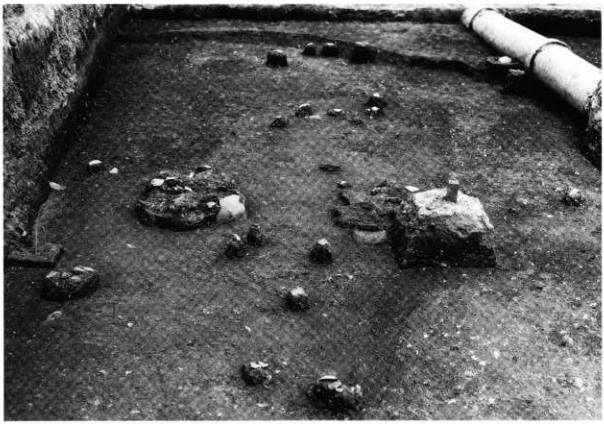
三吉秀充 「伊予出土の陶質土器と市場南組窯系須恵器をめぐって」『陶質土器の受容と初期須恵器の生産』愛媛大学考古学研究室 2002

写真図版

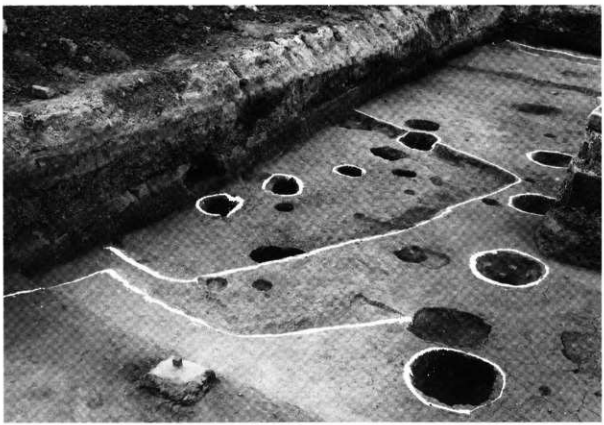
掘削状況（北東より）



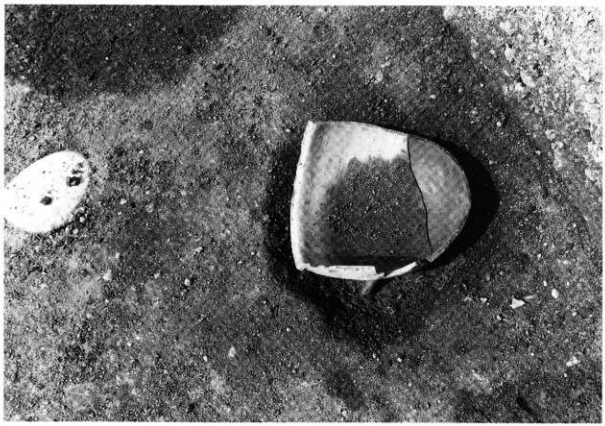
SX2 検出状況（南東より）



竪穴住居 SB3 検出状況（北より）

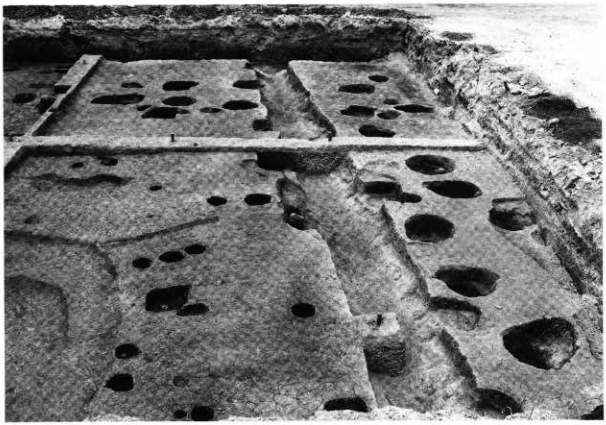


SB3 完掘状況（北西より）



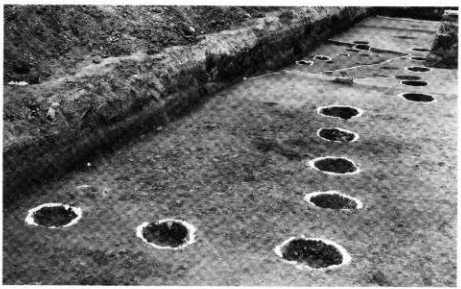
竪穴住居 SB10 遺物出土状況

SB10 調査状況（北西より）

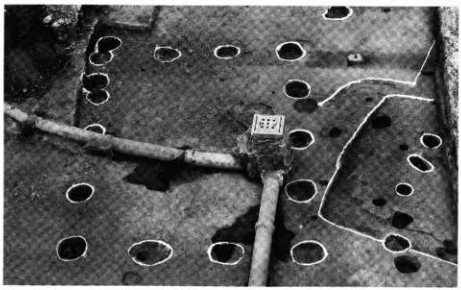


SD1 完掘状況（東より）

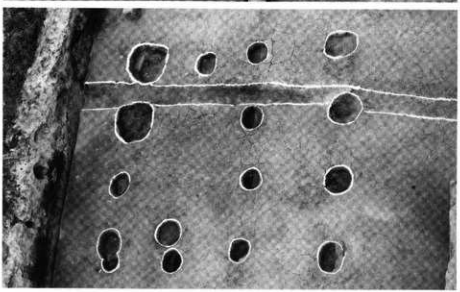
掘立柱建物 SB1（北より）



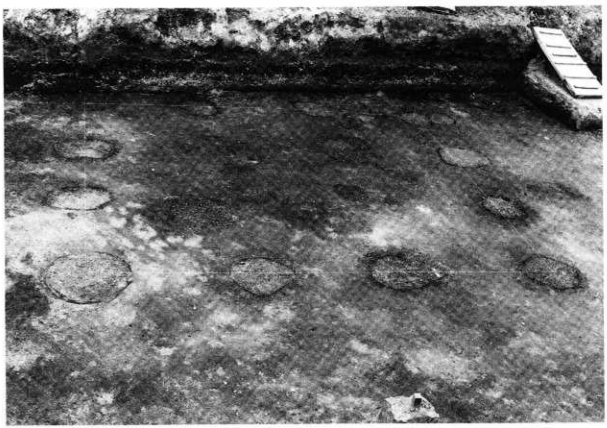
掘立柱建物 SB2
（北より）



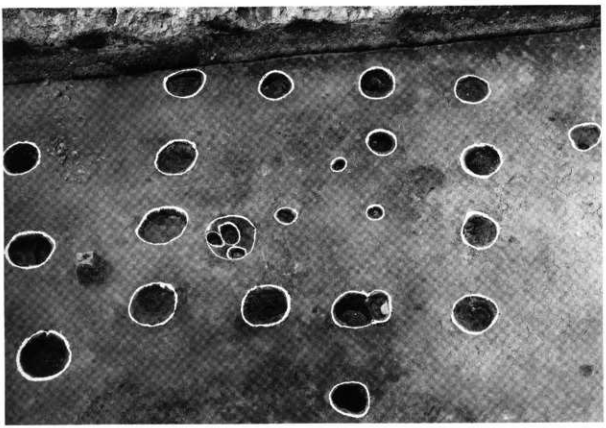
掘立柱建物 SB4
（北より）



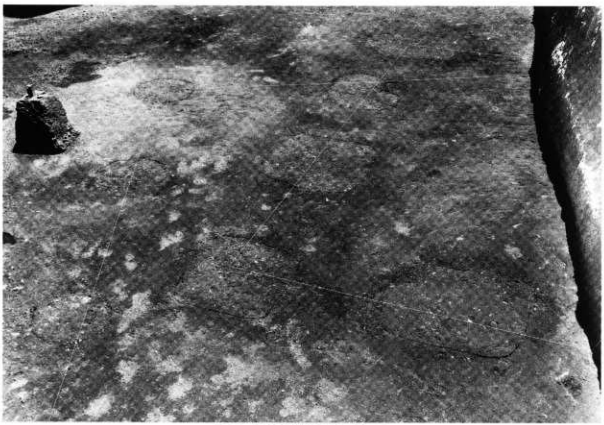
掘立柱建物 SB5
（南東より）



SB7 検出状況（東より）



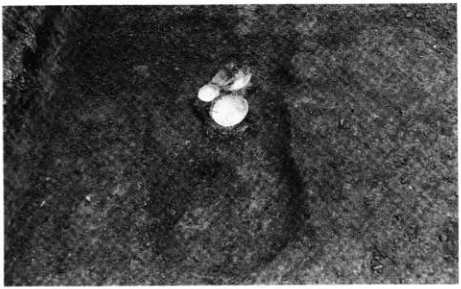
掘立柱建物 SB7（東より）



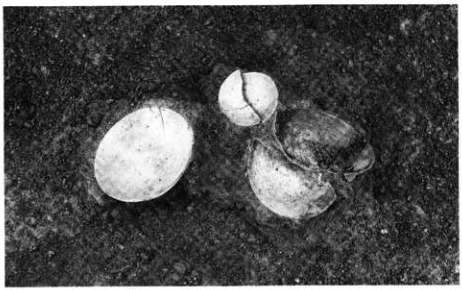
SB8・9検出状況（南西より）

掘立柱建物 SB8・9（西より）

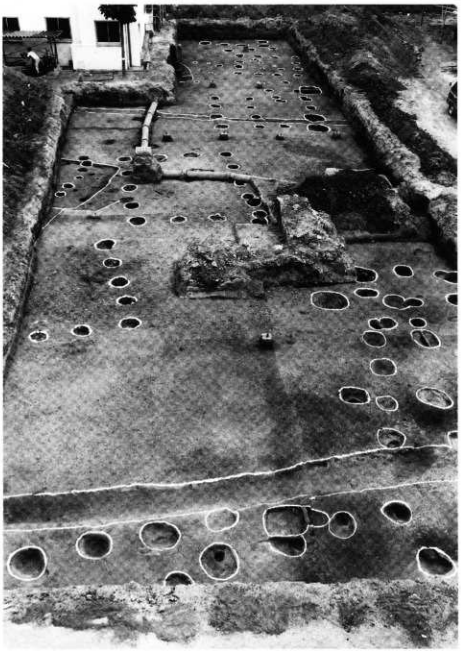
SX1 遺物出土状況



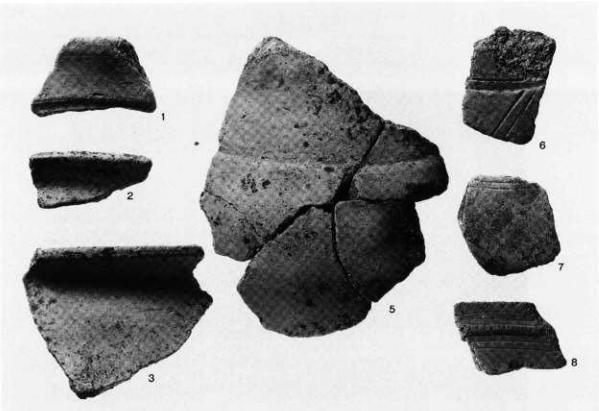
SK4 遺物出土状況（1）

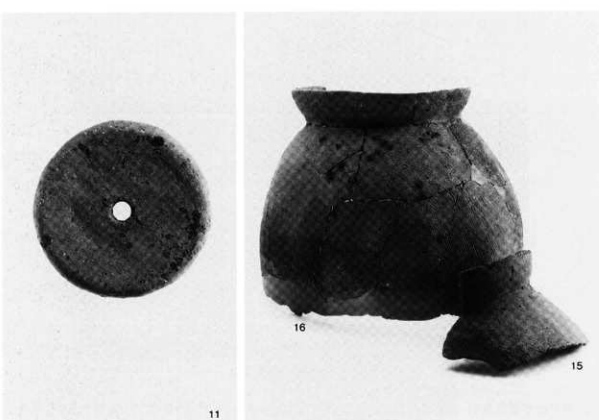


SK4 遺物出土状況（2）



完掘状況全景（北より）





SK1・SB3 出土遺物

30

29

28

37

33

34

35

SB10 出土遺物

64

67

68

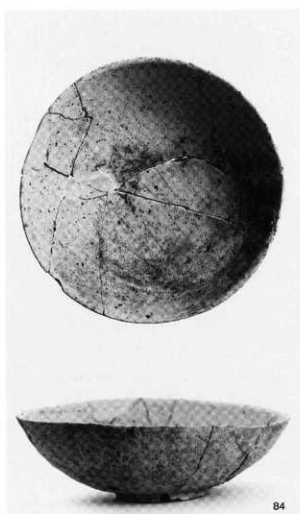
66

74

85

65

71


84

SX1 出土遺物、SK4 出土遺物（1）

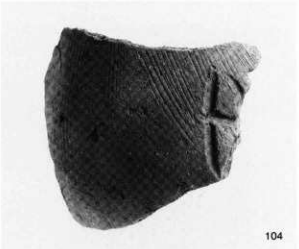
86

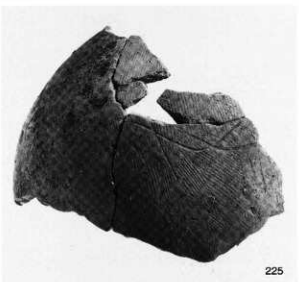
87

88

228

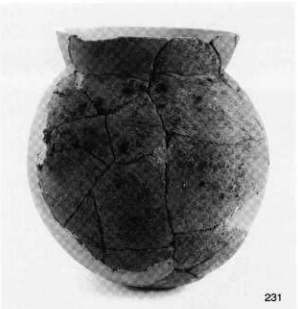
247


104


225

230

SK4 出土遺物（2）、包含層出土遺物（1）


231

168

234

121

207

125

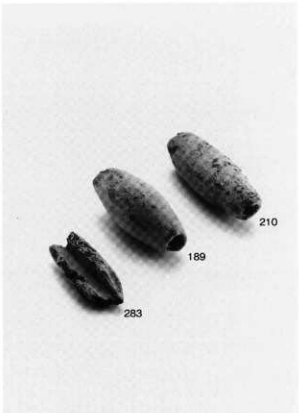
218

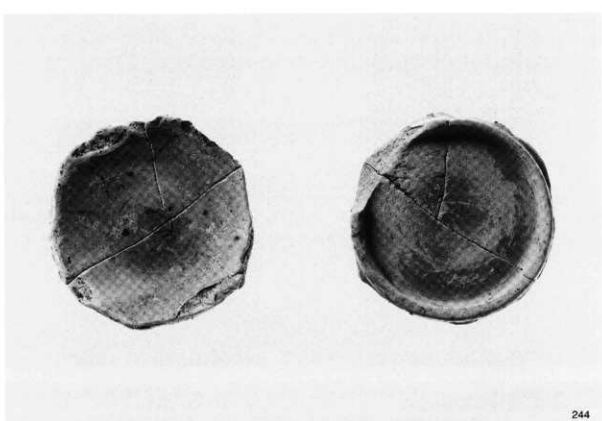
279

261

262

包含層出土遺物（2）

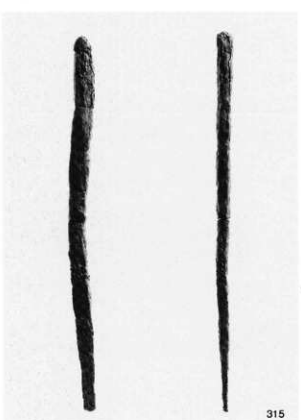


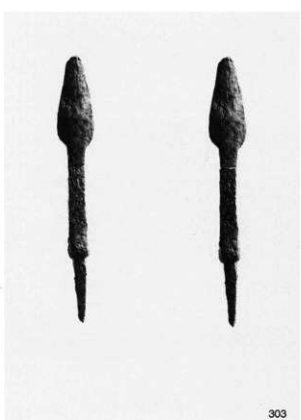


包含層出土遺物（3）

281

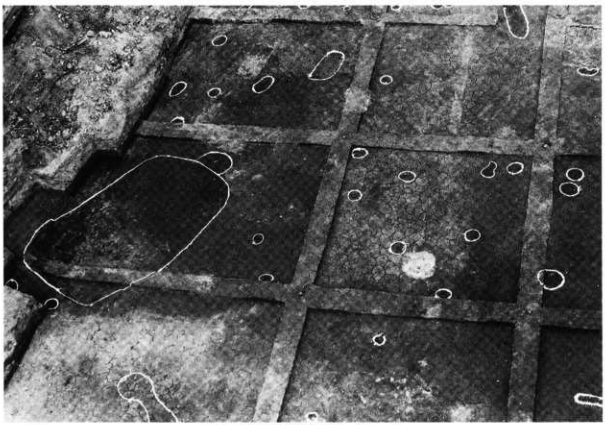
284


315

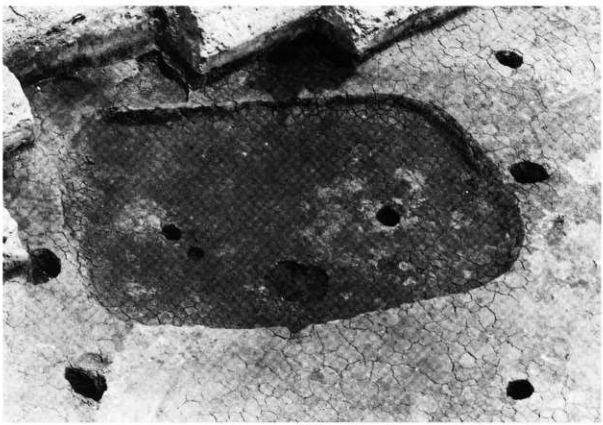

303

包含層出土遺物（4）

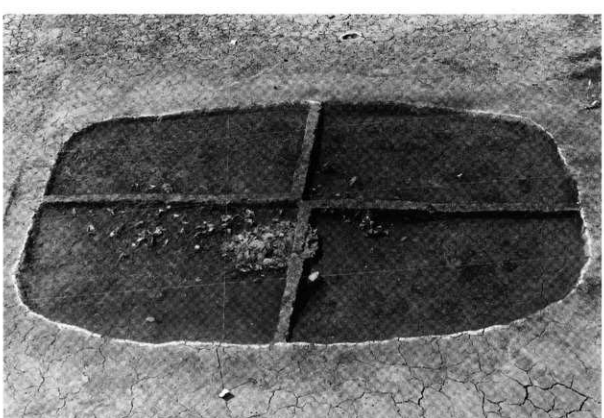
調査前全景（南東より）



調査区東部遺構検出状況（西より）

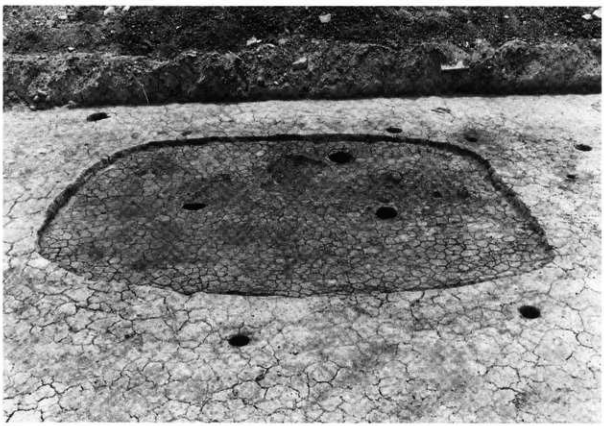


竪穴住居 SB1 完掘状況（南より）

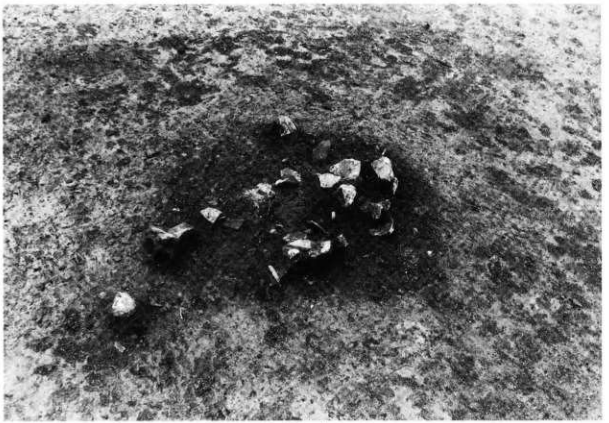


竪穴住居 SB2 遺物出土状況（1）（南より）

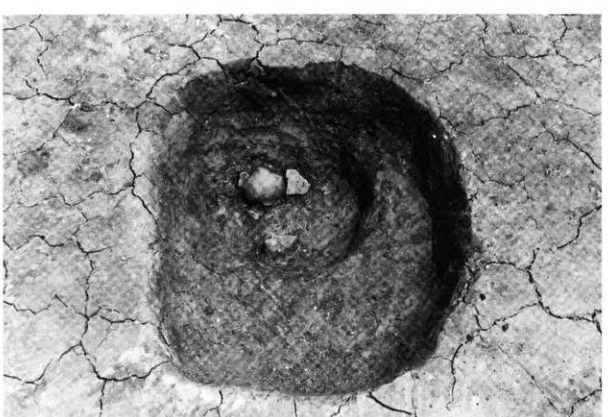
SB2 遺物出土状況（2）（北西より）



SB2 完掘状況（北より）

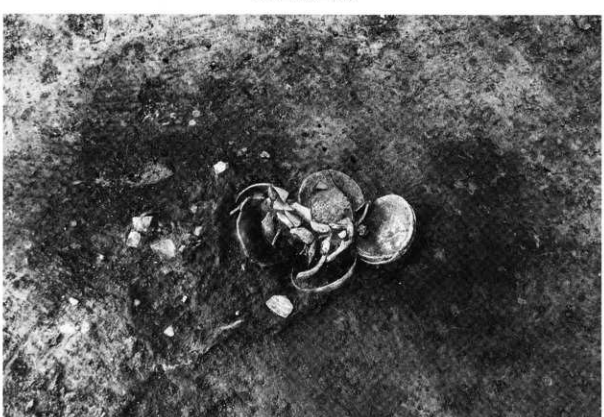


SK1 検出状況（西より）

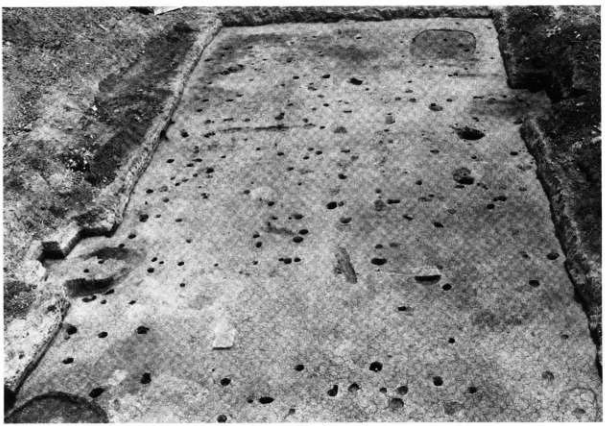


SK1 完掘状況

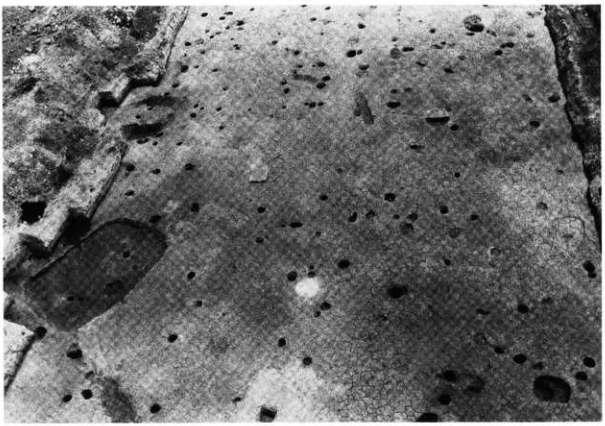
SK3 遺物出土状況



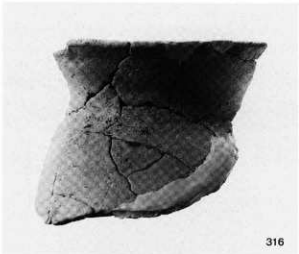
SK2 遺物出土状況



完掘状況（1）（西より）



完掘状況（2）（西より）


316

320

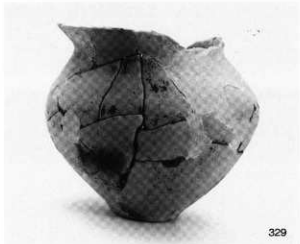
323

322

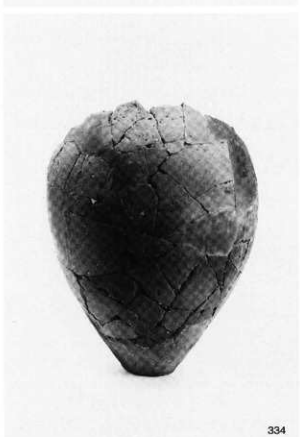
327

SB1 出土遺物、SB2 出土遺物（1）

328


329

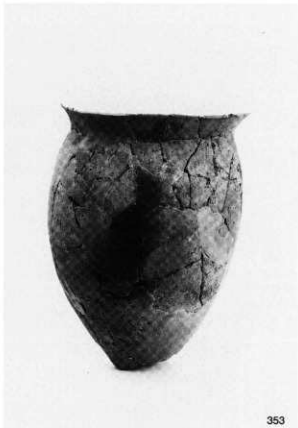
332


334

333

SB2 出土遺物（2）

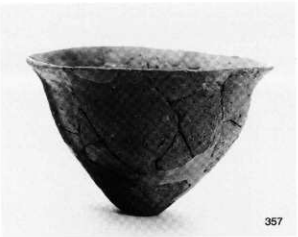
350

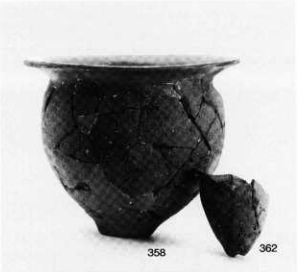

353

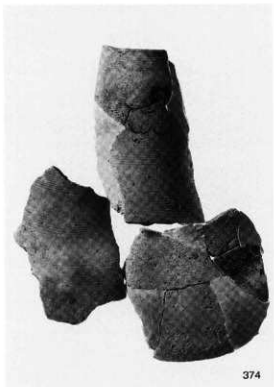
352

355

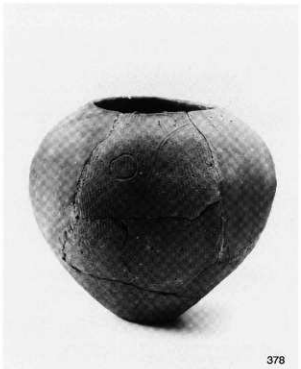
SB2 出土遺物（3）

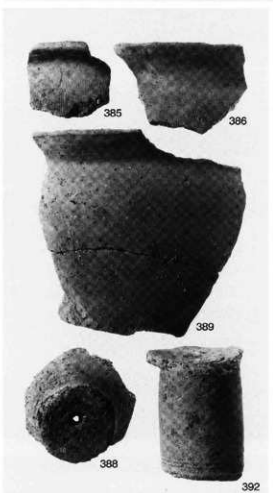






SB2 出土遺物（4）、SK3 出土遺物（1）





SK3 出土遺物 (2)

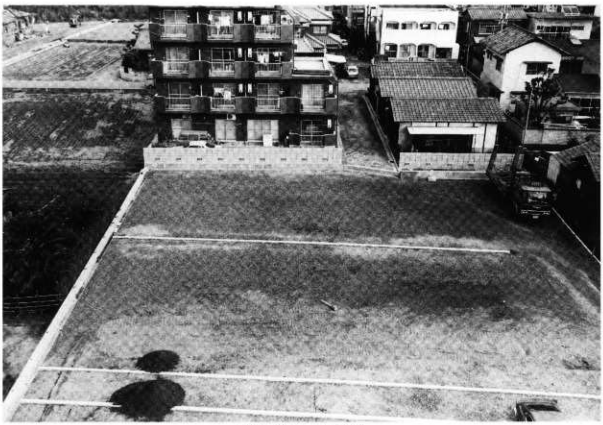
396～398、400～411

414

416

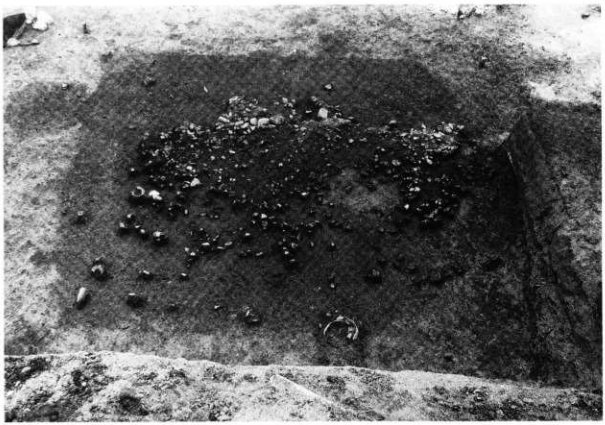
419

SK2 出土遺物、包含層出土遺物

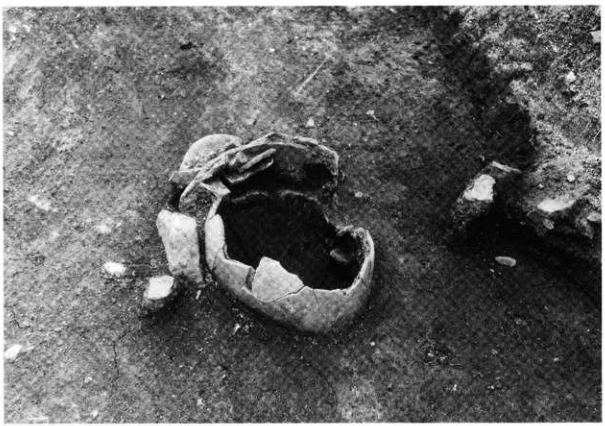


調査前全景（南より）

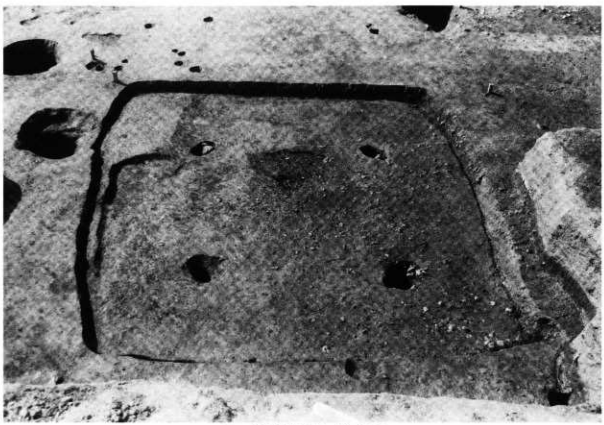
掘削状況（西より）



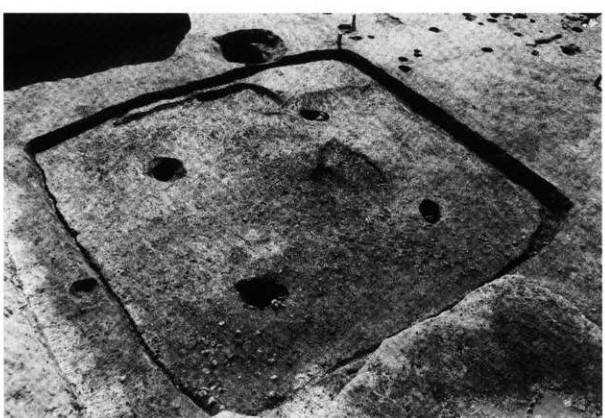
竪穴住居 SB1 遺物出土状況（1）（北より）



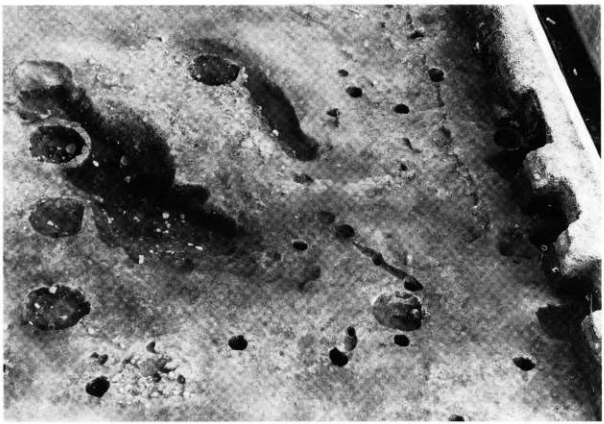
SB1 遺物出土状況（2）（西より）



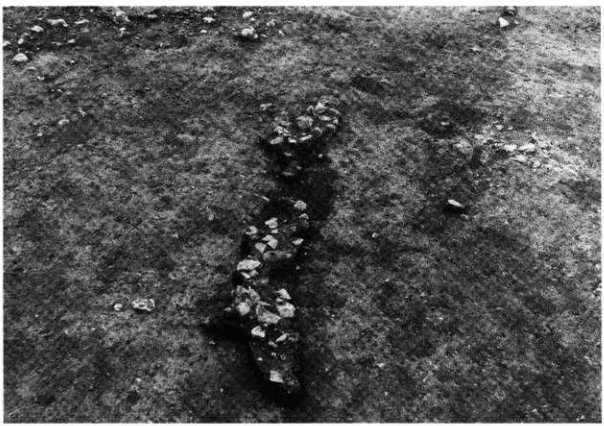
SB1 完掘状況（1）（北より）



SB1 完掘状況（2）（北西より）

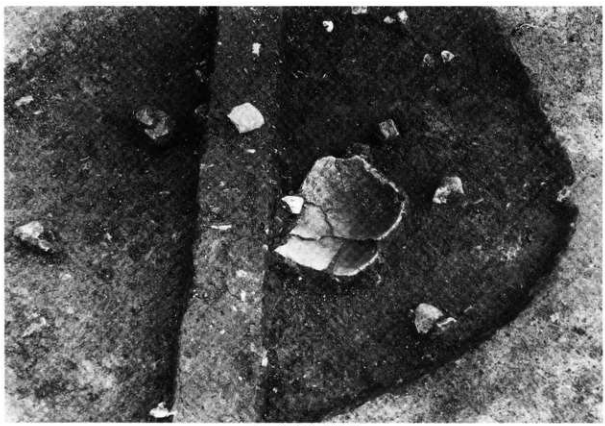


掘立柱建物 SB2（南より）



SX2 遺物出土状況（西より）

SK1 検出状況（北より）



SK1 遺物出土状況